



第1章

大学入学までの進路選択過程

1 . 大学入学までの進路選択過程

本章では、大学生となった調査対象者が、小学校時代から大学入学直前までにどのような進路選択の過程を経てきたのか、その実態を明らかにする。具体的には、小・中学校時代の保護者とのかかわりやさまざまな体験、高校時代の教科の履修状況や好き嫌い、進路選択にあたっての相談先や情報源、進路を選択する際の悩み、高校時代の進路変更、大学入学試験の状況などが、興味・関心の方向性（志向のタイプ）、専攻する専門領域（文系・理系、学部系統）によってどのように異なるかを検討する。

ここでの問題関心は、学生それぞれが専門領域を選択する際にどのような条件が作用するのかという「進路選択の促進要因」である。さらに、それとは反対に、どのような条件があると、特定の学部系統には進学しない傾向を強めるのかという「進路選択の阻害要因」も明らかにしたい。とりわけ、理工系人材の育成という観点から、理系の学部系統（理工学系統、医歯薬看護学系統、農水産学系統）への進学を促進する要因と阻害する要因について考察していくことにしよう。

1 . 小・中学校時代の保護者とのかかわり

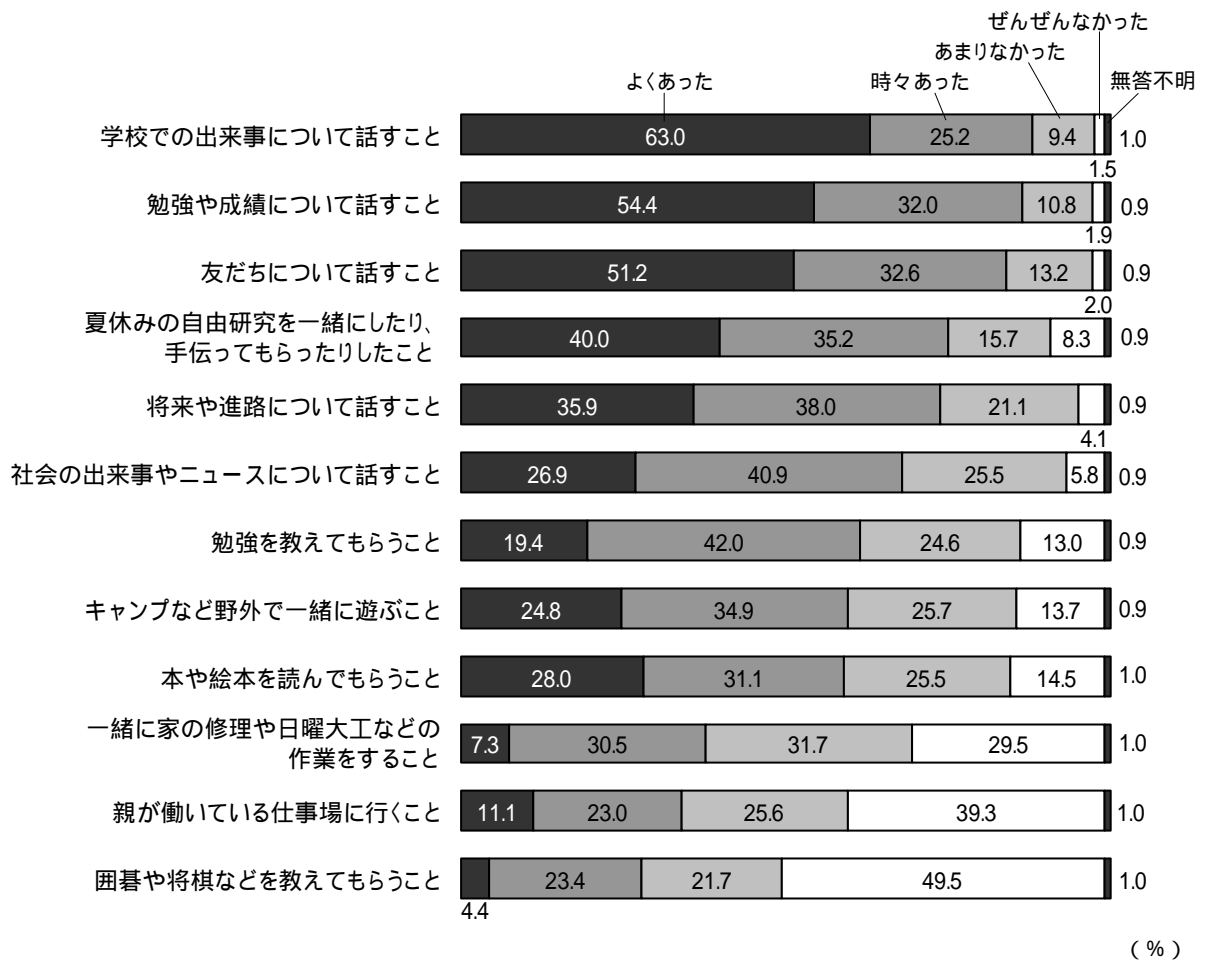
（1）全体の傾向

最初に、調査対象者となった大学生たちが、小・中学生だったころに保護者とどのようなかかわりをしてきたかについてたずねた結果をみてみよう。図1-1-1は、調査対象者全体の数値を、「よくあった」と「時々あった」の合計が多い順に示している。

上位の項目からみると、「学校での出来事について話すこと」（88.2%）、「勉強や成績について話すこと」（86.4%）、「友だちについて話すこと」（83.8%）など、日常的な会話コミュニケーションがいずれも高い比率になっている。「将来や進路について話すこと」（73.9%）、「社会の出来事やニュースについて話すこと」（67.8%）などのかかわりも多く、会話が親子のかかわりの基本になっていることがわかる。

一方で、行動レベルでのかかわりをみると、「夏休みの自由研究を一緒にしたり、手伝ってもらったりしたこと」が75.2%と四人に三人を超えるが、「勉強を教えてもらうこと」（61.4%）、「キャンプなど野外で一緒に遊ぶこと」（59.7%）、「本や絵本を読んでもらうこと」（59.1%）、「一緒に家の修理や日曜大工などの作業をすること」（37.8%）は相対的に少なくなる。

図1-1-1 小・中学校時代の保護者とのかかわり

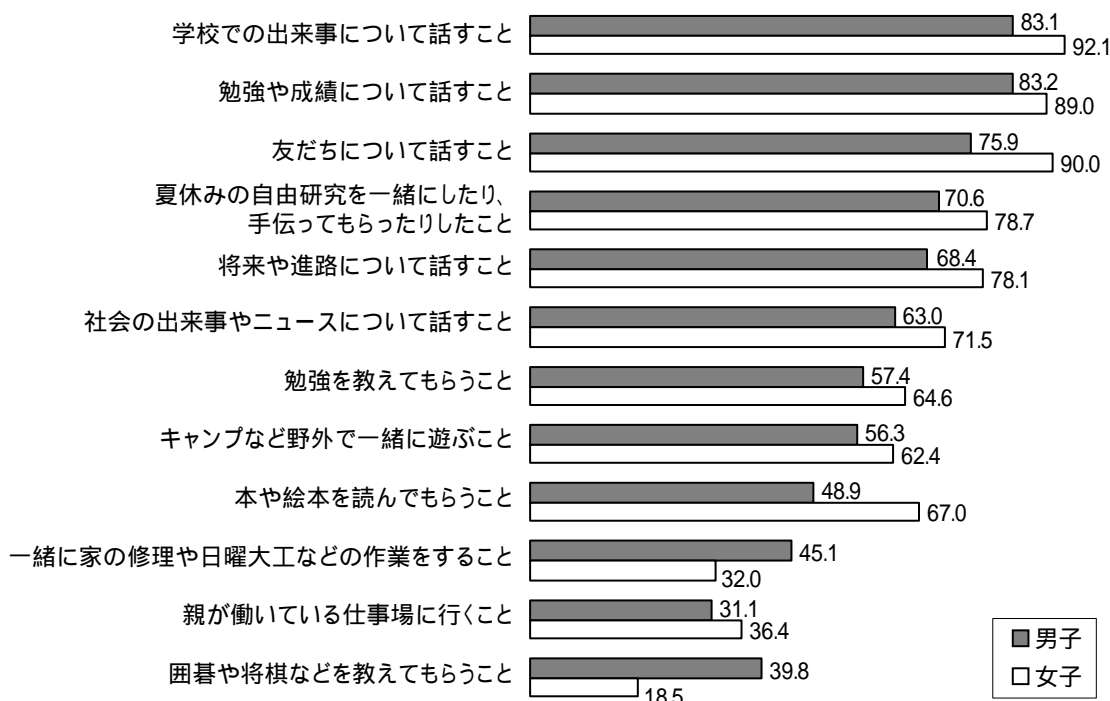


(2) 性や文系 - 理系による違い

このような保護者とのかかわりは、性による違いが大きい。図1-1-2に性別データを示したが、「学校での出来事について話すこと」をはじめとする会話や「本や絵本を読んでもらうこと」などの言語的な働きかけは、女子のほうが「あった」(よくあった+時々あった)と回答する比率が高い。男子のほうが多いのは、「一緒に家の修理や日曜大工などの作業をすること」「囲碁や将棋などを教えてもらうこと」の2項目である。保護者の働きかけが、子どもの性によって異なることがわかる。

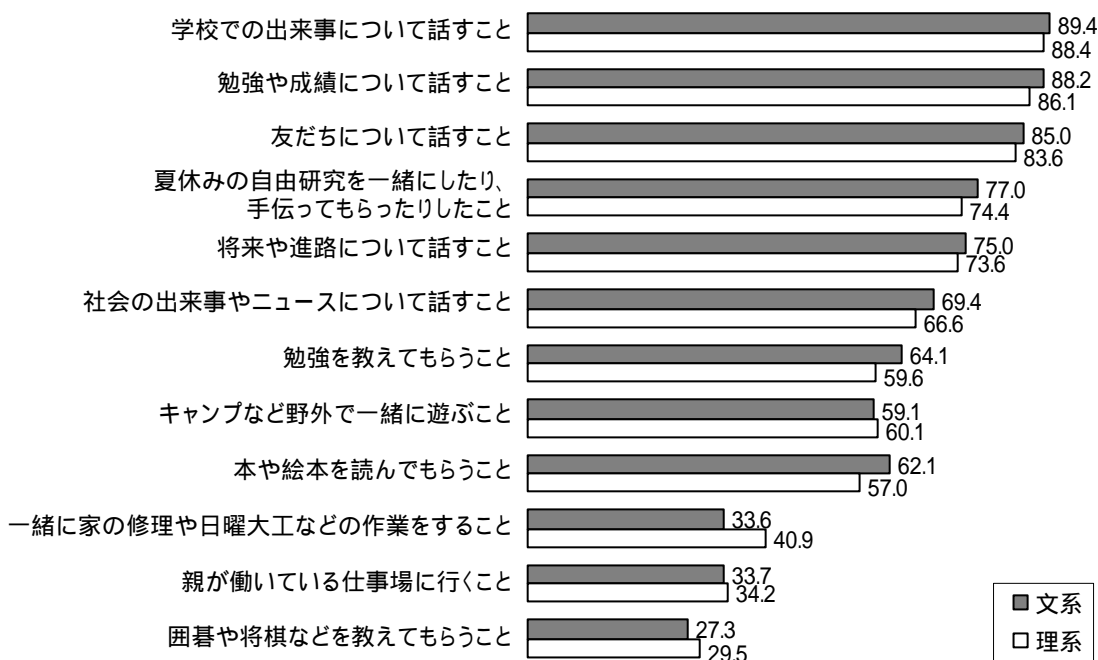
それでは、文系学生と理系学生では、保護者とのかかわりがどのように違うのだろうか。それを示したのが、図1-1-3である。これをみると、文理差はそれほど大きくはないことがわかる。しかし、「本や絵本を読んでもらうこと」という働きかけは文系学生に多く、「一緒に家の修理や日曜大工などの作業をすること」は理系学生に多いなど、若干の違いがみられる。総じて、会話でのコミュニケーションや読書といった言語活動は文系に多く、野外活動や作業などの体験活動は理系に多いという傾向があり、保護者のかかわり方が文系・理系の進路選択に一定の影響を与えている様子がうかがえる。性と文系・理系の違いをクロスさせて「文系男子」「理系男子」「文系女子」「理系女子」に分けた表1-1-1も、同様の結果である。

図1-1-2 小・中学校時代の保護者とのかかわり(性別)



*数値は「よくあった」と「時々あった」の合計(%)。

図1-1-3 小・中学校時代の保護者とのかかわり（文理別）



*数値は「よくあった」と「時々あった」の合計(%)

*専攻の文理別について、「文系と理系の中間」「どちらでもない」と回答した者は図から省略した。

表1-1-1 小・中学校時代の保護者とのかかわり(性別・文理別)

(%)

	男子		女子	
	文系	理系	文系	理系
学校での出来事について話すこと	84.4	<u>83.2</u>	(93.3)	92.6
勉強や成績について話すこと	84.4	<u>83.0</u>	(91.3)	88.7
友だちについて話すこと	76.9	<u>75.5</u>	(91.5)	90.2
夏休みの自由研究を一緒にしたり、手伝ってもらったりしたこと	71.8	<u>69.9</u>	(81.1)	78.0
将来や進路について話すこと	71.0	<u>67.1</u>	78.2	(78.9)
社会の出来事やニュースについて話すこと	64.1	<u>62.2</u>	(73.8)	70.1
勉強を教えてもらうこと	59.4	<u>55.8</u>	(67.7)	62.9
キャンプなど野外で一緒に遊ぶこと	<u>54.1</u>	57.3	(63.0)	62.5
本や絵本を読んでもらうこと	51.6	<u>47.2</u>	(70.8)	> 65.1
一緒に家の修理や日曜大工などの作業をすること	41.3	< (48.3)	27.4	< 34.7
親が働いている仕事場に行くこと	<u>30.5</u>	31.7	(36.2)	(36.2)
囲碁や将棋などを教えてもらうこと	38.2	(42.4)	<u>18.4</u>	19.0

*数値は「よくあった」と「時々あった」の合計。

*専攻の文理別について、「文系と理系の中間」「どちらでもない」と回答した者は表から省略した。

* < > は文系と理系で5ポイント以上の差があったもの。

* () は文系男子、理系男子、文系女子、理系女子のなかでの最高値、下線は最低値を示す。

(3) 学部系統ごとの違い

さらに、進学した学部系統別に保護者とのかかわりをみたのが、表1-1-2である。理系の学生に着目すると、理工学系統の学生に「一緒に家の修理や日曜大工などの作業をすること」「囲碁や将棋などを教えてもらうこと」、医歯薬看護学系統に「本や絵本を読んでもらうこと」、農水産学系統に「キャンプなど野外で一緒に遊ぶこと」「一緒に家の修理や日曜大工などの作業をすること」が多いことがわかる。ただし、これらは、理工学系統に男子が多いなど、該当学部に一方の性が多い傾向が強く反映されたものと考えられる。

表1-1-2 小・中学校時代の保護者とのかかわり（学部系統別）

(%)

	全体	人文科学系統	社会科学系統	教育学系統	理工学系統	医歯薬看護学系統	農水産学系統
学校での出来事について話すこと	88.2	89.7	86.1	90.2	85.6	91.8	86.1
勉強や成績について話すこと	86.4	87.5	86.0	88.2	84.3	89.3	84.1
友だちについて話すこと	83.8	86.9	81.0	84.2	79.5	88.9	81.4
夏休みの自由研究を一緒にしたり、手伝ってもらったりしたこと	75.1	77.9	74.7	74.1	71.9	80.8	72.7
将来や進路について話すこと	73.9	74.3	72.4	79.5	68.4	81.6	74.2
社会の出来事やニュースについて話すこと	67.8	69.8	66.3	70.1	63.6	71.7	65.5
勉強を教えてもらうこと	61.4	64.1	61.6	60.7	56.9	63.3	63.0
キャンプなど野外で一緒に遊ぶこと	59.7	60.2	57.6	59.8	56.5	61.9	71.0
本や絵本を読んでもらうこと	59.1	64.1	55.5	60.9	52.2	64.9	61.0
一緒に家の修理や日曜大工などの作業をすること	37.7	31.2	37.5	36.6	42.9	36.5	44.7
親が働いている仕事場に行くこと	34.1	31.6	33.0	38.6	32.1	37.6	39.0
囲碁や将棋などを教えてもらうこと	27.8	23.2	31.6	28.3	34.3	20.6	28.0

*数値は「よくあった」と「時々あった」の合計。

*専攻の学部系統別について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は表から省略した。

*○は全体の平均値よりも5ポイント以上、◎は10ポイント以上高いものを示す。

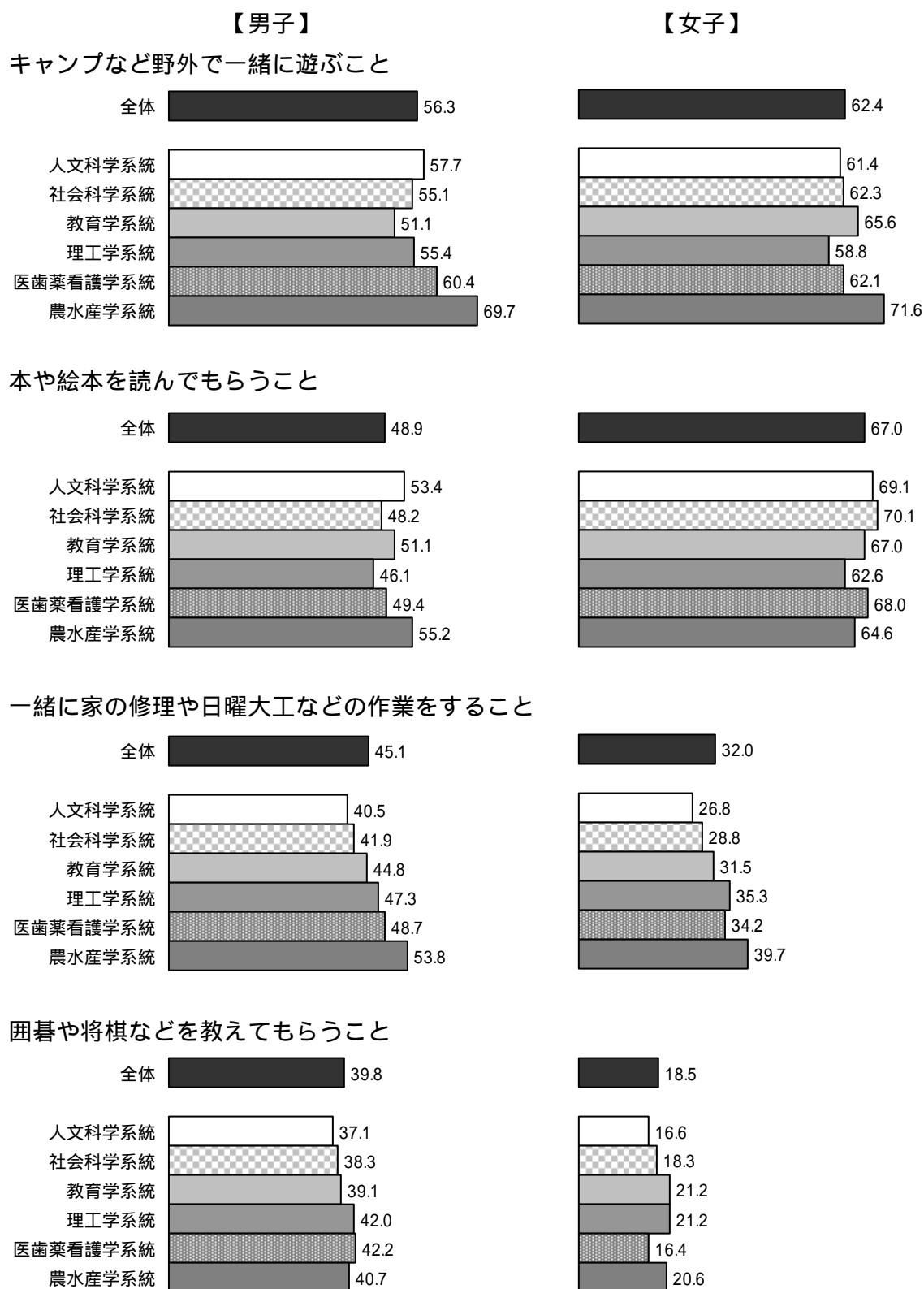
*一重下線は全体の平均値よりも5ポイント以上、二重下線10ポイント以上低いものを示す。

そこで、性と学部系統をクロスさせた結果を示した（**図1-1-4**）。

これをみると、性差が大きい項目が多いものの、男子も女子も同様の傾向を示す項目があることがわかる。「キャンプなど野外で一緒に遊ぶこと」は農水産学系統に多く、「一緒に家の修理や日曜大工などの作業をすること」も農水産学系統をはじめとする理系学部が多いという傾向は一貫して読み取れる。これらの働きかけは、専門領域の進路選択に一定の影響を及ぼしているようである。それに対して、医歯薬看護学系統に「本や絵本を読んでもらうこと」が多いのは同系統に女子が多いことが、理工学系統に「囲碁や将棋などを教えてもらうこと」が多いのは同系統に男子が多いことが強く影響している。

保護者のかかわりのすべてが特定の専門領域への進学を促進（もしくは排除）するものではないが、ある一定のかかわりは進学した学部系統と関連をもっていることがわかる。理系分野の志向を伸ばすうえで家庭にどのような役割が求められるかは、もう少し多くの項目を設定して詳細な検討をする必要があるだろう。

図1 - 1 - 4 小・中学校時代の保護者とのかかわり（性別・学部系統別）



*数値はいずれも、「よくあった」と「時々あった」の合計（％）。

*専攻の学部系統について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は図から省略した。

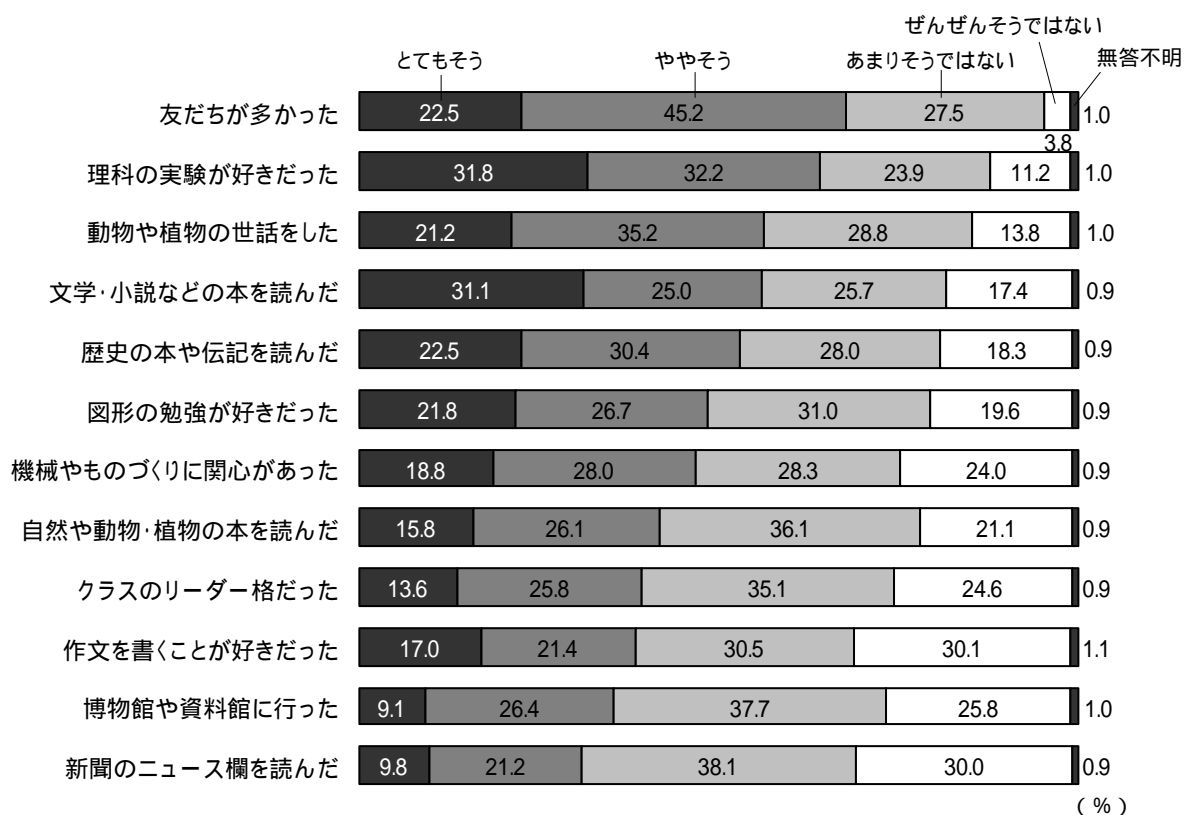
2. 小・中学校時代の体験

(1) 全体の傾向

続いて、小・中学校時代の体験についてみていこう。図1-2-1は、小・中学校時代をふりかえってもらい、それぞれの質問項目にあるような体験をしたかどうか、そのような志向があったかどうかをたずねた結果である。設問の作成にあたって、文系に特徴的だと考えられる活動や志向（以下、文系的活動）、理系に特徴的だと考えられる活動や志向（以下、理系的活動）、その他の活動や志向（友だち関係にかかわるものなど）が項目に含まれることを意識した。

「とてもそう」と「ややそう」という肯定の多い項目をみると、「友だちが多かった」（「とてもそう」と「ややそう」の合計：67.7%、以下同様）に続き、「理科の実験が好きだった」（64.0%）、「動物や植物の世話をした」（56.4%）など理系的活動が上位にきている。その次に、「文学・小説などの本を読んだ」（56.1%）、「歴史の本や伝記を読んだ」（52.9%）という文系的活動が多い結果となった。

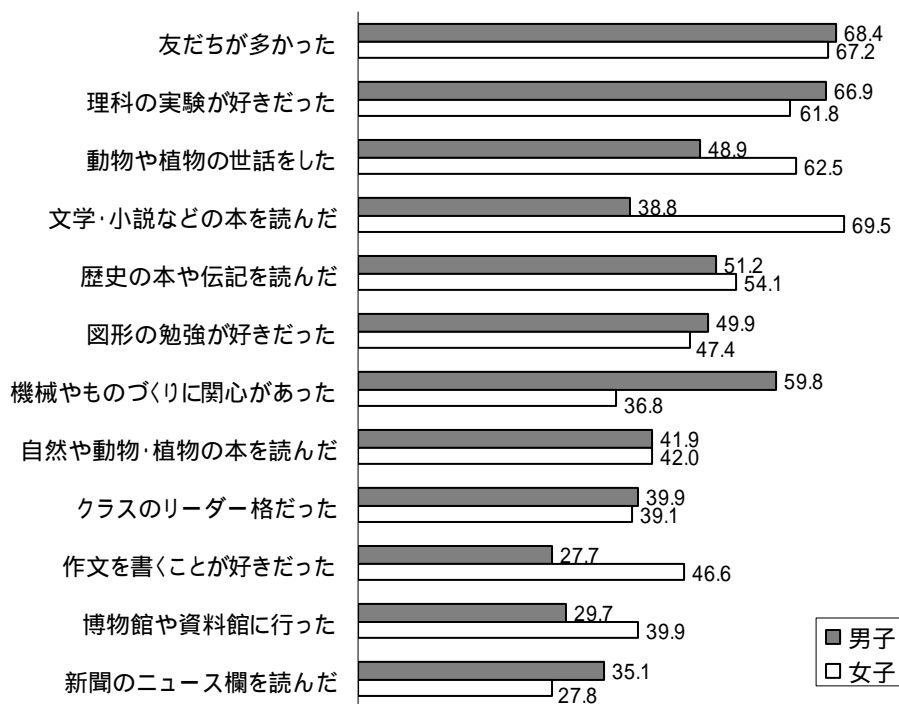
図1-2-1 小・中学校時代の体験



(2) 性による違い

こうした体験を性別で示したのが図1-2-2である。これをみると、単純に男子が理系的活動を、女子が文系的活動を主にしているわけではなく、同じ理系的活動でも男子に好まれるものと女子に好まれるものが混在していることがわかる。たとえば、理系的活動でみると、「機械やものづくりに関心があった」は男子に多いが、「動物や植物の世話をした」は女子に多い。「理科の実験が好きだった」「図形の勉強が好きだった」「自然や動物・植物の本を読んだ」などは性差が小さい。文系的活動でみると「文学・小説などの本を読んだ」「作文を書くことが好きだった」は女子に多く、「新聞のニュース欄を読んだ」は男子に多いという結果になっている。

図1-2-2 小・中学校時代の体験（性別）

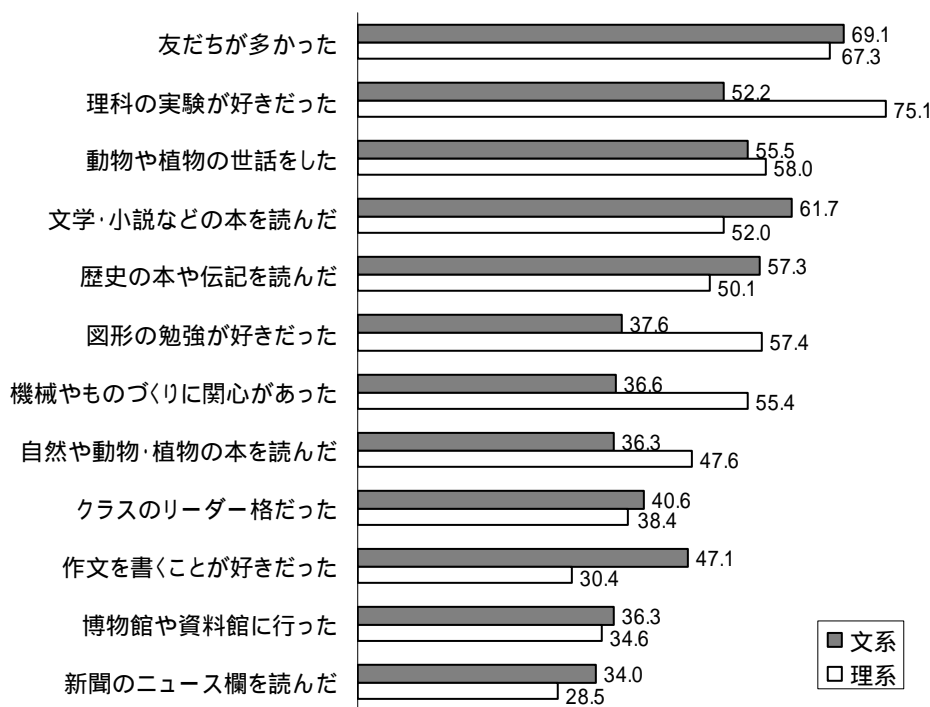


* 数値は「とてもそう」と「ややそう」の合計 (%)。

(3) 文系 - 理系の違い

それでは、文系学生と理系学生で、小・中学校時代の活動や志向はどのように異なるのだろうか。図1-2-3をみると、文系と理系で数値が大きく異なる項目があり、所期に設定した文系的活動・理系的活動に重なっている。文系学生に多いのは「文学・小説などの本を読んだ」「歴史の本や伝記を読んだ」「作文を書くことが好きだった」「新聞のニュース欄を読んだ」であり、理系学生に多いのは「理科の実験が好きだった」「図形の勉強が好きだった」「機械やものづくりに関心があった」「自然や動物・植物の本を読んだ」である。理系に進んだ学生は、すでに小・中学校時代から理系に特徴的な活動を好んで行い、文系に進んだ学生は文系に特徴的な活動を好んで行っている。こうした傾向は、進路選択のプロセスにも影響を与えていると推察される。

図1-2-3 小・中学校時代の体験（文理別）



* 数値は「とてもそう」と「ややそう」の合計 (%)

* 専攻の文理別について、「文系と理系の間」「どちらでもない」と回答した者は、図から省略した。

この結果を詳しくみたのが、表1-2-1である。「理系学生に多い体験」をみると、「機械やものづくりに関心があった」は性差が大きく、理系に進んだ女子(43.2%)よりも文系に進んだ男子(48.1%)のほうが比率が高くなっている。しかし、「理科の実験が好きだった」「図形の勉強が好きだった」「自然や動物・植物の本を読んだ」の3項目では、性差よりも文系・理系の差のほうが大きいことがわかる。理系のなかの性差、文系のなかの性差は小さい。

表1-2-1 小・中学校時代の体験(性別・文理別)

文系学生に多い体験

(%)

	全体		男子		女子	
	文系	理系	文系	理系	文系	理系
文学・小説などの本を読んだ	61.7	> 52.0	43.7	> 35.4	76.4	65.4
歴史の本や伝記を読んだ	57.3	> 50.1	56.5	> 47.6	57.6	> 52.0
作文を書くことが好きだった	47.1	30.4	37.7	19.1	54.8	39.9
新聞のニュース欄を読んだ	34.0	> 28.5	39.7	> 32.1	29.4	25.6

理系学生に多い体験

(%)

	全体		男子		女子	
	文系	理系	文系	理系	文系	理系
理科の実験が好きだった	52.2	75.1	55.3	78.0	49.8	72.9
図形の勉強が好きだった	37.6	57.4	38.8	60.3	36.7	55.0
機械やものづくりに関心があった	36.6	55.4	48.1	70.5	27.3	43.2
自然や動物・植物の本を読んだ	36.3	47.6	36.7	47.4	35.8	47.8

文理の差が小さい体験

(%)

	全体		男子		女子	
	文系	理系	文系	理系	文系	理系
友だちが多かった	69.1	67.3	70.6	66.6	67.8	67.8
動物や植物の世話をした	55.5	58.0	46.9	51.5	62.6	63.5
クラスのリーダー格だった	40.6	38.4	43.5	> 36.7	38.2	39.9
博物館や資料館に行った	36.3	34.6	29.9	29.0	41.6	39.0

*数値は「とてもそう」と「ややそう」の合計。

*専攻の文理別について、「文系と理系の中間」「どちらでもない」と回答した者は表から省略した。

* < > は5ポイント以上の差があったもの、 は10ポイント以上の差があったもの。

(4) 学部系統による違い

さらに、学部系統による違いを示したのが、表1-2-2である。「文系学生に多い体験」は人文科学系統の学生がとくに多く、理工学系統の学生が少ない。また、「理系学生に多い体験」は人文科学系統の学生がとくに少なく、理工学系統の学生にとくに多くなっている。これは、人文科学系統は文系の、理工学系統は理系の典型的な学部系統であり、その他の学部系統は文系と理系の複合的な領域を含んでいるためだろう。さらに、同じ理系であっても、理工学系統、医歯薬看護学系統、農水産学系統で、大きく数値が異なることが確認できる。

「理科の実験が好きだった」は、農水産学系統 79.4%、理工学系統 77.3%に対して、医歯薬看護学系統は 66.7%と 10ポイント以上低い数値である。また、「機械やものづくりに関心があった」は、理工学系統が 67.4%と飛びぬけて高いのに対して、農水産学系統 45.4%、医歯

表1-2-2 小・中学校時代の体験（学部系統別）

(%)

		全体	人文科学系統	社会科学系統	教育学系統	理工学系統	医歯薬看護学系統	農水産学系統
文系学生に多い体験	文学・小説などの本を読んだ	56.0	66.2	51.4	58.9	44.1	61.8	58.3
	歴史の本や伝記を読んだ	52.9	57.0	56.5	52.5	45.6	54.5	55.1
	作文を書くことが好きだった	38.3	51.7	38.2	43.8	23.7	41.4	32.0
	新聞のニュース欄を読んだ	31.1	31.4	37.6	29.7	29.9	28.5	26.1
理系学生に多い体験	理科の実験が好きだった	64.0	47.1	57.5	63.2	77.3	66.7	79.4
	図形の勉強が好きだった	48.5	35.5	40.6	45.5	63.3	47.5	52.9
	機械やものづくりに関心があった	46.8	33.1	43.7	41.1	67.4	38.0	45.4
	自然や動物・植物の本を読んだ	41.9	36.0	35.4	38.2	46.5	42.0	66.0
文理差小さい体験	友だちが多かった	67.7	66.7	71.1	70.1	64.6	72.2	63.0
	動物や植物の世話をした	56.5	57.0	49.0	59.2	51.3	61.7	77.9
	クラスのリーダー格だった	39.4	34.7	43.1	54.5	35.7	44.4	34.2
	博物館や資料館に行った	35.4	37.2	35.7	33.7	33.1	33.5	41.7

* 数値は「とてもそう」と「ややそう」の合計。

* 専攻の学部系統別について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は表から省略した。

* ○は全体の平均値よりも5ポイント以上、◎は10ポイント以上高いものを示す。

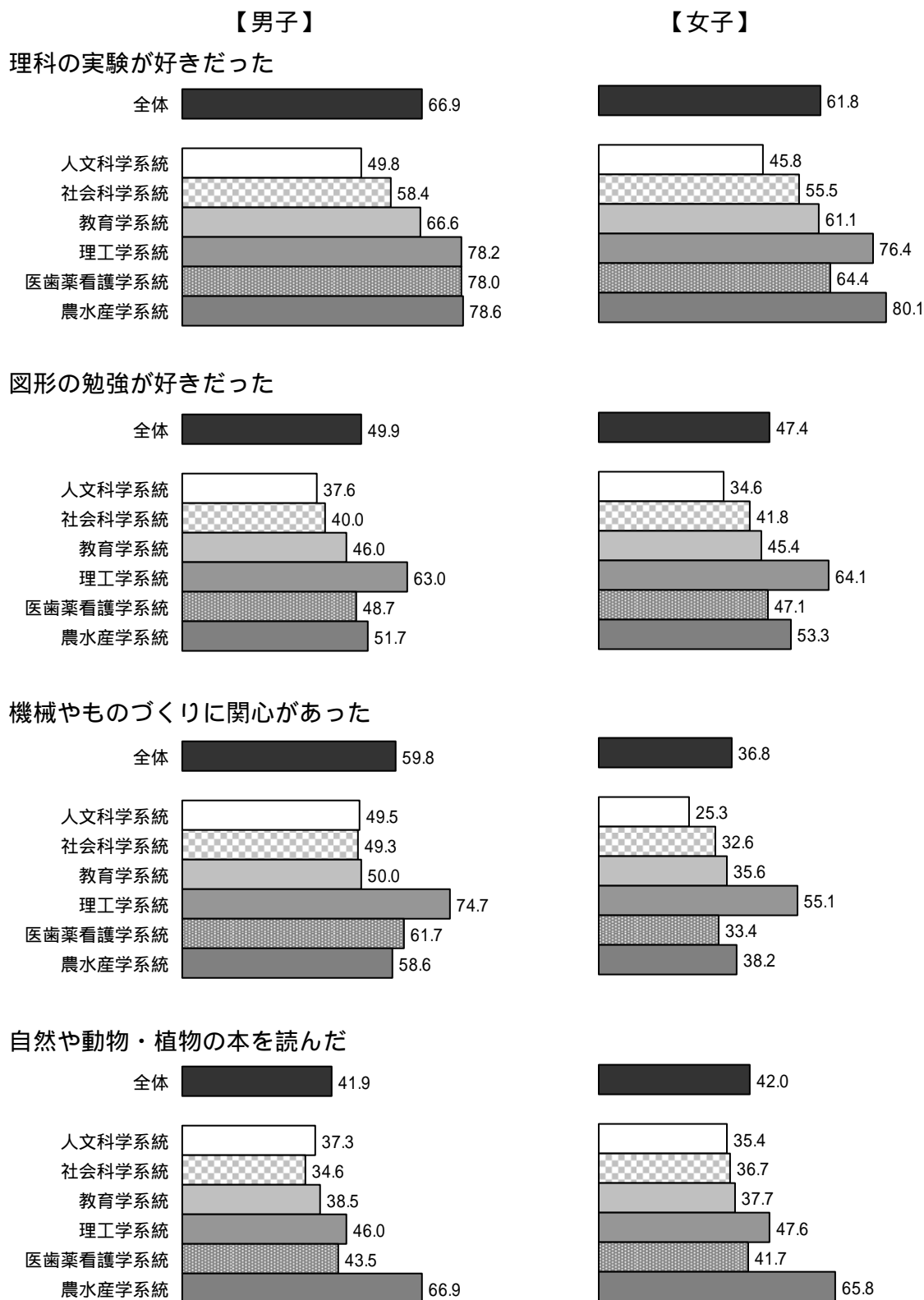
* 一重下線は全体の平均値よりも5ポイント以上、二重下線 10ポイント以上低いものを示す。

薬看護学系統 38.0%と 20 ポイント以上の差が開いている。「自然や動物・植物の本を読んだ」では、農水産学系統が 66.0%であるのに対して、理工学系統で 46.5%、医歯薬看護学系統で 42.0%となっている。小・中学校時代の体験や志向は、同じ理系のなかでも進んだ学部系統によってずいぶん異なっており、進路分化の大きな要因になっている可能性を示唆する。

こうした結果について、性による違いも考慮して示したのが図 1 - 2 - 4 である。この図をみると、同じ学部系統内では男子と女子の傾向が似ており、理工学系統や農水産学系統の学生は男女ともに「理科の実験」や「図形の勉強」が好きだったことがわかる。また、「機械やものづくりに関心があった」は性差があるものの、同じ性別のなかで比べると理工学系統の数値が高い点は一致している。「自然や動物・植物の本を読んだ」は、農水産学系統の学生が男女を問わず高い比率である。

これまで概観してきたように、小・中学校時代の体験や志向は、学部系統によって大きく異なっており、専門領域の選択に大きな影響を与えていると考えられる。今回の調査は、大学生に対する振り返り調査であるため、調査対象者本人が現在置かれている状況に関連する過去の経験を強く記憶している可能性がある。しかし、それを考慮に加えたとしても、学部系統ごとに各項目の肯定比率をみると最大値と最小値が約 20～30 ポイント程度開いているものもある。たとえば、「理科の実験が好きだった」は人文科学系統 47.1%に対して農水産学系統 79.4%(差は 32.3 ポイント)、「機械やものづくりに関心があった」は人文科学系統 33.1%に対して理工学系統 67.4% (差は 34.3 ポイント) などとなっている。他の項目でも差が大きく開いているものが多く、小・中学校時代の体験や志向と大学入学時の専門領域の選択との関連は、強いと言えそうである。

図1-2-4 小・中学校時代の体験（性別・学部系統別）



* 数値はいずれも、「よくあった」と「時々あった」の合計(%)。

* 専攻の学部系統について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は図から省略した。

(5) 小・中学校時代の体験の主成分分析

小・中学校時代の体験が、文系・理系や学部系統によって大きく異なることを確認してきた。ここでは、さらに属性ごとにどのような特徴や傾向をもつのかを把握するため、主成分分析を行って因子得点の平均値を比較することにしよう。

まず、表 1 - 2 - 3 は、小・中学校時代の体験について主成分分析を行った結果である。ここでは、4つの成分が確認できた。成分 1 は、「歴史の本や伝記を読んだ」「文学・小説などの本を読んだ」「新聞のニュース欄を読んだ」「博物館や資料館に行った」「作文を書くことが好きだった」といった文系的活動を中心としているので「人文系因子」と名づける。成分 2 は、「機械やものづくりに関心があった」「理科の実験が好きだった」「図形の勉強が好きだった」など理学・工学的な活動によって構成されているため「理工系因子」と名づけることにする。成分 3 は、「クラスのリーダー格だった」「友だちが多かった」の 2 項目が強く表れているので「人間関係因子」と名づける。最後に、成分 4 は、「動物や植物の世話をした」「自然や動物・植物の本を読んだ」の 2 項目が中心であるため「生物愛着因子」と名づけることにしよう。

表 1 - 2 - 3 小・中学校時代の体験（主成分分析）

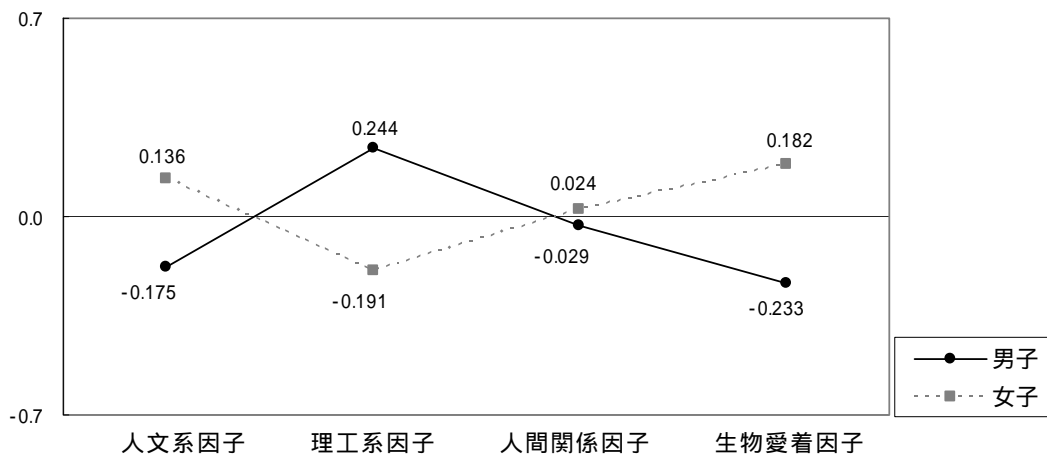
	成分 1	成分 2	成分 3	成分 4
	人文系因子	理工系因子	人間関係因子	生物愛着因子
歴史の本や伝記を読んだ	0.75934	0.01334	-0.00900	0.10728
文学・小説などの本を読んだ	0.74050	-0.10936	-0.00045	0.18210
新聞のニュース欄を読んだ	0.65985	0.16745	0.04581	-0.27912
博物館や資料館に行った	0.50111	0.18870	0.04428	0.37861
作文を書くことが好きだった	0.48174	-0.16077	0.36661	0.15635
機械やものづくりに関心があった	0.01594	0.79497	-0.03057	0.11424
理科の実験が好きだった	0.03076	0.78259	0.06062	0.15508
図形の勉強が好きだった	0.01089	0.75335	0.11410	0.00968
クラスのリーダー格だった	0.07956	0.09257	0.85175	-0.05443
友だちが多かった	-0.02436	0.07478	0.83884	0.11234
動物や植物の世話をした	0.06095	0.12095	0.10163	0.85542
自然や動物・植物の本を読んだ	0.45405	0.33988	-0.05798	0.52709

* 因子抽出法: 主成分分析

* 回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法 (5 回の反復で回転が収束)

さて、それぞれの成分の因子得点の平均値を性別で比較したのが、**図1 - 2 - 5**である。結果を概観すると、男子は人文系因子が低いのにに対して理工系因子が高く、理系に特徴的な活動を豊富にしている様子を表している。反対に女子は、人文系因子が高く、理工系因子が低い。他者との会話や言語的な活動が充実している様子がうかがえる。また、生物愛着因子が高いことも特徴であり、同じ理系分野でも生物学に関連する専門領域を志向する傾向と関連しているものと推察される。

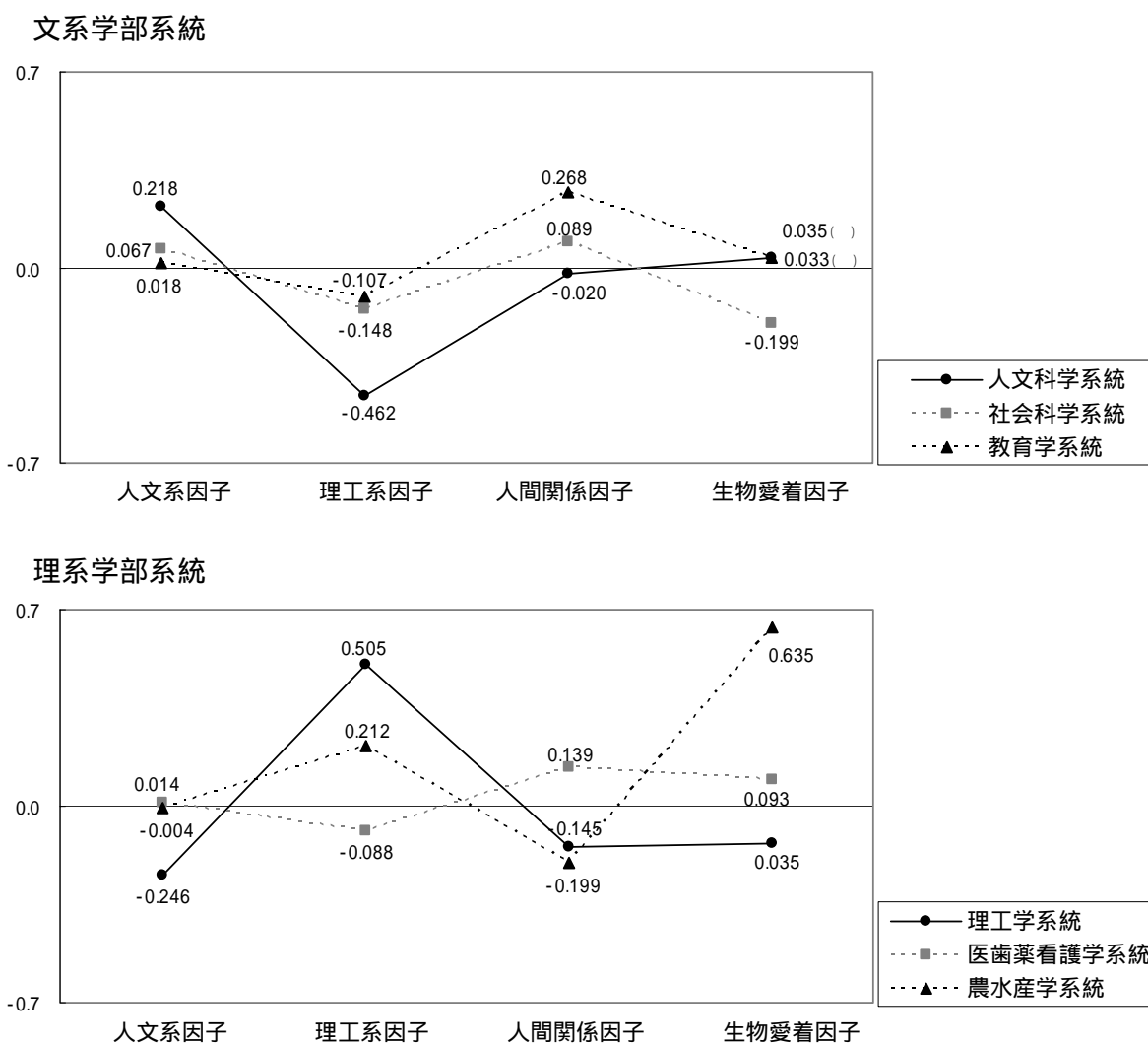
図1 - 2 - 5 小・中学校時代の志向（性別）



次に、学部系統ごとのプロフィール（図1-2-6）を確認しよう。文系学部系統の3系統の特徴であるが、人文科学系統は人文系因子が高く、理工系因子が低いという文系の特徴をよく表している。それに対して、社会科学系統と教育学系統は、若干は同様の傾向があるものの、特徴は弱まっている。教育学系統は、人間関係因子が高く、リーダーシップや友だちづくりなどにおいて優れた能力を有していることがうかがえる。

理系学部系統の3系統をみると、理工学系統は人文系因子が低く、理工系因子が高いという理系の特徴を表している。医歯薬看護学系統は、理工系因子が弱く、相対的に理系的な活動はあまりしていない一方で、人間関係因子と生物愛着因子が高い傾向がある。農水産学系統は、人間関係因子の得点は低いものの、生物愛着因子が高い。生物への関心が、専攻する専門領域と結びついていることが表れている。

図1-2-6 小・中学校時代の志向（学部系統別）



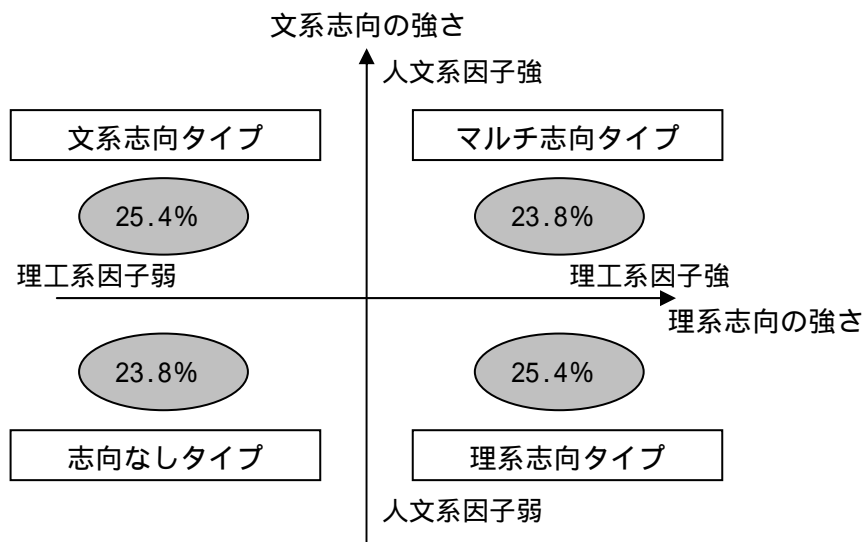
* 専攻の学部系統別について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は図から省略した。

(6) 小・中学校時代の志向のタイプ

次に、主成分分析の結果から、人文系因子と理工系因子を用いて、文系と理系の志向の強さを表すタイプを作成した。人文系因子の因子得点が上位2分の1に位置する者を「人文系因子強」、下位2分の1に位置する者を「人文系因子弱」とし、同様に理工系因子を用いて「理工系因子強」「理工系因子弱」のグループを作って、このかけあわせで4タイプを創出した(図1-2-7)。

最初に、「マルチ志向タイプ」であるが、これは人文系因子の得点も理工系因子の得点も、いずれも高いグループである。文系的活動も理系的活動も、ともによくしてきたと想定される。次に、「文系志向タイプ」であるが、これは人文系因子の得点が高く、理工系因子の得点が低いグループであり、文系的活動を中心にして小・中学校時代を過ごしてきたと考えられる。さらに、「理系志向タイプ」は、人文系因子の得点が低く、理工系因子の得点が高いグループで、こちらは理系的活動が中心だった者である。最後に、いずれの得点も低いグループを「志向なしタイプ」とした。なお、「志向なし」と名づけたが、人文系因子および理工系因子の得点が低いだけで、他の志向(人間関係志向や生物愛着志向)が高い可能性もある。しかし、ここでは文系・理系の志向ごとの傾向を中心に検討するため、便宜的にこの4タイプを設定して、それぞれの志向の有無をもとにタイプの命名をしたことをご了承いただきたい。

図1-2-7 小・中学校時代の志向のタイプ



* 該当項目に対する無回答などによりタイプを判別できなかった1.6%は、省略している。

さて、それぞれのタイプは、どのような特徴をもっているのだろうか。まず、**図1 - 2 - 8**で性別の構成比をみると、「マルチ志向タイプ」「志向なしタイプ」は男女ほぼ同率であるが、「文系志向タイプ」は女子に多く、「理系志向タイプ」は男子に多い傾向を示している。

では、保護者からの働きかけは、こうしたタイプの形成にどのように寄与しているのだろうか。このことを検討するために、性別にそれぞれのタイプの親子関係をみてみよう。**表1 - 2 - 4**に示されるように、文系と理系のいずれの志向も有する「マルチ志向タイプ」は、保護者からさまざまな働きかけを受けており、かかわりが密である。また、「文系志向タイプ」も保護者からの働きかけが多い。これは、男女ともにみられる傾向である。保護者の文化的な働きかけが、その後の文系的活動につながっている可能性を示唆している。それに比べると、「理系志向タイプ」は保護者からの働きかけが弱い。今回の質問項目では、小・中学校段階によくみられる保護者の働きかけを設定したが、理系志向は保護者の働きかけよりもむしろ、自発的な体験が影響しているとも考えられる。さらに、「志向なしタイプ」であるが、このタイプはほとんどの項目で最低値を示しており、相対的にみて保護者からの関与が少ないグループだとみることができる。保護者からの働きかけが十分でない、文系的活動・理系的活動を問わず、好きだとか関心があるといった知的好奇心を高めることが難しくなることを示している。その意味で、保護者のかかわりの重要性が裏づけられる結果だといえよう。

図1 - 2 - 8 小・中学校時代の志向のタイプ（性別）

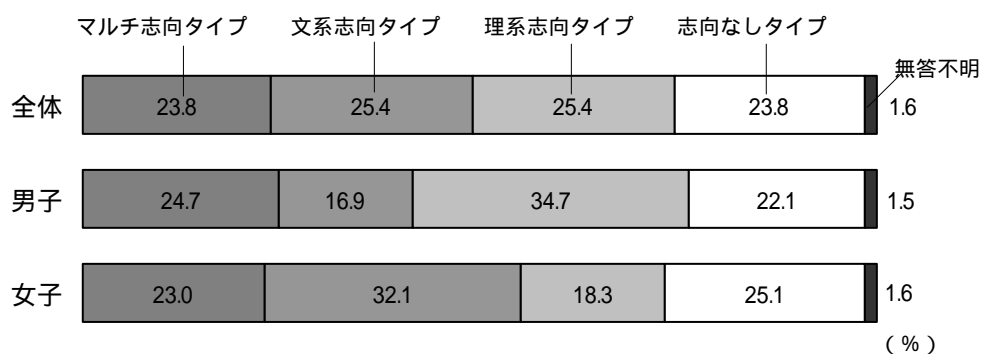


表1-2-4 小・中学校時代の保護者のかかわり（性別・志向タイプ別）

男子

(%)

	男子全体	マルチ志向タイプ	文系志向タイプ	理系志向タイプ	文理志向なしタイプ
学校の出来事について話すこと	83.1	88.4	91.0	81.4	76.7
勉強や成績について話すこと	83.2	86.3	88.3	82.3	80.4
友だちについて話すこと	75.9	81.5	82.0	74.2	70.0
夏休みの自由研究を一緒にしたり、手伝ってもらったこと	70.6	71.7	74.5	71.2	68.1
将来や進路について話すこと	68.4	76.0	75.2	64.5	63.4
社会の出来事やニュースについて話すこと	63.0	77.5	74.7	58.1	48.1
勉強を覚えてもらうこと	57.4	60.8	64.1	53.8	56.1
キャンプなど野外で一緒に遊ぶこと	56.3	64.2	56.2	57.5	47.8
本や絵本を読んでもらうこと	49.0	59.7	59.3	43.5	39.5
一緒に家の修理や日曜大工などの作業をする	45.2	54.2	41.5	51.4	30.0
親が働いている仕事場に行くこと	31.1	38.3	33.6	30.1	23.8
囲碁や将棋などを覚えてもらうこと	39.9	47.4	41.1	40.6	30.5

女子

(%)

	女子全体	マルチ志向タイプ	文系志向タイプ	理系志向タイプ	文理志向なしタイプ
学校の出来事について話すこと	92.1	93.5	94.1	92.9	90.9
勉強や成績について話すこと	88.9	89.0	93.0	88.8	87.0
友だちについて話すこと	90.0	90.6	92.1	91.7	89.0
夏休みの自由研究を一緒にしたり、手伝ってもらったこと	78.7	79.2	81.8	77.8	77.6
将来や進路について話すこと	78.1	80.4	83.6	76.7	73.0
社会の出来事やニュースについて話すこと	71.5	83.4	79.2	65.6	57.4
勉強を覚えてもらうこと	64.6	66.1	69.6	62.2	60.9
キャンプなど野外で一緒に遊ぶこと	62.4	69.5	62.8	65.1	55.9
本や絵本を読んでもらうこと	67.0	73.5	75.1	60.7	57.9
一緒に家の修理や日曜大工などの作業をする	32.0	44.8	27.4	38.2	23.0
親が働いている仕事場に行くこと	36.5	43.5	37.7	36.9	29.8
囲碁や将棋などを覚えてもらうこと	18.4	23.8	17.8	20.2	14.1

*数値は「よくあった」と「時々あった」の合計。

*専攻の学部系統別について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は表から省略した。

*○は男子、女子それぞれの平均値よりも5ポイント以上、◎は10ポイント以上高いものを示す。

*一重下線は男子、女子それぞれの平均値よりも5ポイント以上、二重下線は10ポイント以上低いものを示す。

続けて、それぞれのタイプが、大学進学に際して文系・理系のいずれを選択しているのか、どのような専門領域を選択しているのかを確認していきたい。まず、文系・理系の選択についてである。

図1 - 2 - 9に示した構成比によると、「マルチ志向タイプ」では、文系進学が3割であるのに対して理系進学は5割を超える。いずれの志向も有しているときは、どちらかという理系に進学する傾向が強いことがわかる。次に、「文系志向タイプ」であるが、5割強が文系に進学し、3割が理系に進学している。「理系志向タイプ」は、2割強が文系、6割5分が理系という割合である。いずれのタイプも、元来もっている志向性と異なる分野に進学するアンマッチ（「文系志向タイプ」なのに理系に進学している者、「理系志向タイプ」なのに文系に進学している者）が2～3割の程度で発生していることがわかる。こうした不一致の存在は、個人の有する志向や能力を十分に生かせないという点でも大きな課題である。

そこで、これをさらに詳しく検討するために進学状況（学部系統）をみたのが、図1 - 2 - 10である。志向タイプ別では、それぞれの志向タイプの者がどのような学部系統に進学しているのか、学部系統別では、それぞれの学部系統のなかに各志向タイプがどれくらいの比率で存在しているのかをみている。ここでは、志向タイプ別のグラフをもとに、「文系志向タイプ」と「理系志向タイプ」の進学先に注目しよう。まず、「文系志向タイプ」は3割強が人文科学系統に、2割弱が社会科学系統に進んでいる。理系学部への進学をみると、理工学系統と農水産学系統は1割に満たないが、医歯薬看護学系統へは16.4%であり、比較的多い。したがって、もともとの志向性と異なる分野に進学するアンマッチのなかにも、より不適合の度合いが強い者と弱い者がいることが示唆される。また、同時に、それぞれの学部系統の学科単位では、必ずしも不適合ではないケースが存在するものと推察される。「理系志向タイプ」も同様である。このタイプの文系学部への進学をみると、人文科学系統10.0%、社会科学系統13.4%、教育学系統5.6%となっていて、社会科学系統への進学が比較的多い。これも、高校までに履修してきた教科の学習（たとえば、数学など）を生かす、より不適合の度合いの少ない移行をした結果であると考えられる。

しかし、不適合の度合いが比較的強いアンマッチに限定しても、1～2割程度が志向と異なる学部系統に進学していると推察できる。このような状況が生まれる原因として、次のようなことが考えられる。

第一に、自らの志向についての理解が十分ではないことである。自己理解の不足による不適合を防ぐためにも、何が好きかという好みの次元だけでなく、自分がどのような経験を積み、どのような場面で能力を発揮してきたのか、それらが将来（専門領域、学部・学科、職業などの選択）とどのようにつながっていくのかを考える機会を、高校時代までもつ必要があるだろう。第二に、十分な自己理解を経たうえでの合理的選択の結果としての不適合である。希望する職業、資格の取得、就職全般の有利さ、就職後の報酬の高さなどを考慮して、もともとの志向とは異なる学部・学科を選択することはありうる。後述するが、職業に対す

図1-2-9 志向タイプごとの進学先（文理）

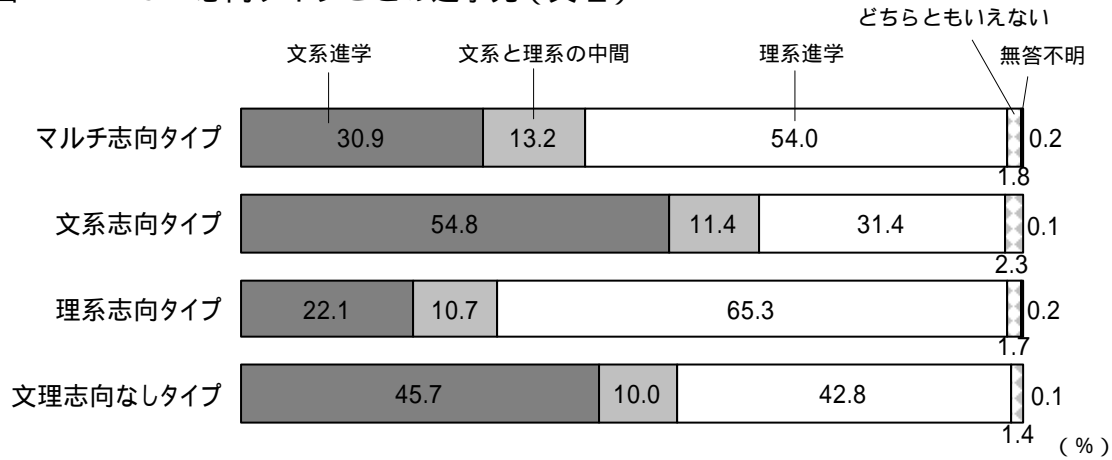
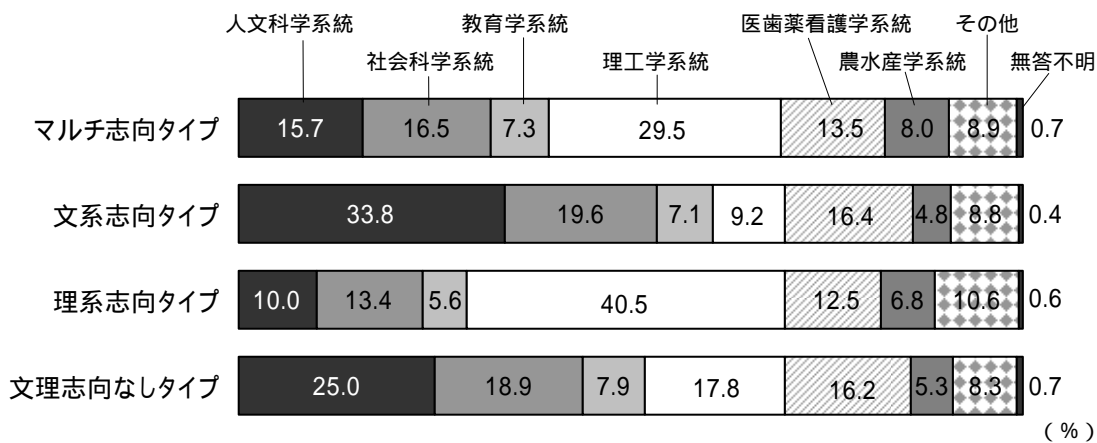
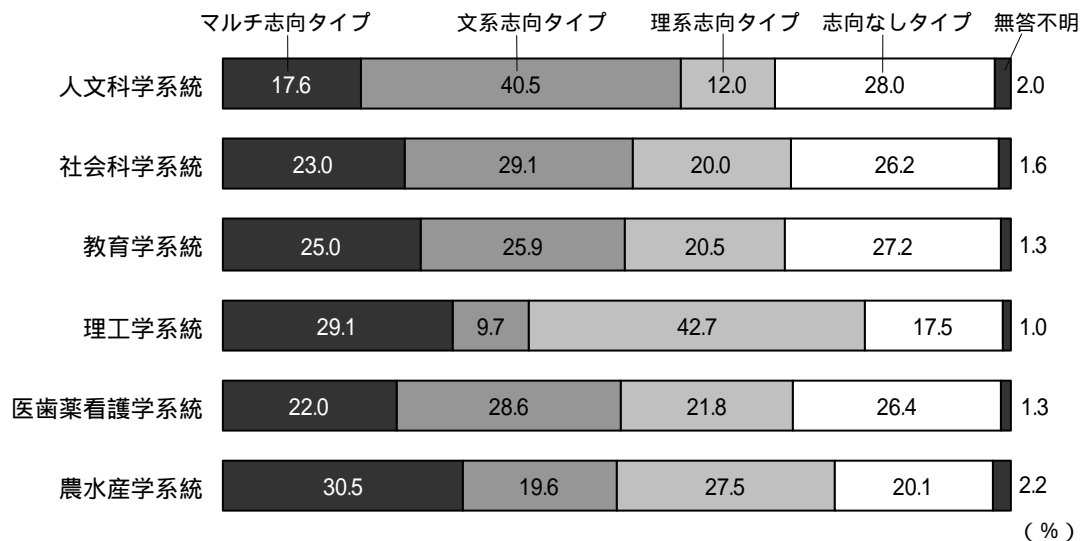


図1-2-10 志向タイプごとの進学先（学部系統）

志向タイプ別



学部系統別



* 専攻の学部系統別について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は図から省略した。

る意識の高さなどを考慮すると医歯薬看護学系統に進学した学生にこのタイプが多いようである。

しかし、こうした合理的選択をした者も、もともとの志向との不適合を潜在させており、進路選択上の悩みが多くなる可能性が高い(この点については、8節で詳しく述べたい)。また、大学入学後も、苦手な領域の教科の履修など学習上の課題を抱えやすくなることが考えられる。

こうしたことから、高校段階でこうした不適合層の存在を明らかにし、自己理解の不足による不適合をできるだけ防ぐこと、この層に対する進路指導上のサポートを厚くすること、大学入学後の学習上のサポートを厚くすることなどの施策が求められるのではないだろうか。

3. 高校時代の教科の好き嫌い

(1) 全体および性別の傾向

前節で、小・中学校時代から文系学生は文系的活動を、理系学生は理系的活動を好んでいることや、同じ文系・理系のなかでも学部系統で好む活動が異なる様子を明らかにしてきた。それでは、高校時代の教科の好き嫌いは、文系・理系の違いや専攻する専門領域の違いによってどのような差があるのだろうか。本節では、教科ごとに確認していくことにする。

表1-3-1は、各教科について履修率（「履修していなかった」と「無答不明」を除いた比率）と「好き」（「とても好き」と「やや好き」の合計）と回答した比率を表したものである。なお、「好き」の回答率については、履修しているものを母数とし、履修者のなかで「好き」と回答した者の比率を表している。

最初に、各教科の履修率を確認しよう。履修率は「現代文」「数学」「英語」は100%に近い値になっている。「無答不明」の者がいるので100%にはなっていないが、ほぼ全員が履修しているとみなしてよいであろう。これは、「古典」「保健体育」「家庭」「芸術」なども同様である。これに対して、地歴・公民や理科は科目によるばらつきがある。地歴・公民では、もっとも高い「世界史」が83.9%、もっとも低い「現代社会」が55.7%となっていて、いずれの教科も半数以上が履修しており、ばらつきの程度は小さい。しかし、理科は、もっとも高い「化学」が92.1%と9割以上が履修しているのに対して、「総合理科」6.5%、「地学」19.9%となっていて、科目ごとの開きが大きい。

興味深いのは、履修率に性差がある教科が存在することである。地歴・公民では、「地理」が男子64.4%なのに対して、女子57.6%で6.8ポイント低くなっている。さらに、理科では、「物理」で男子の履修率が高い（男子63.1% > 女子41.9%）のに対して、「生物」では女子の履修率が高い（男子65.4% < 女子86.0%）。男子は「物理」を好み、女子は「生物」を好むという結果になっており、それぞれ20ポイント以上の差が開いている。

続いて、それぞれの教科について「好き」と回答した比率をみていこう。繰り返しになるが、ここでは「履修していない」「無答不明」の者を母数から除外し、履修した者が当該教科をどう認識しているかをみている。全体を概観すると、4～7割台の範囲に分布している。

「好き」の比率が相対的に高いのは、実技系の教科である。「芸術」「情報」「家庭」は7割を超え、「保健体育」は66.3%である。「現代文」「数学」「英語」の3教科は6割前後であるが、「古典」は4割強で「好き」と感じているものは少ない。地歴・公民では「日本史」が63.3%、理科では「生物」が70.3%と高い比率だが、他の教科は4～5割程度である。

ここでも性による違いをみたところ、好き嫌いには性差が大きいことがわかる。男子に好まれている教科は、「数学」（男子62.6% > 女子52.0%、以下同様）「地理」（66.9% > 52.1%）「現代社会」（64.4% > 51.1%）「政治・経済」（60.6% > 46.7%）「物理」（54.7% > 33.7%）「化学」（51.9% > 43.3%）「保健体育」（72.2% > 61.8%）である。「数学」「物理」「化学」

といった自然科学系教科と、「地理」「現代社会」「政治・経済」などの社会科学系教科が好まれていることがわかる。一方、女子で「好き」の比率が高いのは、「現代文」(54.6% < 65.6%)、「古典」(30.9% < 49.9%)、「英語」(57.5% < 64.4%)、「倫理」(44.5% < 52.2%)、「生物」(63.1% < 74.4%)、「総合理科」(49.3% < 55.7%)、「家庭」(66.8% < 80.3%)、「芸術」(68.8% < 86.1%)である。「現代文」「古典」「英語」といった言語系教科が好まれており、理科のなかでは「生物」の比率が高くなっている。このあと詳しく検討していくが、こうした教科の好き嫌いにみられる性差は、小・中学校時代の体験(志向タイプ)と関連している。

表1 3 - 1 高校時代の教科の履修率と好き嫌い(性別)

(%)

		履修率			「好き」の比率		
		全体	男子	女子	全体	男子	女子
国語	現代文	99.5	99.1	99.8	60.7	54.6	65.6
	古典	98.9	98.1	99.3	41.7	30.9	49.9
数学	数学	99.3	98.9	99.4	56.6	62.6	52.0
外国語	英語	99.2	99.1	99.5	61.4	57.5 <	64.4
地歴・ 公民	日本史	65.4	63.4	67.0	63.3	66.1	61.2
	世界史	83.9	81.8	85.6	49.7	52.4	47.5
	地理	60.5	64.4 >	57.6	59.0	66.9	52.1
	現代社会	55.7	55.1	56.2	56.9	64.4	51.1
	政治・経済	65.1	65.7	64.7	52.8	60.6	46.7
	倫理	56.8	55.9	57.7	48.8	44.5 <	52.2
理科	物理	51.3	63.1	41.9	45.0	54.7	33.7
	化学	92.1	92.1	92.1	47.1	51.9 >	43.3
	生物	77.0	65.4	86.0	70.3	63.1	74.4
	地学	19.9	21.7	18.3	55.8	58.1	54.1
	総合理科	6.5	6.9	6.1	52.3	49.3 <	55.7
実技	保健体育	98.6	98.4	98.7	66.3	72.2	61.8
	家庭	95.4	93.3	96.9	74.4	66.8	80.3
	情報	21.7	22.0	21.5	76.0	76.8	75.3
	芸術(音楽・美術・工芸・書道)	97.6	97.0	98.0	78.5	68.8	86.1

* 履修率は「履修していなかった」「無答不明」を除いた数値。

* 「好き」の比率は、履修者のうちで「とても好き」「やや好き」と回答した比率。

* < > は5ポイント以上の差があったもの、 > は10ポイント以上の差があったもの。

(2) 文系 - 理系の違いと教科ごとの特徴

続けて、教科の履修率（「履修していなかった」と「無答不明」を除いた比率）、「好き」の比率について、文系と理系の違いをみていこう（図1-3-1）。

最初に、国語であるが、履修率は文系学生も理系学生も、ほぼ100%である。「好き」の比率は、「現代文」「古典」ともに理系学生よりも文系学生のほうが高い。その比率は、「現代文」文系学生75.0% > 理系学生50.3%（以下同様）、「古典」51.3% > 33.2%である。差は、「現代文」24.7ポイント、「古典」18.1ポイントである。

「数学」も、履修率はほぼ100%である。「現代文」「古典」とは異なり、理系学生で「好き」の比率が高く、37.0% < 72.5%という結果になっている。差は35.5ポイントで国語の2教科よりも大きく、倍近く開いている。文系学生にとっては強い苦手意識をもちやすい教科で、文系・理系を選択するうえでの重要な要素となっていることが改めて確認できる。

「英語」も履修率はほぼ100%であるが、「好き」だったのは、文系学生67.3%に対して理系学生57.0%であり、差は約10ポイントである。「現代文」「古典」や「数学」に比べて、文系学生と理系学生の格差が小さいことがわかる。

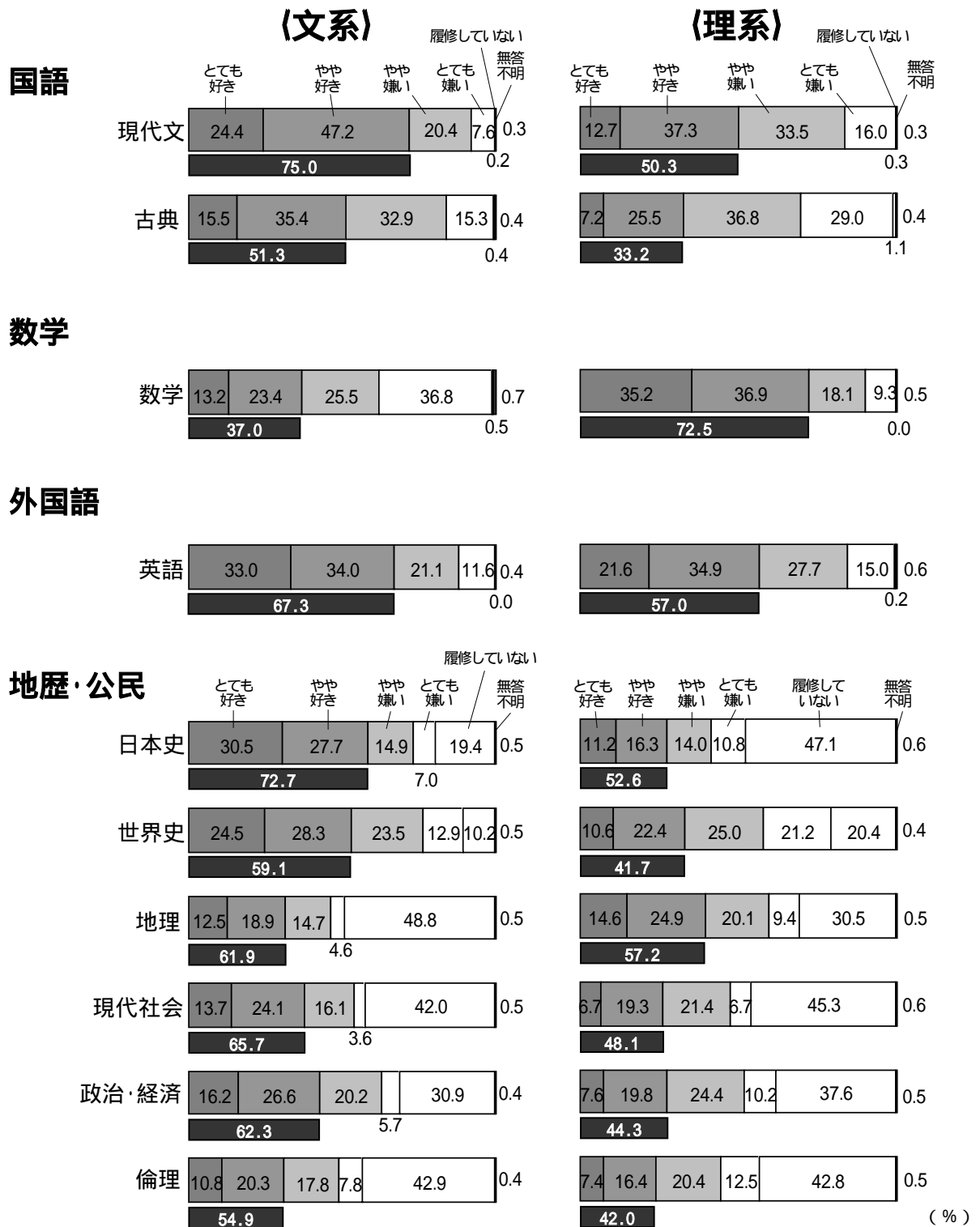
次に、地歴・公民をみてみよう。地歴・公民は科目によって、文系学生と理系学生で履修率が異なることがわかる。たとえば、「日本史」は文系学生では80.1%が履修しているのに対して、理系学生は52.3%しか履修していない。しかし、「地理」は理系学生の69.0%が履修しているのに対して、文系学生では50.7%である。「現代社会」「政治・経済」「倫理」などは、履修率には大きな差がなかった。

このような履修率の違いを念頭に置く必要はあるが、「好き」の比率を比べると、総じて文系学生のほうが地歴・公民の各科目を好んでいる様子がわかる。「日本史」「世界史」「現代社会」「政治・経済」などは20ポイント前後の差が開いている。「地理」は文系と理系の差が小さく、理系学生にも好まれている教科であることがわかる。

続いて、理科について検討しよう。理科も科目により、文系学生と理系学生で履修率が異なる。「物理」（35.4% < 66.9%）と「化学」（85.9% < 97.2%）は理系学生が高く、「生物」（87.3% > 67.2%）と「地学」（26.5% > 14.7%）は文系学生のほうが高い。こうした履修率の違いを考慮しても、文系学生が「物理」「化学」について「好き」と回答する比率が、著しく低いことがわかる。履修者のうちで「物理」を「好き」と回答する比率は、理系学生55.6%に対して文系学生は21.5%しかない。また、「化学」については、理系学生63.9%が「好き」と回答しているのに対して、文系学生は26.0%しかない。この2科目は、文系学生にとって苦手意識をもちやすい科目のようである。さらに、「生物」は履修した文系学生の約6割が「好き」としているものの、これも理系学生より20ポイント低い。このような差の大きさを考えると、文系学生は「理科ぎらい」（とくに「物理ぎらい」と「化学ぎらい」）が著しいことがわかる。

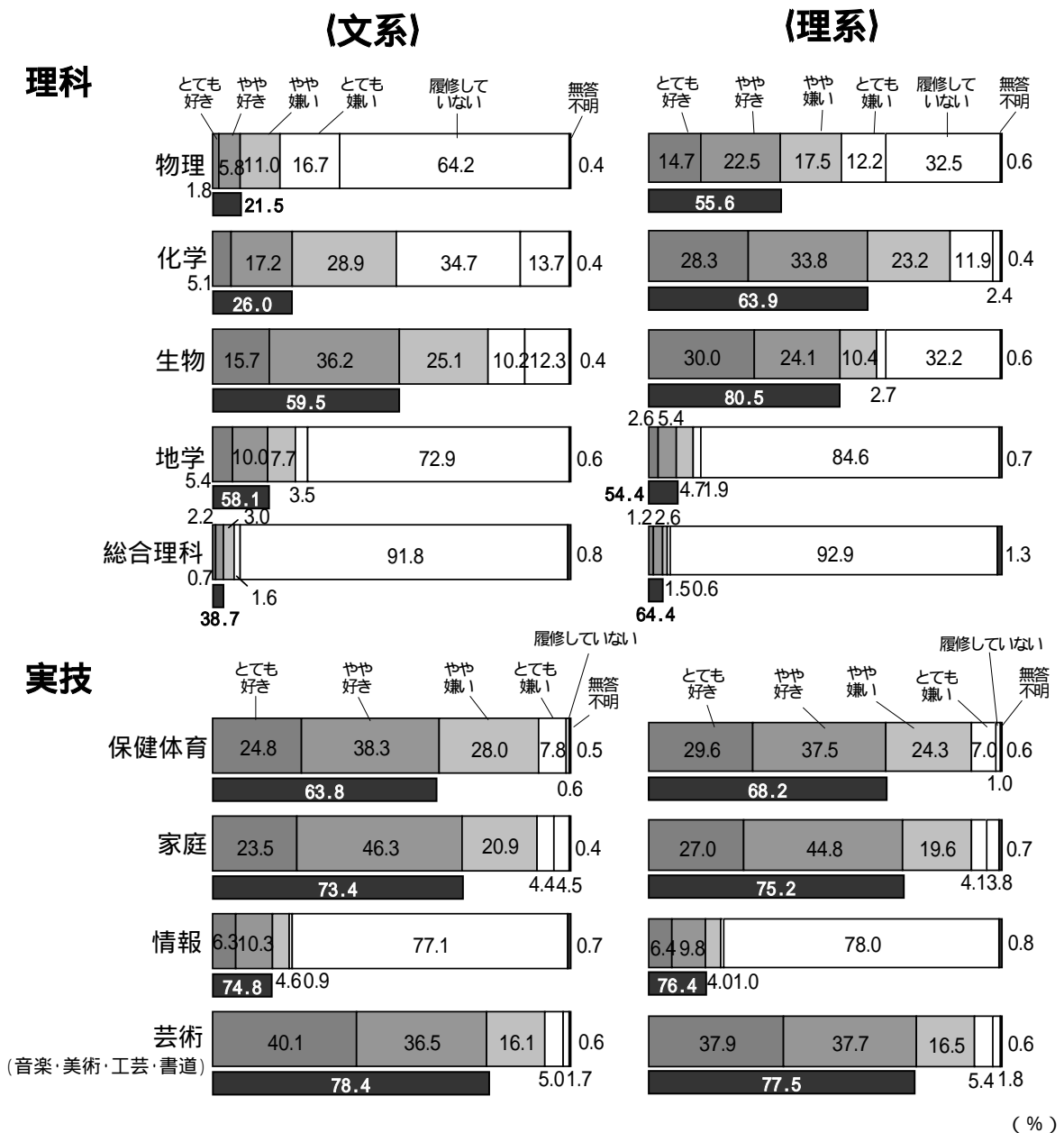
ちなみに、実技系の教科については、履修率、「好き」と回答する比率ともに、文系学生と理系学生の差はほとんどみられなかった。

図1-3-1 高校時代の教科の好き嫌い(文理別)



* 帯グラフの下に示した白抜き数字は、履修者のうちで「とても好き」「やや好き」と回答した比率。
 * 専攻の文理別について、「文系と理系の中間」「どちらでもない」と回答した者は図から省略した。

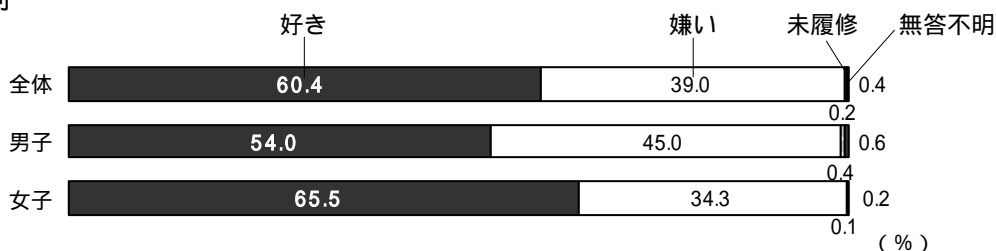
図1-3-1 高校時代の教科の好き嫌い(文理別)【前頁からの続き】



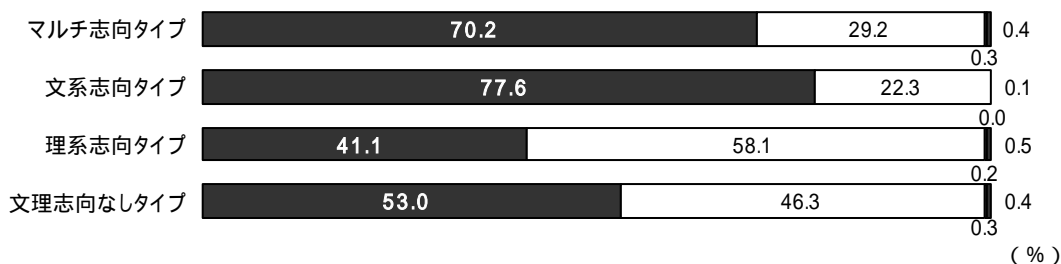
* 帯グラフの下に示した白抜き数字は、履修者のうちで「とても好き」「やや好き」と回答した比率。
 * 専攻の文理別について、「文系と理系の中間」「どちらでもない」と回答した者は図から省略した。

図1 - 3 - 2 高校時代の「現代文」の好き嫌い

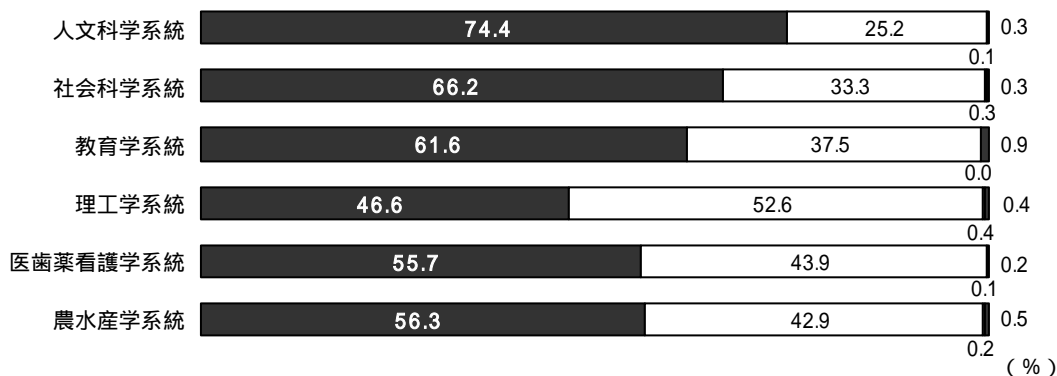
全体、性別



志向タイプ別



学部系統別



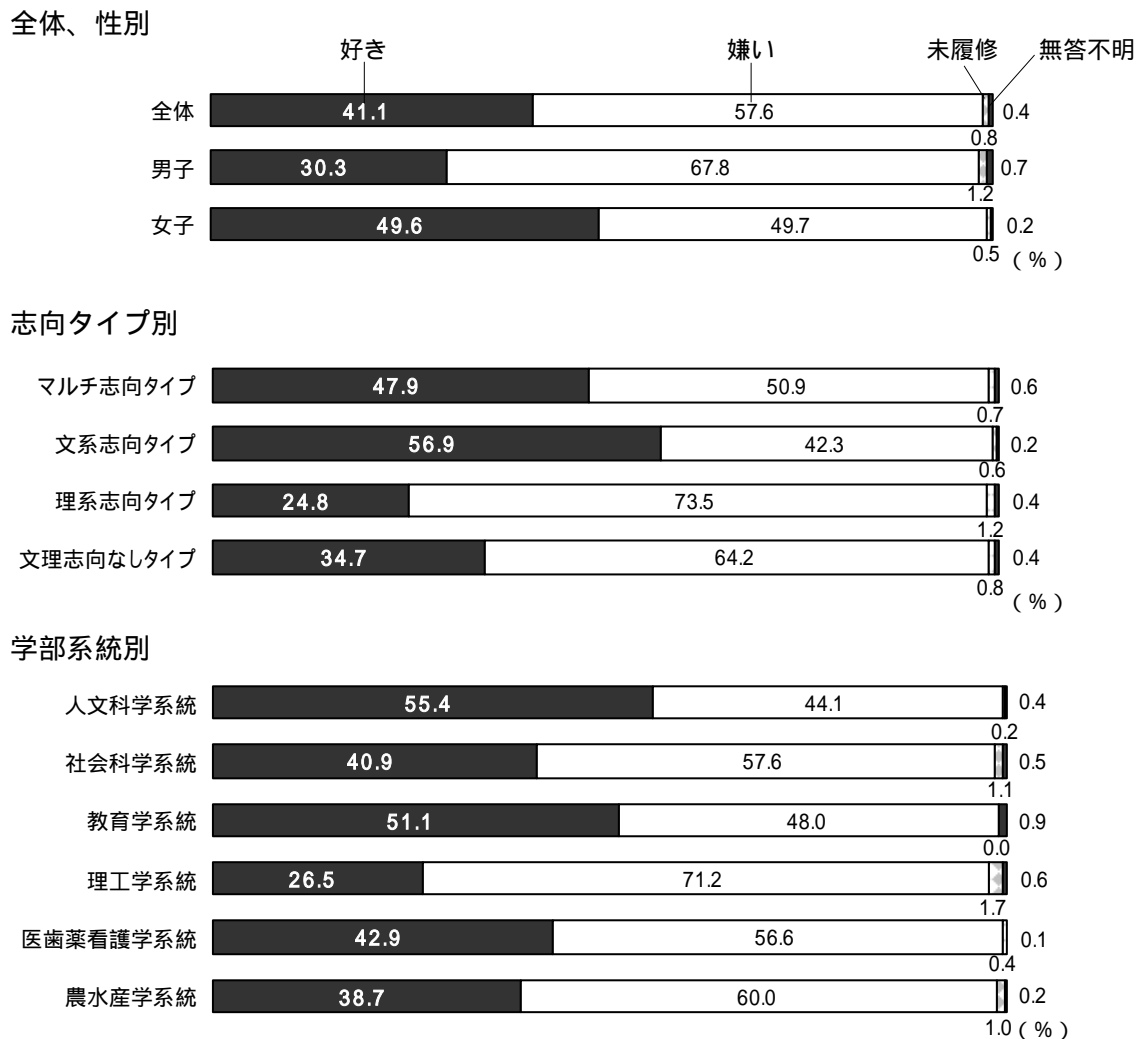
- * 「好き」は「とても好き」と「やや好き」の合計、「嫌い」は「とても嫌い」と「やや嫌い」の合計を示す。
- * 「未履修」は「履修していない」の数値。
- * 専攻の学部系統別について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は図から省略した。

ここからは、教科ごとに好き嫌いの状況について、詳しく検討していく。なお、以下では、「好き」「嫌い」の比率が、「未履修」と「無答不明」の者を母数に含めた数値であり、表1 - 3 - 1、図1 - 3 - 1と算出方法が異なっていることに留意したい。

それでは、図1 - 3 - 2から「現代文」の特徴をみていこう。「現代文」は全体の6割が「好き」と回答しているが、男子(54.0%)よりも女子(65.5%)のほうが11.5ポイント高い。また、志向タイプ別にみると、文系的活動が多い文系志向タイプに「好き」の比率が高い。このタイプは女子が多いために、それが反映して女子の比率が高まったものと推察される。

また、学部系統別では、「好き」の比率が高いのは人文科学系統、社会科学系統、教育学系統の順になっており、文系学部進学者に好まれている教科であることがわかる。

図1 - 3 - 3 高校時代の「古典」の好き嫌い



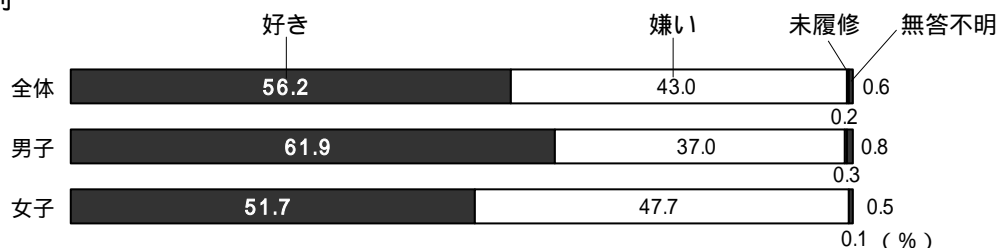
* 「好き」は「とても好き」と「やや好き」の合計、「嫌い」は「とても嫌い」と「やや嫌い」の合計を示す。
 * 「未履修」は「履修していない」の数値。
 * 専攻の学部系統別について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は図から省略した。

では、「古典」の特徴はどうだろうか。図1 - 3 - 3をみると、「好き」の割合は4割で「現代文」よりも2割ほど低いですが、傾向は似ていることがわかる。性別では女子、志向タイプでは文系志向タイプに好まれている教科である。

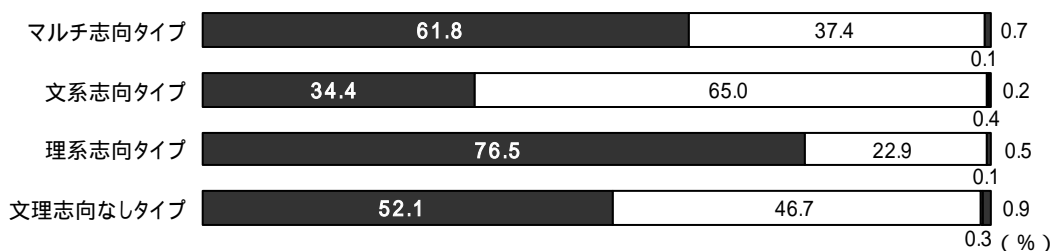
学部系統別では、人文科学系統、教育学系統で「好き」の比率が高くなっているが、社会科学系統は低い。理工学系統進学者は、26.5%しか「好き」だった者がいないが、同じ理系でも医歯薬看護学系統や農水産学系統は若干「好き」だった者の比率が高い。

図1 - 3 - 4 高校時代の「数学」の好き嫌い

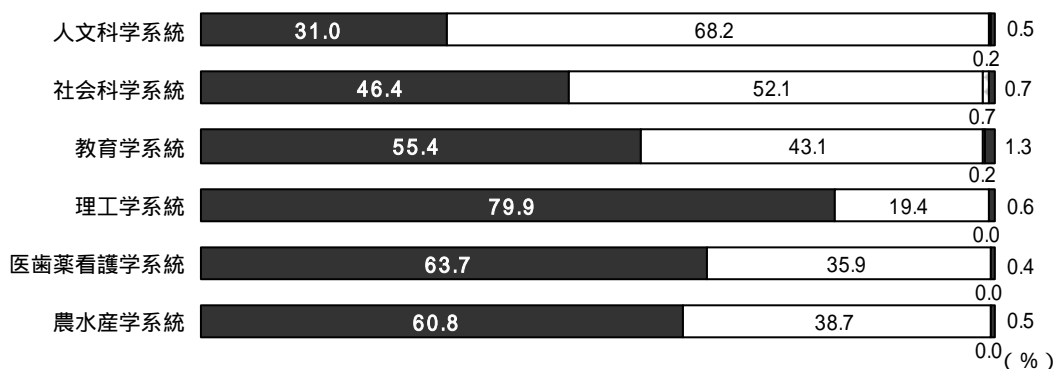
全体、性別



志向タイプ別



学部系統別



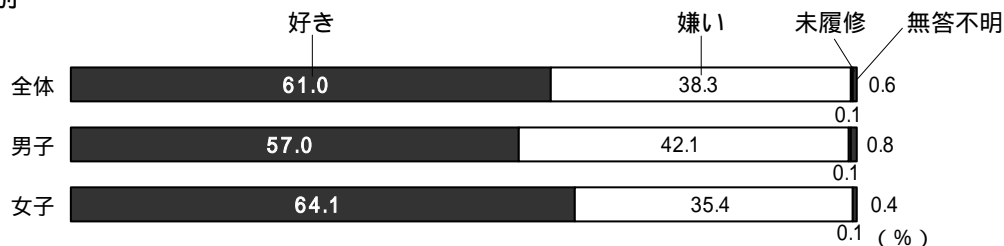
- * 「好き」は「とても好き」と「やや好き」の合計、「嫌い」は「とても嫌い」と「やや嫌い」の合計を示す。
- * 「未履修」は「履修していない」の数値。
- * 専攻の学部系統別について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は図から省略した。

「数学」(図1 - 3 - 4)は、「現代文」「古典」とは反対の特徴を示す。すなわち、「好き」の比率は、性別では男子で高く、志向タイプ別では理系志向タイプで高い。文系的活動が多い文系志向タイプと理系的活動が多い理系志向タイプでは、倍以上の差が開いている。

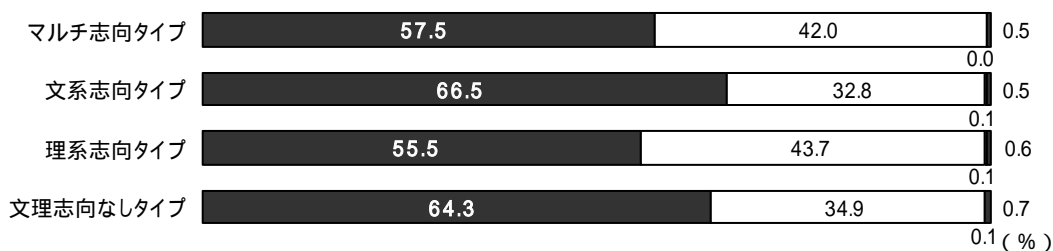
学部系統別では、理工学系統進学者の79.9%が「好き」だったと答え、医歯薬看護学系統63.7%、農水産学系統60.8%と続く。その一方で、人文科学系統では、31.0%しか「好き」だった者がおらず、68.2%が「嫌い」と回答している。「現代文」と比べると、学部系統による差が大きいことがわかる。

図1 - 3 - 5 高校時代の「英語」の好き嫌い

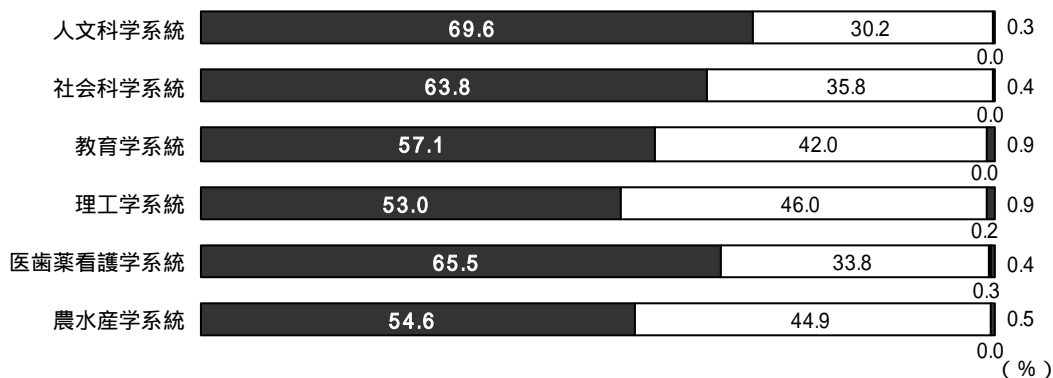
全体、性別



志向タイプ別



学部系統別



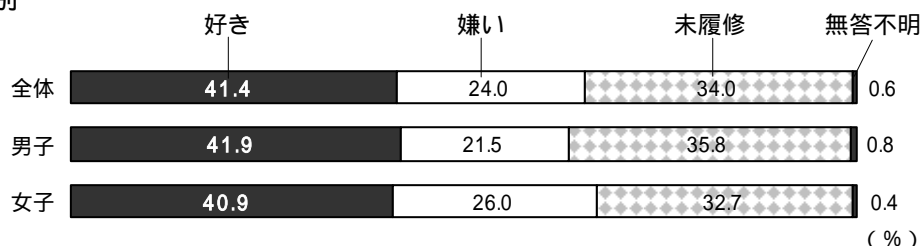
- * 「好き」は「とても好き」と「やや好き」の合計、「嫌い」は「とても嫌い」と「やや嫌い」の合計を示す。
- * 「未履修」は「履修していない」の数値。
- * 専攻の学部系統別について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は図から省略した。

続いて、「英語」(図1 - 3 - 5)である。「英語」は「現代文」と似た特徴を示す。すなわち、「好き」の比率が6割程度で、性別では女子に高く、志向タイプ別では文系志向タイプで高い。ただし、性差や志向タイプによる差は、「現代文」「古典」ほど大きくはない。志向タイプ別では、マルチ志向タイプよりも志向なしタイプの数値が高いといった特徴もある。

学部系統による差も、他の教科と比べると大きくはない。「好き」の比率がもっとも高いのは、人文科学系統であるが、ここには外国語学や国際学関係の学科が含まれるためだと推察される。ちなみに外国語学部系統(307名)だけを取り出してみると、90.5%が「好き」と回答している(図表は省略)。理工学系統、農水産学系統は他の系統よりも「好き」の比率がわずかに低く、理系学生が「英語」に対して苦手意識をもつ傾向もうかがえる。

図1 - 3 - 6 高校時代の「日本史」の好き嫌い

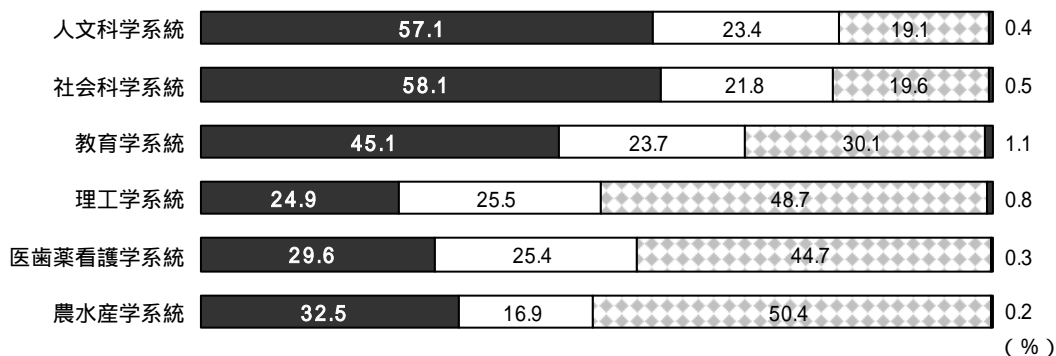
全体、性別



志向タイプ別



学部系統別



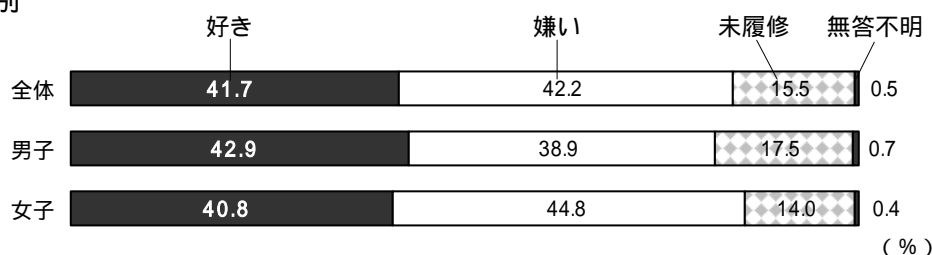
- * 「好き」は「とても好き」と「やや好き」の合計、「嫌い」は「とても嫌い」と「やや嫌い」の合計を示す。
- * 「未履修」は「履修していない」の数値。
- * 専攻の学部系統別について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は図から省略した。

ここからは、地歴・公民の各科目について検討する。まず、「日本史」(図1 - 3 - 6)であるが、性別にみると、履修率、「好き」の比率ともに差は小さいことがわかる。次に、志向タイプ別であるが、文系志向タイプは履修率が高く、「好き」の比率も高い。おおむね、多くの者に選択されていて好まれている科目だとみることができる。しかし、理系志向タイプでは、履修率が低く、「好き」の比率も低くなっている。

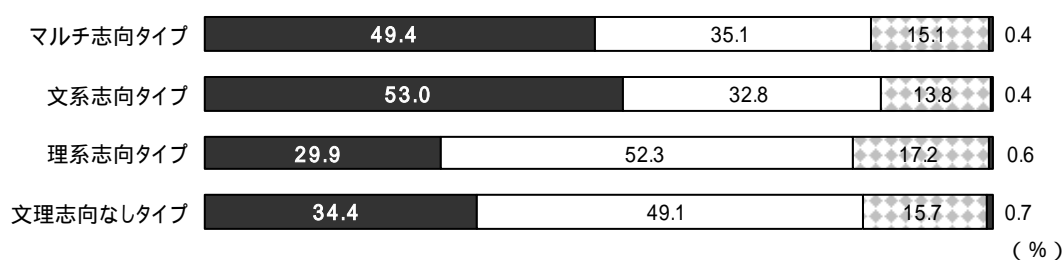
こうした傾向は、学部系統ごとの数値にも表れている。人文科学系統と社会科学系統は、履修率、「好き」の比率ともに、他の系統よりも高くなっている。それに対し、理工学系統ではいずれの比率も低く、あまり好まれていない科目であることがわかる。

図1-3-7 高校時代の「世界史」の好き嫌い

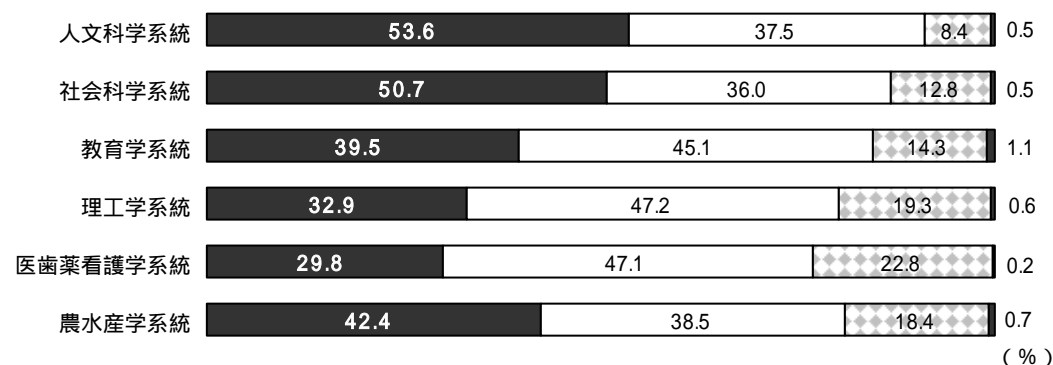
全体、性別



志向タイプ別



学部系統別



* 「好き」は「とても好き」と「やや好き」の合計、「嫌い」は「とても嫌い」と「やや嫌い」の合計を示す。

* 「未履修」は「履修していない」の数値。

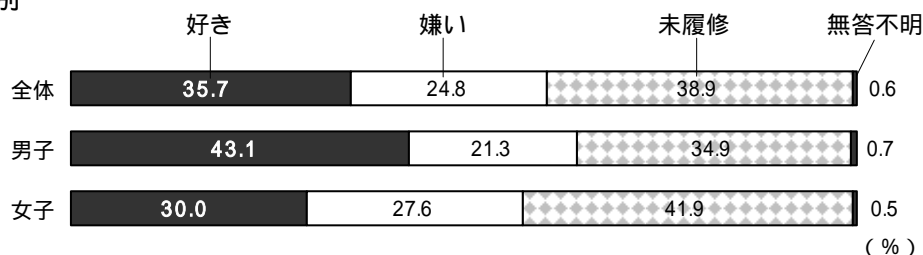
* 専攻の学部系統別について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は図から省略した。

次に、「世界史」(図1-3-7)をみてみよう。「世界史」の特徴は、「日本史」と似ている。履修率、「好き」の比率ともに性差が小さく、志向タイプ別にみると文系志向タイプに好まれ、理系志向タイプには好かれていない。ただし、履修者が多いことや、履修者に占める「好き」の比率が低いことが「日本史」とは異なる。世界史は、履修している者のおよそ半数にしか好まれていない。

学部系統別にみると、人文科学系統と社会科学系統で「好き」と回答する比率が高い。理系のなかでも、理工学系統と医歯薬看護学系統は「好き」の比率が低い、農水産学系統は比較的高いという結果になっている。

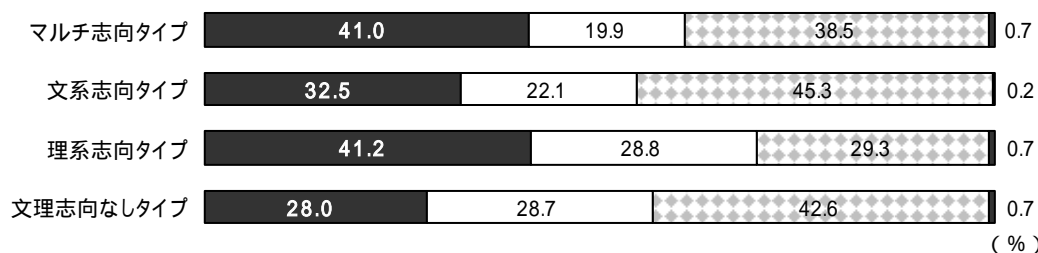
図1 - 3 - 8 高校時代の「地理」の好き嫌い

全体、性別



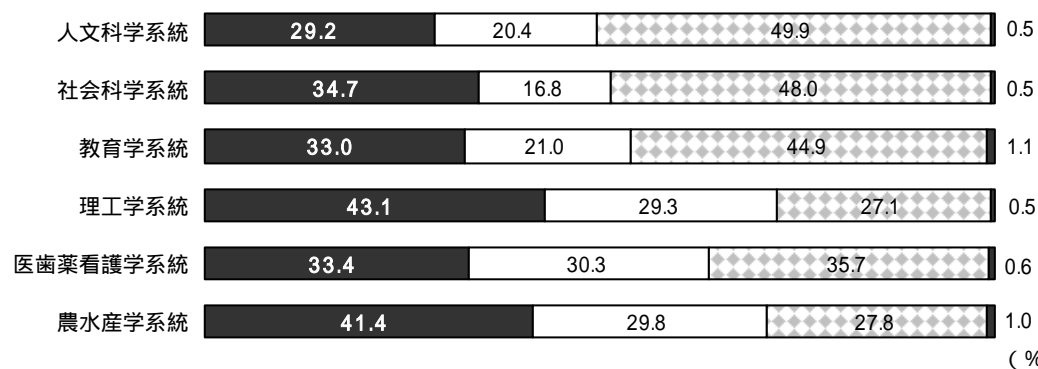
(%)

志向タイプ別



(%)

学部系統別



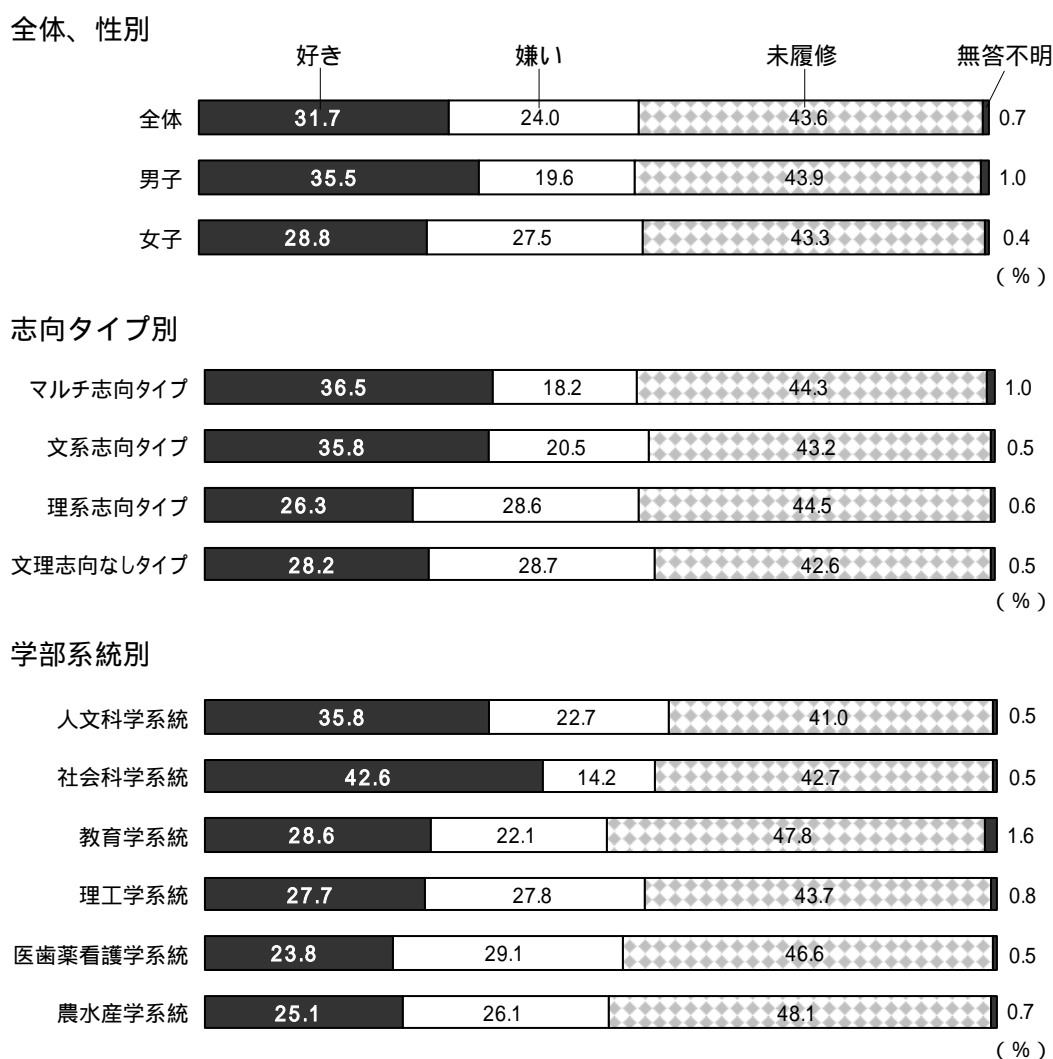
(%)

- * 「好き」は「とても好き」と「やや好き」の合計、「嫌い」は「とても嫌い」と「やや嫌い」の合計を示す。
- * 「未履修」は「履修していない」の数値。
- * 専攻の学部系統別について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は図から省略した。

「地理」(図1 - 3 - 8)は、社会の他の科目とは異なり、いわゆる理系科目に近い特徴を示す。たとえば、「好き」の比率は、性別では男子で高く、志向タイプ別では理系志向タイプで高い。

学部系統別にみると、人文科学系統、社会科学系統、教育学系統といった文系学部での履修率が低い。反対に、理工学系統、医歯薬看護学系統、農水産学系統の履修率が高く、こうした傾向は「日本史」とは逆になっている。「好き」の割合は、理工学系統と農水産学系統で高く、4割強を示している。しかし、履修者に占める「好き」の比率をみると、学部による差はそれほど大きくはない。

図1-3-9 高校時代の「現代社会」の好き嫌い



* 「好き」は「とても好き」と「やや好き」の合計、「嫌い」は「とても嫌い」と「やや嫌い」の合計を示す。

* 「未履修」は「履修していない」の数値。

* 専攻の学部系統別について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は図から省略した。

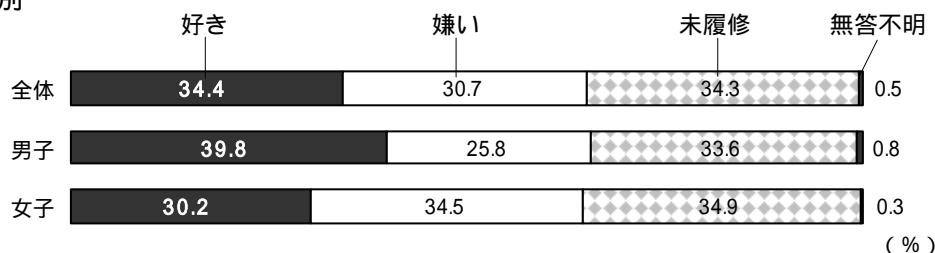
図1-3-9は「現代社会」の結果を示している。この教科は、性別、志向タイプ別、学部系統別のいずれをみても、履修率の差が小さい。全体では、55.7%が履修している。

「好き」の比率をみると、性別では若干、男子に好まれているようである。また、学部系統別では、マルチ志向タイプ、文系志向タイプの順に「好き」の比率が高く、理系志向タイプがもっとも低くなっている。

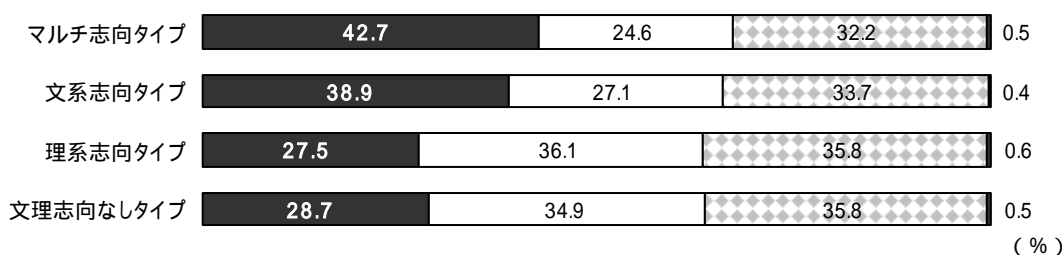
学部系統別の数値では、社会科学系統に進学した学生に好まれていることがわかる。これは、この科目で扱われるテーマ・領域が、社会科学系統のそれぞれの学部との関連が強いためと考えられる。とはいえ、社会科学系統に進学したものでも4割が未履修となっており、必ず履修している科目にはなっていない。

図1 - 3 - 10 高校時代の「政治・経済」の好き嫌い

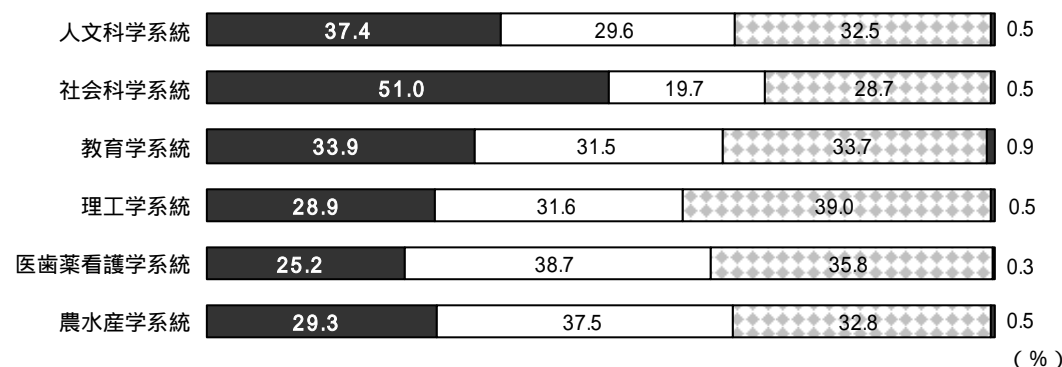
全体、性別



志向タイプ別



学部系統別



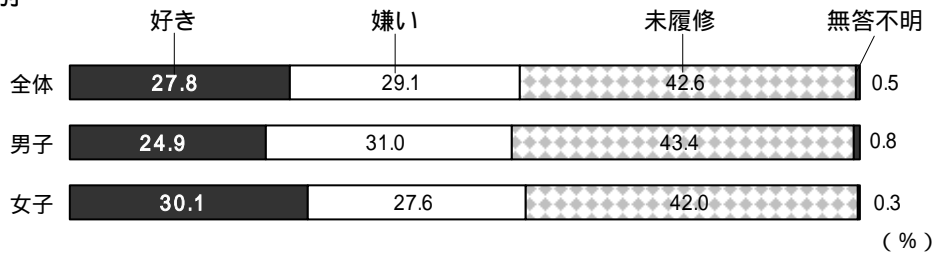
- * 「好き」は「とても好き」と「やや好き」の合計、「嫌い」は「とても嫌い」と「やや嫌い」の合計を示す。
- * 「未履修」は「履修していない」の数値。
- * 専攻の学部系統別について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は図から省略した。

「政治・経済」(図1 - 3 - 10)の特徴は、「現代社会」ときわめてよく似ている。この科目も、各属性別にみたときの履修率の差が小さい。全体では、65.1%が履修している。また、「好き」の比率をみると、性別では男子、学部系統別では、マルチ志向タイプ、文系志向タイプで高くなっている。

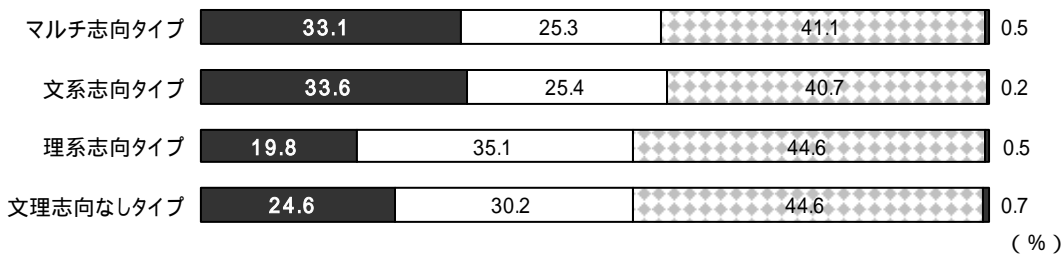
学部系統別では、社会科学系統に進学した学生が「好き」と答えた比率が高い。これも、「政治・経済」が扱うテーマ・領域との関連が強いためであろう。

図1 - 3 - 11 高校時代の「倫理」の好き嫌い

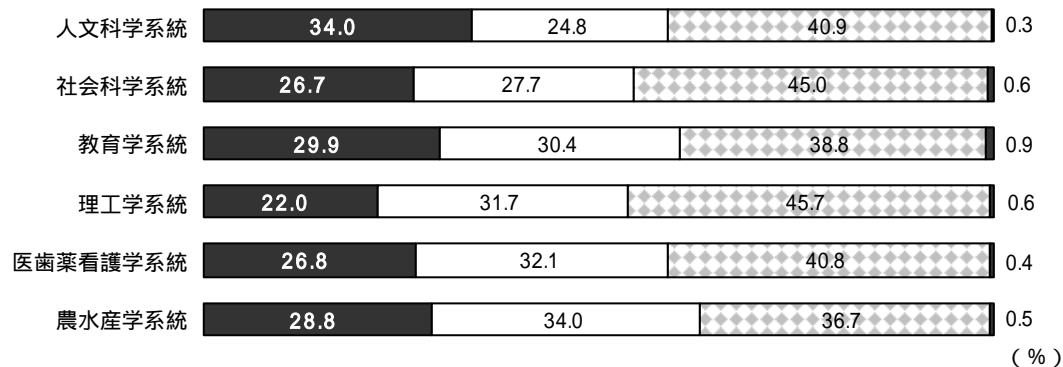
全体、性別



志向タイプ別



学部系統別



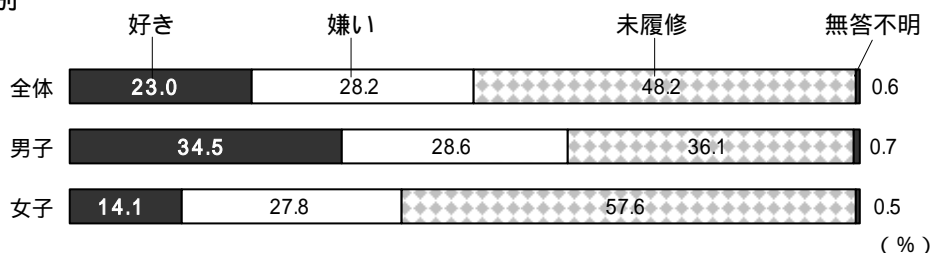
- * 「好き」は「とても好き」と「やや好き」の合計、「嫌い」は「とても嫌い」と「やや嫌い」の合計を示す。
- * 「未履修」は「履修していない」の数値。
- * 専攻の学部系統別について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は図から省略した。

次に、「倫理」(図1 - 3 - 11)をみてみよう。「倫理」は、全体では履修率が56.9%となっている。ただし、「好き」の比率があまり高くはなく、履修者のうちで「好き」と回答する者は半数を切っている。全体を母数にした場合の「好き」の比率は、男子24.9%に対して女子30.1%と、若干女子に好まれていることがわかる。志向タイプ別では、マルチ志向タイプと文系志向タイプで「好き」の比率が高い。理系志向タイプは、「好き」の比率が2割に満たない。

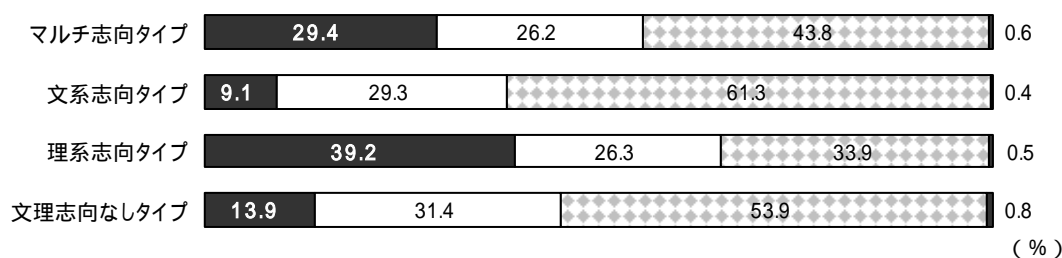
学部系統別では、人文科学系統で好まれていて、理工学系統ではあまり好まれていない。傾向はそれほど顕著ではないものの、以上のような傾向は「現代文」や「古典」に似ている。

図 1 - 3 - 12 高校時代の「物理」の好き嫌い

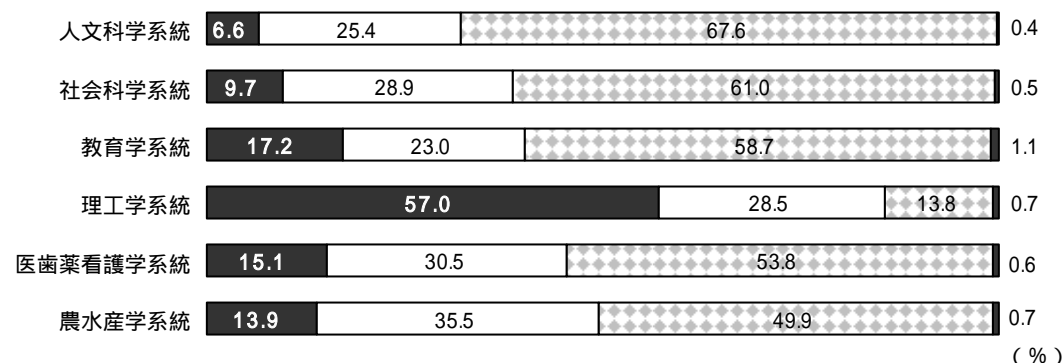
全体、性別



志向タイプ別



学部系統別

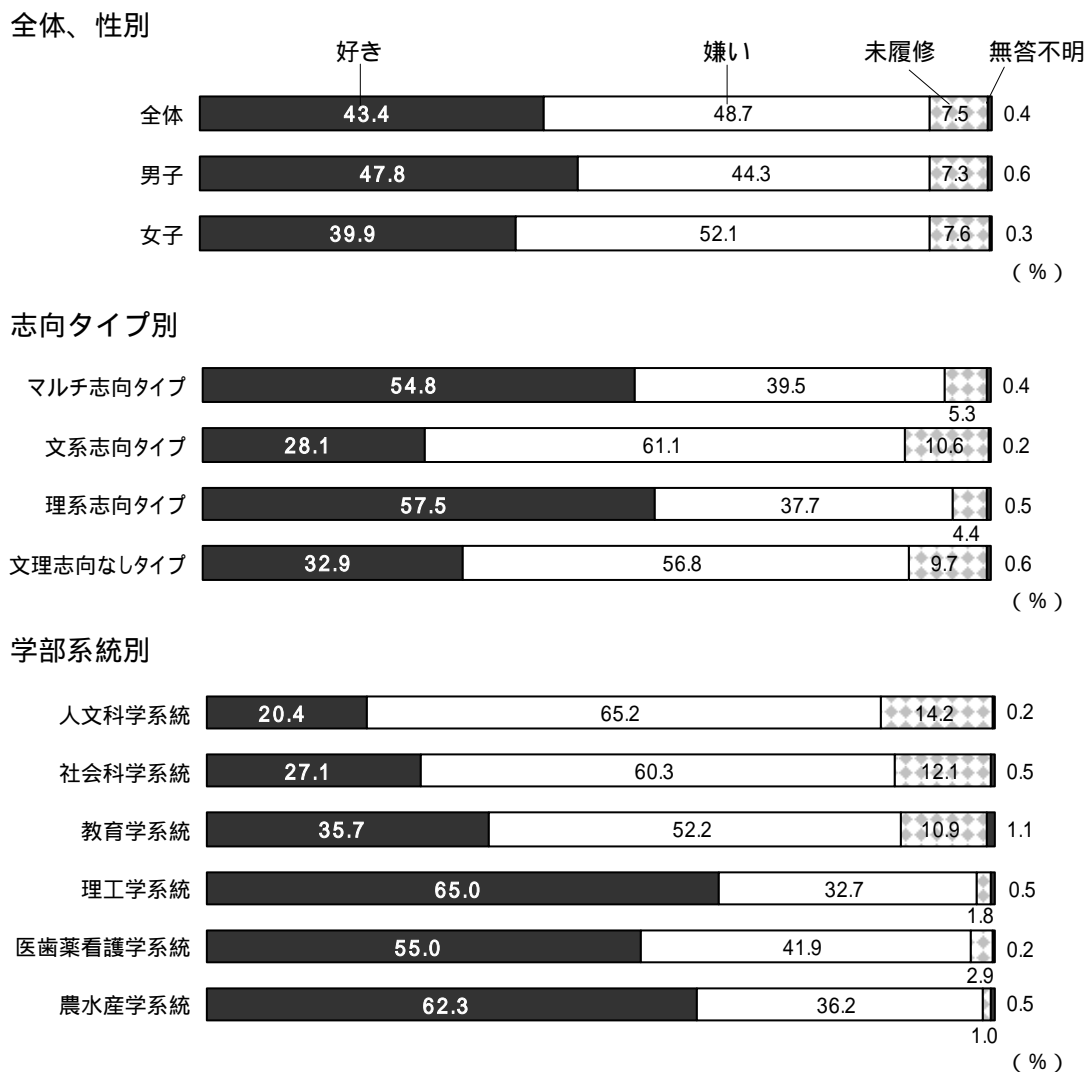


- * 「好き」は「とても好き」と「やや好き」の合計、「嫌い」は「とても嫌い」と「やや嫌い」の合計を示す。
- * 「未履修」は「履修していない」の数値。
- * 専攻の学部系統別について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は図から省略した。

ここからは、理科である。「物理」(図 1 - 3 - 12)は、属性によって履修率や好き嫌いが大きく異なるのが特徴である。まず、性別でみると、男子と女子で履修率は 20 ポイント以上異なる。「好き」の比率も男子 34.5%、女子 14.1%と倍以上の開きがある。履修者に限っても、男子は半数以上が「好き」と回答しているのに対して、女子は 3 割強である。志向タイプ別では、文系志向タイプが履修率も「好き」の比率もきわめて低いのにに対して、理系志向タイプはいずれも高い。小さいころの理系的活動とこの科目の好き嫌いは、強く関連しているものと考えられる。

学部系統別の数値はさらに特徴的である。理工学系統のみが履修率、「好き」の比率とも突出し、他の系統とはまったく様相を異にしている。「物理」は理工学系統への進学の大きな鍵となっている教科であり、他の系統に進学した者は総じて「物理ぎらい」が多いとみることができよう。

図1 - 3 - 13 高校時代の「化学」の好き嫌い



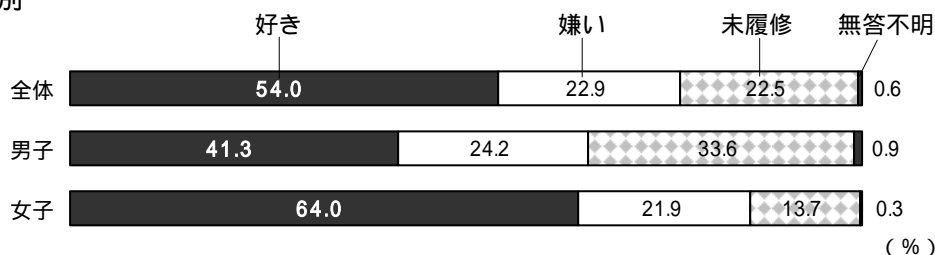
* 「好き」は「とても好き」と「やや好き」の合計、「嫌い」は「とても嫌い」と「やや嫌い」の合計を示す。
 * 「未履修」は「履修していない」の数値。
 * 専攻の学部系統別について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は図から省略した。

続いて、「化学」(図1 - 3 - 13)をみてみよう。「化学」は文系の学部系統で1割程度の未履修者がいるが、総じて履修率が高い教科である。「好き」の比率は、性別では男子で高く、志向タイプ別では理系志向タイプで高い。文系的活動が多い文系志向タイプと理系的活動が多い理系志向タイプでは倍に近い差が開いており、こうした傾向は「数学」に酷似している。

学部系統別では、理工学系統進学者の65.0%が「好き」だったと答え、農水産学系統62.3%、医歯薬看護学系統55.0%と続く。その一方で、人文科学系統は20.4%、社会科学系統は27.1%、教育学系統は35.7%しか「好き」だと回答していない。「化学」も「数学」と同様に、文系学生にとって難易度が高い教科であり、「化学ぎらい」の学生も多いことがうかがえる。

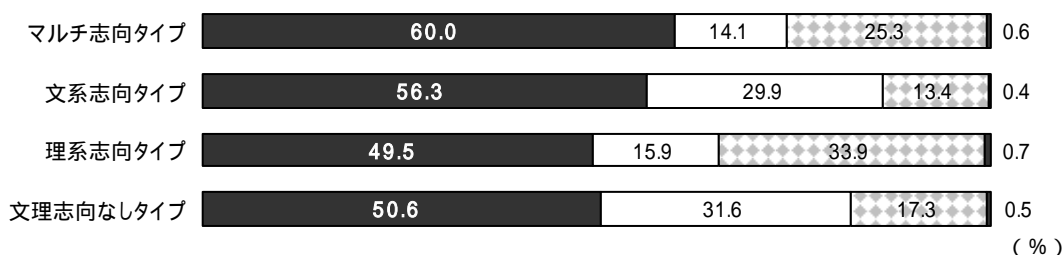
図1 - 3 - 14 高校時代の「生物」の好き嫌い

全体、性別



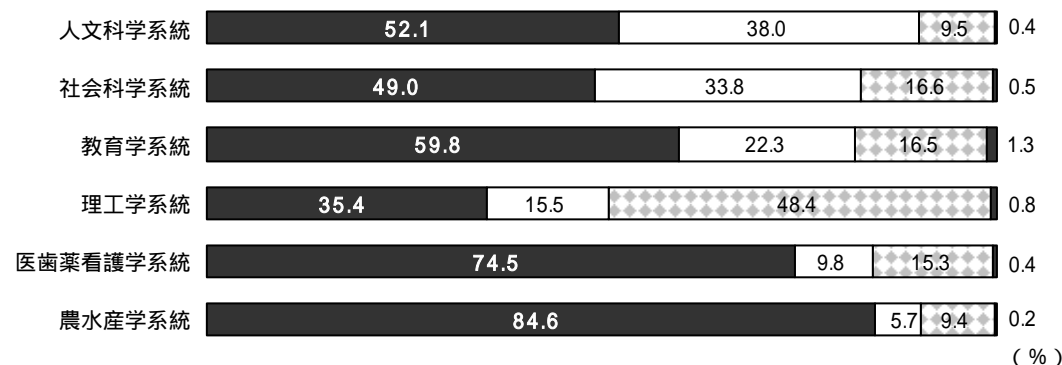
(%)

志向タイプ別



(%)

学部系統別



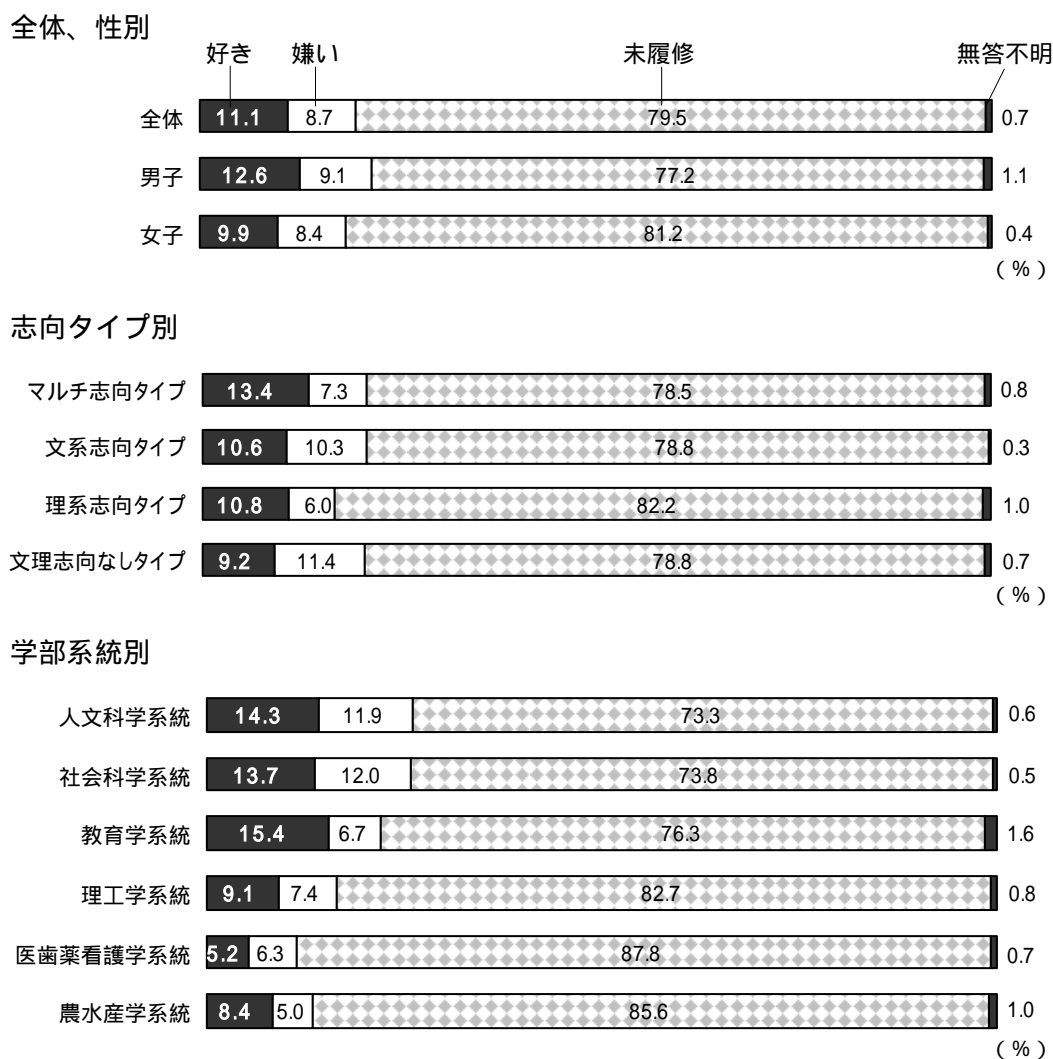
(%)

- * 「好き」は「とても好き」と「やや好き」の合計、「嫌い」は「とても嫌い」と「やや嫌い」の合計を示す。
- * 「未履修」は「履修していない」の数値。
- * 専攻の学部系統別について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は図から省略した。

次に、「生物」である。図1 - 3 - 14からわかるように、「生物」は女子に好まれている教科である。女子は履修率、「好き」の比率ともに、男子よりも20ポイント程度高い。志向タイプ別では、タイプによって履修率が異なる。理系志向タイプよりも文系志向タイプのほうが多く履修しており、この点では「物理」「化学」とは異なる。

学部系統ごとにみると、理工学系統の履修率が極端に低い。おそらく、「物理」「化学」を優先したためであろう。また、医歯薬看護学系統、農水産学系統で「好き」の比率が極めて高い。この結果から、「生物」は理系学部内での専門領域の分化（理工学系統への進学か、医歯薬看護学系統や農水産学系統への進学か）に影響を与えている教科であることがわかる。ちなみに、文系の学部系統をみても、「物理」「化学」のように「好き」が極端に低いということがない。

図1 - 3 - 15 高校時代の「地学」の好き嫌い



* 「好き」は「とても好き」と「やや好き」の合計、「嫌い」は「とても嫌い」と「やや嫌い」の合計を示す。
 * 「未履修」は「履修していない」の数値。
 * 専攻の学部系統別について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は図から省略した。

最後に、「地学」(図1 - 3 - 15)の結果をみてみよう。地学は、履修者が2割程度となっていて、他の教科と比べてもかなり少ない。性別や志向タイプ別の数値をみても、際立って差が大きいところはない。

学部系統別では、人文科学系統、社会科学系統、教育学系統といった文系の学部系統で履修率が高い傾向がある。この傾向は、「生物」とは逆である。

なお、「総合理科」は履修率が6.5%と低いため、省略する。また、実技教科(「保健体育」「家庭」「情報」「芸術」)については、文系学生と理系学生の差が小さいため、ここでは省略することにしたい。

(3) 教科・科目の好き嫌いと専攻の関連

これまで、高校時代の教科の好き嫌いについて教科・科目ごとに詳しく特徴をみてきたが、ここでポイントを整理しておきたい。

第一に、小・中学校時代の文系的活動、理系的活動の蓄積が、好き嫌いに反映されやすい教科・科目とそうでない教科・科目が存在することである。志向タイプは、小・中学校時代の体験の状況を分類した指標として設定したが、明快に把握するために、文系的活動が多く、理系的活動が少ない「文系志向タイプ」と、文系的活動が少なく、理系的活動が多い「理系志向タイプ」の2タイプに絞って教科・科目の好き嫌いの状況を確認しよう。なお、本来であれば、履修率や履修者に占める「好き」の比率を考慮しなければならないが、この点については図1-3-2から図1-3-15の各教科・科目の解説のなかで触れてきたので、ここでは単純に全体に占める「好き」の比率をみていくことにする。

文系志向タイプと理系志向タイプで20ポイント以上の差があるものをあげると、次のようになる(下線は30ポイント以上の差があるものを示す)。

文系志向タイプに「好き」が多い教科・科目.....現代文、古典、日本史、世界史

理系志向タイプに「好き」が多い教科・科目.....数学、物理、化学

ある教科・科目を好きになるためには、小さいころからその教科・科目に関連する活動をして、その面白さを認識していたほうがよい。このことは、教科・科目の種類を問わずいえることであろう。たとえば、国語でいえば、小・中学校時代の言語的な諸活動(本を読む、文章を書く、言葉で伝える・表現する)の経験の充実度が、高校時代の好き嫌いを左右する可能性は高い。とはいえ、ここで示したのは、その結びつきの強さは、教科・科目によって異なるということである。上記の教科・科目は、それに関連する活動を小・中学校時代に十分しているかどうかが好き嫌いに反映されやすい。数学、物理、化学などもそうであり、理系人材の育成のためには、これらの教科・科目に関する活動を、小・中学校時代から充実させる必要性が高いことを裏づけている。

第二に、教科・科目の好き嫌いは進学した専門領域によって大きく異なっており、このことは特定の教科・科目が進路分化に強い影響を与えている可能性を示唆する。もっとも顕著なのは「物理」で、「好き」な者は理工学系統に集中しており、この科目の好き嫌いが理工学系統への進学を左右する鍵になっていることがわかる。以下、教科・科目ごとに特徴をみるために、表1-3-2を作成した。は全体の数値よりも10ポイント以上、は5ポイント以上高いことを示し、は10ポイント以上、は5ポイント以上低いことを示している。

最初に国語の2科目「現代文」と「古典」であるが、これらが「好き」なことは人文科学系統への進学を促進する。また、理工学系統には「好きではない」(以下、「好きではない」には「嫌い」と「未履修」が含まれる)が多く、国語への苦手意識をもっていると理工学系統への進学が促進される可能性も考えられる。

次に、「数学」であるが、数学は国語の2科目と逆の様相を呈しており、理工学系統への進

学に親和性が高いのに対して、人文科学系統への進学を阻害する要因になっている。

続いて特徴的なのは、地歴・公民の諸科目である。地歴・公民では、社会科学系統への進学者に「好き」と回答するものが多い。「日本史」「世界史」「現代社会」「政治・経済」などで差があり、これらの科目が好きなことが、社会科学系統への進学を後押ししているようだ。さらに、「日本史」「世界史」は人文科学系統進学者にも「好き」と回答する者が多い。反対に、理工学系統、医歯薬看護学系統、農水産学系統への進学者に、「好き」という者が少なく、地歴・公民の苦手意識が理系の学部系統への進学を阻害している可能性を表している。

理科については、上述したように、「物理」が好きなことが理工学系統への進学を強く促進している可能性が高い。また、この科目の苦手意識は、同じ理系であっても医歯薬看護学系

表1-3-2 高校時代の教科の好き嫌い(全体との差、学部系統別)

		全体	人文科学系統	社会科学系統	教育学系統	理工学系統	医歯薬看護学系統	農水産学系統
国語	現代文	60.4	(+14.0)	(+5.8)		(-13.8)		
	古典	41.1	(+14.3)		(+10.0)	(-14.6)		
数学	数学	56.2	(-25.2)	(-9.8)		(+23.7)	(+7.5)	
外国語	英語	61.0	(+8.6)			(-8.0)		(-6.4)
地歴・ 公民	日本史	41.4	(+15.7)	(+16.7)		(-16.5)	(-11.8)	(-8.9)
	世界史	41.7	(+11.9)	(+9.0)		(-8.8)	(-11.6)	
	地理	35.7	(-6.5)			(+7.4)		(+5.7)
	現代社会	31.7		(+10.9)			(-7.9)	(-6.6)
	政治・経済	34.4		(+16.6)		(-5.5)	(-9.2)	(-5.1)
	倫理	27.8	(+6.2)			(-5.8)		
理科	物理	23.0	(-16.4)	(-13.3)	(-5.7)	(+34.0)	(-7.9)	(-9.1)
	化学	43.4	(-23.0)	(-16.3)	(-7.7)	(+21.6)	(+11.6)	(+18.9)
	生物	54.0		(-5.0)	(+5.7)	(-18.6)	(+20.5)	(+30.6)
	地学	11.1					(-5.9)	

* 全体の数値は、調査対象者全体を母数にしたときの、「とても好き」と「やや好き」の比率の合計を示す(%)。

* は全体の数値よりも10ポイント以上、は5ポイント以上高いものを示す。また、は10ポイント以上、は5ポイント以上低いものを示す。また、(括弧)内の数値は、全体との差を示す。

* 専攻の学部系統別について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は表から省略した。

* 教科のうち、「総合理科」および実技系の4教科は表から省略した。

統や農水産学系統に進んだ者が理工学系統には進学しなかった要因になっているようである。

この点で、「物理」と対照的な科目が「生物」である。「生物」は、履修者そのものが少ないことが要因とはいえ、理工学系統進学者に「好き」が少なく、医歯薬看護学系統や農水産学系統に多い。「物理」の好き嫌いとの裏返しの関係で、「生物」の好き嫌いも、同じ理系の学部系統のなかで専門領域を分化させる要因になっているようである。それに対して、「化学」は理系の学部系統で共通して好まれている。以上を考慮すると、理工学系統は「物理」と「化学」の組み合わせ、医歯薬看護学系統と農水産学系統は「生物」と「化学」の組み合わせで、理系に進学していることがわかる。なお、「物理」と「化学」は文系の3学部系統のいずれもが「好き」の比率が低く、この2科目の苦手意識は理系への進学を阻害する要因になっていると考えられる。

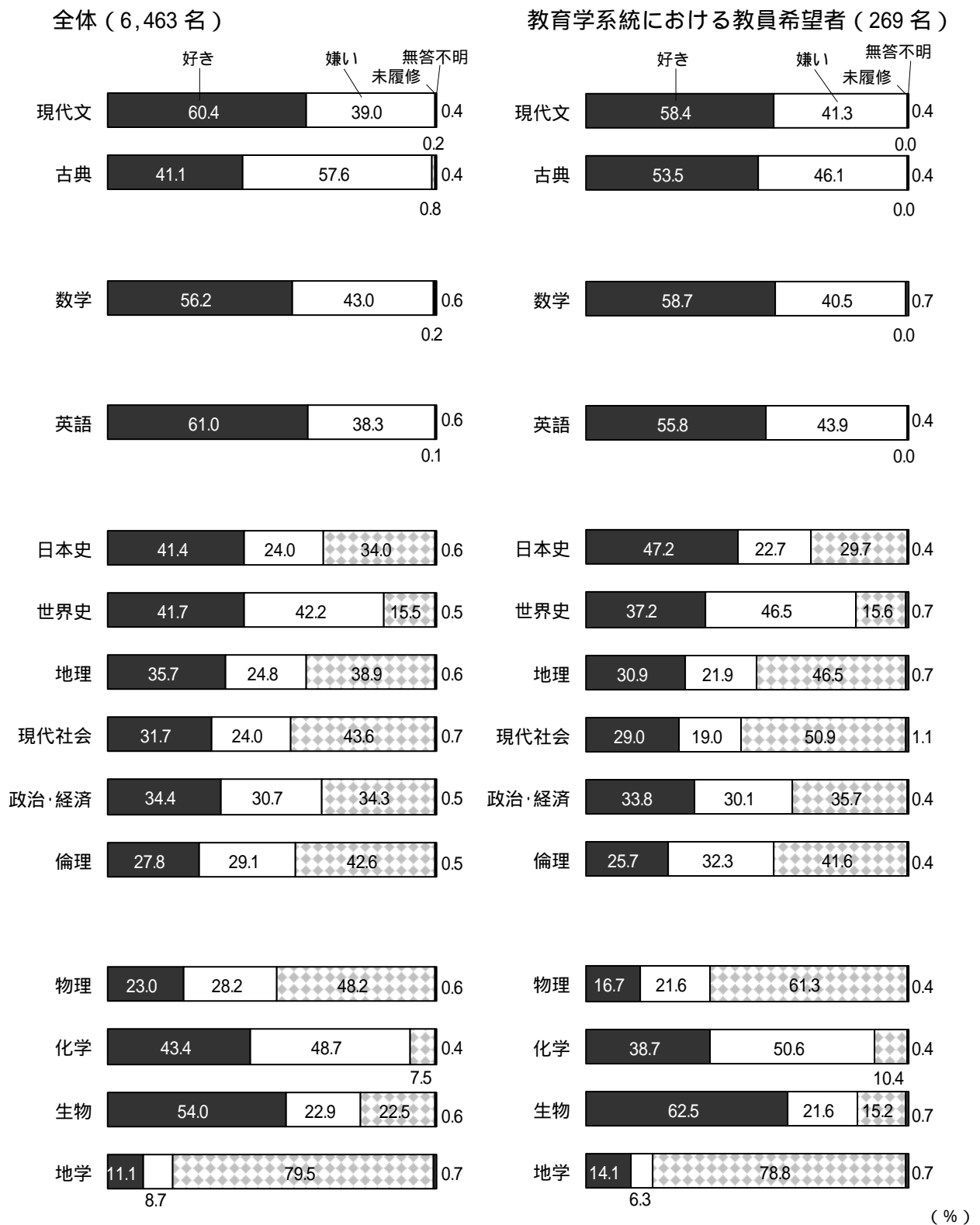
(4) 教員養成における課題

すでに述べたように、小・中学校時代の体験と高校時代の教科・科目の好き嫌いには強い関連がある。数学や理科が好きな者を増やし、嫌いな者を減らすための対策（いわゆる「理数離れ」対策）をとる必要があるとすれば、小・中学校時代にどのような体験や活動を準備し、提供するかが重要な課題になる。この意味で、小・中学校教員の果たす役割は大きい。教員自身の理数系教科嫌いを指摘する研究（田村美奈ほか；「理科好き」教員を育てることが大切 - 「教員の理科嫌い」を断ち切るために何ができるのか -、『化学と教育』52巻10号日本化学会、2004年）もあるが、苦手な教員が指導しているとすれば、理数系教科に対する肯定的な感情を十分に育てられないこともあるだろう。その結果、学習の進度と難易度（抽象度）が高まるにつれて、子どもたちは理数系教科に対する苦手意識を持ちやすくなると推察される。

そこで、ここでは、教育学系統に進学した者（448名）のうち、大学卒業後の進路として「教員」を選択した者（269名）に限って、教科・科目の好き嫌いの状況をみてみたい。彼らは、いわば「教員の卵」であり、子どもたちに理数系教科を教える可能性が高い。ただし、希望する学校段階は不明なので、中学校や高校の数学や理科以外の教員を目指す学生も含まれていると考えられる。そのため、あくまで目安と考えたほうがよいが、調査対象者全体と教育学系統における教員希望者を比較したのが、**図1-3-16**である。これをみると、教員希望者は全体の数値とかなり近く、多くの教科・科目で数ポイントの差しかない。たとえば、「数学」が「好き」な者は、全体56.2%に対して、教員希望者は58.7%である。

理科に限ってみると、「物理」や「化学」を「好き」と回答する者が少なく、「生物」を好きな者が多い。「物理」は「好き」の比率が低いのも特徴的であるが、6割以上が高校時代に履修していない点が気になる。在学する大学での教育課程がどのようになっているか、本人が教員採用試験などの対策としてどの程度の学習をするかにもよるが、中学校を卒業して以降、十分に「物理」を学習せずに教員になるケースも少なくないのではないだろうか。これは、「地学」も同様である。

図1-3-16 高校時代の教科の好き嫌い(全体・教育学系統の教員希望者)



* 「好き」は「とても好き」と「やや好き」の合計、「嫌い」は「とても嫌い」と「やや嫌い」の合計を示す。
 * 「未履修」は「履修していない」の数値。
 * 全体のなかには、教育学系統における教員希望者も含まれている。

このような状況を防ぐために、どうすればよいのだろうか。最初に考えられるのは、教員志望者ができるだけ多くの教科・科目を学習するように、大学入試でたくさんの教科・科目を課すという方法である。しかし、これは教員養成の学部と他の学部系統との並行受験を難しくしてしまい、他学部への流出や他学部希望者の流入といった進路変更を妨げてしまう。受験生への負荷という点でも、適切ではないかもしれない。

問題は、理数教科が苦手にもかかわらず子どもたちに教えなければならない教員が存在することをどうするかであり、対策としては小学校段階を中心に考える必要がある。考えられるのは、以下の3つの方法である。

第一の方法は、教員養成課程における理数教育を充実させることである。たとえば、小学校教員の養成課程において、算数・数学や理科の各教科に対する基本的な知識、教科指導法などを教育する機会を増やすといった方法である。とくに、理科については、高校時代に履修していない教科が含まれていることを考慮した教育課程が必要になる。

第二の方法として、教員研修を充実させることが考えられる。ここでも、教員が理数系教科に苦手意識をもっていること、高校や大学で該当教科についての十分な学習をしていない可能性があることを考慮した研修体制を組む必要がある。とくに、独学での学習や書籍での学習では習得することが難しい理科の実験や体験学習に関する実践的な研修を増やすことが望ましい。

第三の方法としては、小学校の教員全員が理数系教科を教えなくてもよい制度設計をとることである。具体的には、小学校における理数系教科の専科制の導入が考えられる。とくに理科は、それぞれの教員がすべての教科をまんべんなく学んだわけではなく、「生物」は学んだが「物理」は学んでいないというように高校以降の学習内容に偏りがある。また、実験や体験的な活動に基づく指導には、高度な知識や技能が必要になる。

以上、3つの方法を提案したが、「理数離れ」を防ぐには小・中学校時代の指導が重要であること、しかしながら、小・中学校教員を希望する者のなかには少なからず「理数嫌い」が存在すること、小学校段階ではその「理数嫌い」な教員が理数系教科を指導する場面が多くなることを考慮する必要がある。不十分な指導によって、「理数嫌い」を再生産することのない制度を設計する必要がある。

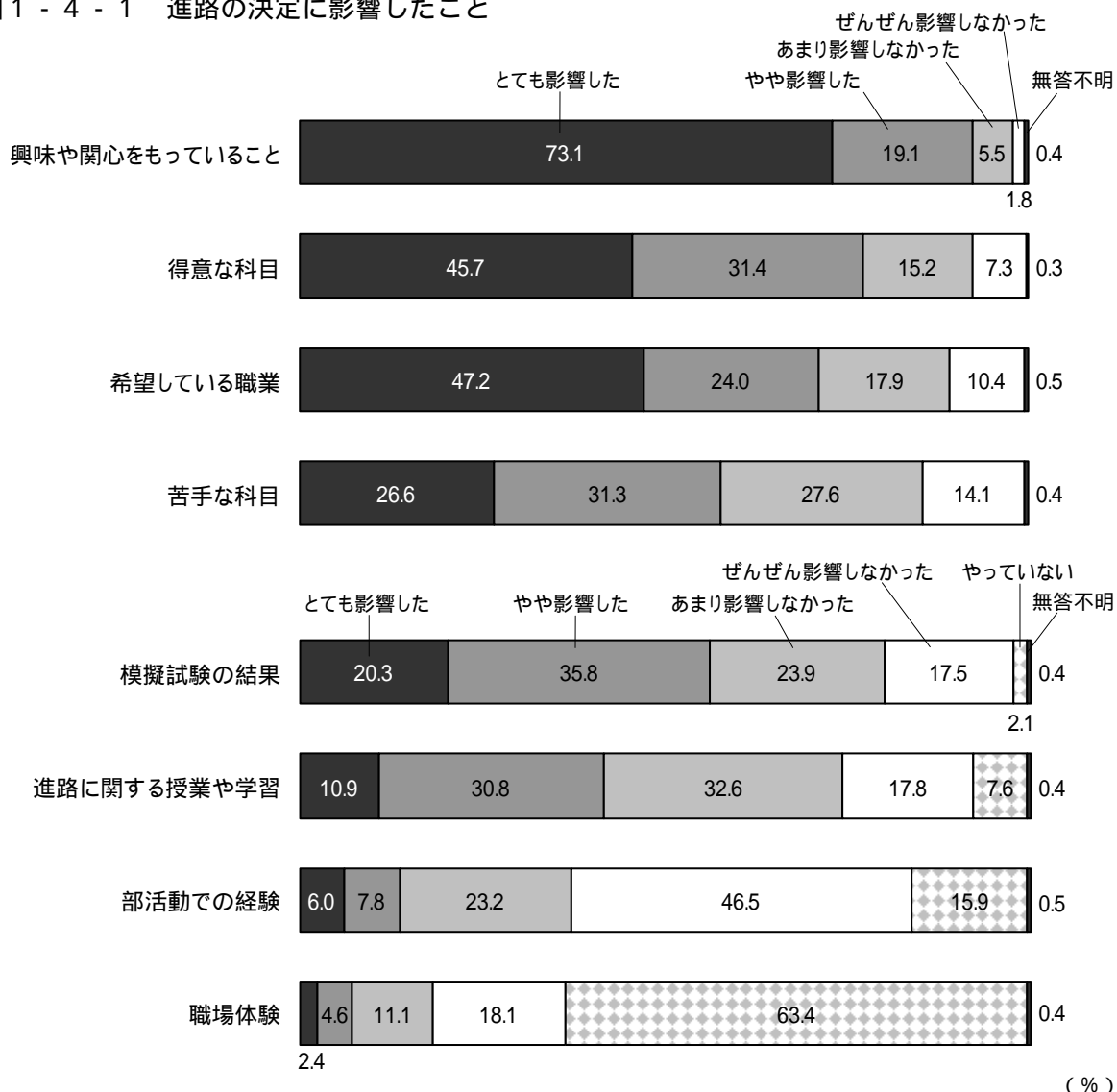
4. 進路を決めるときに影響したこと

(1) 全体の傾向

高校時代は、進学するか就職をするかについての進路決定をしたあと、大学に進学するのであれば文系・理系の選択や専攻する学部・学科の選択、受験する大学の選択などをしなければならない。本節では、そのような進路選択を考えるときに影響した要因についてたずねた結果を検討する。

全体の傾向は、**図1-4-1**の通りである。「得意な科目」「苦手な科目」「興味や関心をもっていること」「希望している職業」については、「とても影響した」から「ぜんぜん影響しなかった」の4段階でたずね、「部活動での経験」「模擬試験の結果」「進路に関する授業や学習」「職場体験」については「やっていない」を選択肢に加えた。

図1-4-1 進路の決定に影響したこと



(%)

これをみると、「興味や関心をもっていること」(92.2%、「とても影響した」と「やや影響した」の合計、以下同様)が9割、「得意な科目」(77.1%)、「希望している職業」(71.2%)が7割を越え、前向きな観点から進路を考えていることがわかる。ただし、「苦手な科目」を考慮したという回答も57.9%と半数を越える。

「進路に関する授業や学習」は、「やっていない」が7.6%と少数で、多くの高校でそのような取り組みが導入されていることがわかる。しかしながら、それが進路を決めるときに「影響した」という回答は41.7%で、半数以上は「影響しなかった」と答えている。また、「職場体験」は、経験しているものが36.2%と少ないうえに、「影響した」という回答は1割にも満たない。昨今では、いわゆるフリーターやニートと呼ばれる若年者雇用の問題を踏まえて、中等教育段階から職業意識を持たせる必要性が強調されている。また、大学進学だけを目標にするのではなく、職業を考えながら学習の目的を考え、目標を設定する試みがなされている。こうしたことから、進路学習や職業教育・キャリア教育などは、一般に盛んになっている。しかしながら、大学生たちの回答をみると、こうした取り組みが十分に進路選択の際のサポートにはなっていない可能性が示唆される。中等教育段階での進路学習や職業教育・キャリア教育について、学習内容や指導方法を再検討し、体系立ったプログラムを構築する必要があるだろう。

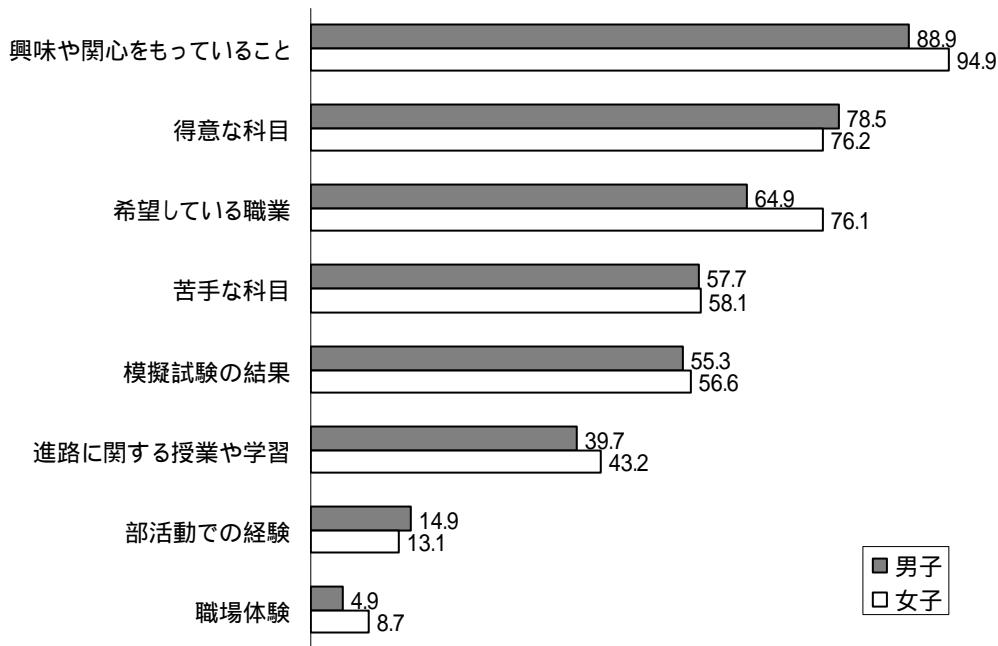
(2) 性や文系・理系による違い

それでは、こうした進路決定の影響要因は、性や文系・理系で異なるのだろうか。

図1-4-2は、性による違いをみたものである。ここからは、女子のほうが「興味や関心をもっていること」「希望している職業」を考えた進路選択を行っていることがわかる。「進路に関する授業や学習」「職場体験」なども、若干ではあるが女子のほうが高く、男子に比べると積極的に前向きな進路の決定を行っている様子がうかがえる。

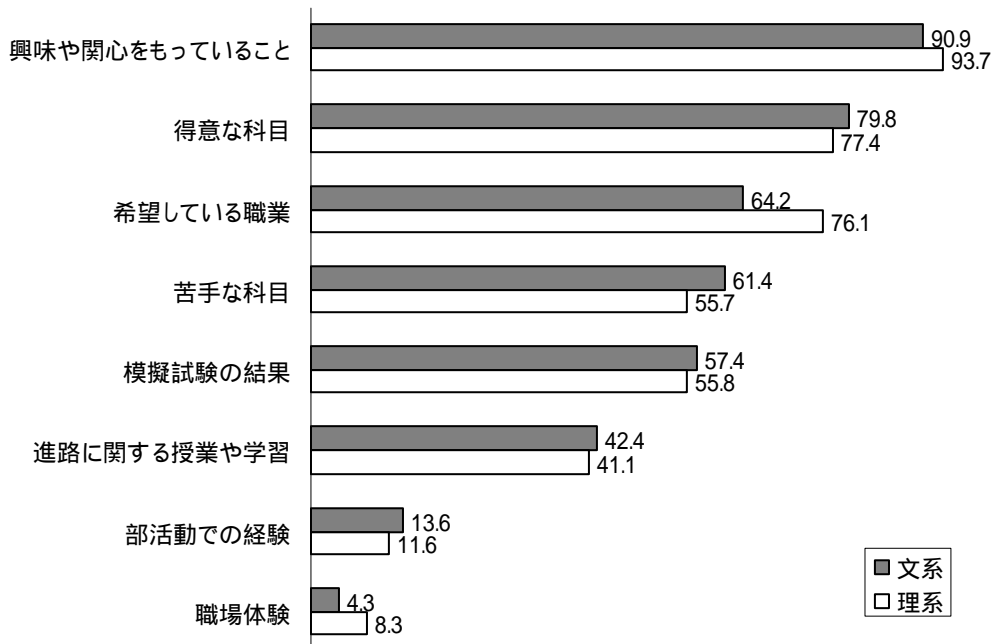
それでは、文系と理系の違いはどうだろうか。図1-4-3から差がある項目をみると、「希望している職業」が「影響した」(「とても影響した」と「やや影響した」の合計、以下同様)という回答は、文系学生64.2%に対して理系学生76.1%となっている。理系学生のほうが将来を見据えた進路選択をしているようである(ただし、後述するように、この傾向は医歯薬看護学系統に進学した学生が強く肯定している結果に影響されており、理系学生全般にあてはまるとはいえない)。一方、文系学生は理系学生に比べて「苦手な科目」が「影響した」と回答しており、苦手科目を回避するような進路決定をしている傾向がうかがえる。

図1 - 4 - 2 進路の決定に影響したこと（性別）



* 数値は「とても影響した」と「やや影響した」の合計 (%)。
 * 「模擬試験の結果」以下の4項目は、選択肢に「やっていない」が含まれている。

図1 - 4 - 3 進路の決定に影響したこと（文理別）



* 数値は「とても影響した」と「やや影響した」の合計 (%)。
 * 専攻の文理別について、「文系と理系の中間」「どちらでもない」と回答した者は図から省略した。
 * 「模擬試験の結果」以下の4項目は、選択肢に「やっていない」が含まれている。

さらに、こうした結果を文系男子、理系男子、文系女子、理系女子にわけて示したのが、**表1-4-1**である。これをみると、男子に比べて女子のほうが文系と理系の差が大きいことがわかる。とくに、文系女子は「得意な科目」や「苦手な科目」など科目の得手不得手を考え、「模擬試験の結果」を踏まえて進路選択をする傾向が強い。一方、理系女子は「興味や関心をもっていること」「希望している職業」など、自分の関心や将来を考えた進路選択をしている。

(3) 学部系統ごとの違い

続いて、進路選択の決定に影響したことを学部系統別にみたのが、**表1-4-2**である。これをみると、医歯薬看護学系統への進学者が、「希望している職業」を重視して、「得意な科目」や「苦手な科目」をあまり考えずに進路選択をしている傾向が出ている。この学部系統は職業との関連が明確で実学的であるためにこのような結果が出たものと考えられるが、女子が多いことから、上述した理系女子の傾向に影響を与えている。理工学系統や農水産学系統をみると、同じ理系学部でも、「希望している職業」が「影響した」という比率は、決して高くはない。

興味深いのは、教育学系統で「部活動での経験」が25.7%、医歯薬看護学系統で「職場体験」が23.0%と、四人に一人の割合で「影響した」と回答している点である。この比率は、他の学部系統と比べると、際立って高い。教育学系統も医歯薬看護学系統も、職業との関連が強い実学的な学部系統であり、高校時代までにその職業に結びつく体験的な活動を行っていると、その学部系統を選択する傾向が強まるのかもしれない。第3章で詳述するように、この学部系統への進学者は、大学での専攻分野を意識するよりも先にどのような職業に就くかを意識している（他の学部系統は、大学での専攻分野 進学する大学 職業の順で意識する）。教育学系統であれば教育現場、医歯薬看護学系統であれば医療現場での体験が進路選択に影響を与えている可能性が高いが、これ以外の学部系統でも専門領域と職業の結びつきが具体的にイメージできる場が必要だといえるだろう。

表1-4-1 進路の決定に影響したこと（性別・文理別）（％）

	男子		女子	
	文系	理系	文系	理系
興味や関心をもっていること	85.8	< 91.8	95.0	95.3
得意な科目	76.3	80.8	82.6	> 74.7
希望している職業	60.3	< 68.9	67.5	82.1
苦手な科目	57.2	57.4	64.9	54.6
模擬試験の結果	55.0	56.8	59.2	55.2
進路に関する授業や学習	37.8	41.5	46.2	> 40.7
部活動での経験	15.2	12.5	12.4	11.0
職場体験	3.7	5.6	4.8	< 10.5

- * 数値は「とても影響した」と「やや影響した」の合計。
- * 専攻の文理別について、「文系と理系の中間」「どちらでもない」と回答した者は表から省略した。
- * 「模擬試験の結果」以下の4項目は、選択肢に「やっていない」が含まれている。
- * < > は5ポイント以上の差があったもの、 は10ポイント以上の差があったもの。
- * ○ は、文系男子、理系男子、文系女子、理系女子のなかの最高値を示す。

表1-4-2 進路の決定に影響したこと（学部系統別）（％）

	全体	人文科学系統	社会科学系統	教育学系統	理工学系統	医歯薬看護学系統	農水産学系統
興味や関心を持っていること	92.2	94.4	83.1	94.6	92.4	94.5	97.3
得意な科目	77.1	83.2	75.0	77.2	80.6	67.2	81.4
希望している職業	71.2	62.4	59.9	84.4	68.4	93.0	67.7
苦手な科目	57.9	62.6	63.2	58.3	58.0	49.8	55.1
模擬試験の結果	56.1	56.0	59.4	58.7	56.3	56.2	56.6
進路に関する授業や学習	41.7	42.9	42.5	40.4	42.0	42.5	38.2
部活動での経験	13.8	13.6	11.3	25.7	10.1	13.8	9.2
職場体験	7.0	4.5	2.9	6.9	4.2	23.0	4.0

- * 数値は「とても影響した」と「やや影響した」の合計。
- * 「模擬試験の結果」以下の4項目は、選択肢に「やっていない」が含まれている。
- * 専攻の学部系統別について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は表から省略した。
- * ○ は全体の平均値よりも5ポイント以上、 は10ポイント以上高いものを示す。
- * は全体の平均値よりも5ポイント以上、 は10ポイント以上低いものを示す。

5 . 意見を参考にした相談相手

(1) 全体の傾向

次に、高校時代に進路を考えたときに、どのような人への相談を参考にしたかをたずねた。本節では、進路を考えている際に強く影響を受けている人物は誰かという観点から、高校段階での進路選択について考えてみたい。

図 1 - 5 - 1 は、それぞれの相談相手について、相談を参考にしたかどうかを聞いた結果を示している。「とても参考にした」「やや参考にした」「あまり参考にしなかった」「ぜんぜん参考にしなかった」の 4 段階に加えて、「いない・相談しなかった」という選択肢を設けた。これをみると、「参考にした」(「とても参考にした」と「やや参考にした」の合計、以下同様)の比率がもっとも高いのは「高校の先生」(70.0%)である。前節で確認したように、進路の決定に影響したこととして「進路に関する授業や学習」が「影響した」と回答した者は 41.7%と過半数に満たなかった(図 1 - 4 - 1)。授業としての進路学習は十分に機能していない様子もうかがえたが、進路指導の専門家でもある「高校の先生」は、相談相手として頼りにされていることがわかる。高校生にとって高校教員は身近で、相談しやすい相手である。それゆえ、生徒が進路選択を考える際にもっとも重要な役割を担っているといえる。学問領域や職業世界が多様化する今日、高校教員がもっている進路指導に関する知識や技能をいかに維持し、相談機能を高めていくかは、大きな課題となろう。

「高校の先生」に続いて多い回答は、「母」(67.7%)、「学校の友だち」(56.3%)であり、ここまでが過半数を超える。「父」は 48.7%で、「母」よりも 19.0 ポイント低かった。「塾や予備校の先生」は、そのような学校外教育機関に通っていなかった者もいるためか、「参考にした」という回答は 3 割を下回る。

(2) 性による違い

こうした結果を性別にみたのが、図 1 - 5 - 2 である。これをみると、男子に比べて女子はさまざまな人の意見を参考にしていることがわかる。もっとも性差が大きいのは、「母」の意見を「参考にした」という回答であり、男子 59.7%に対して女子 73.9%となっている。また、ほとんどの項目で女子の比率が男子を上回るのに対して、「父」は性差がみられなかった(男子 49.6%、女子 48.1%)。

図1-5-1 意見を参考にした相談相手

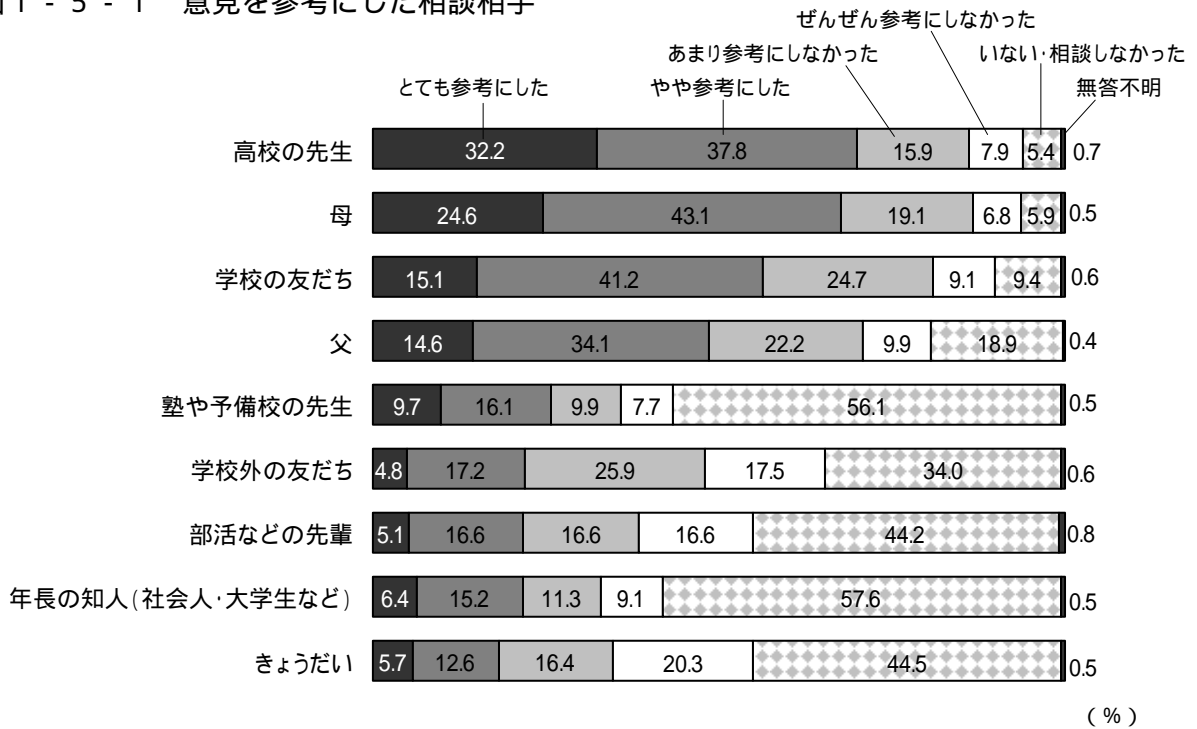
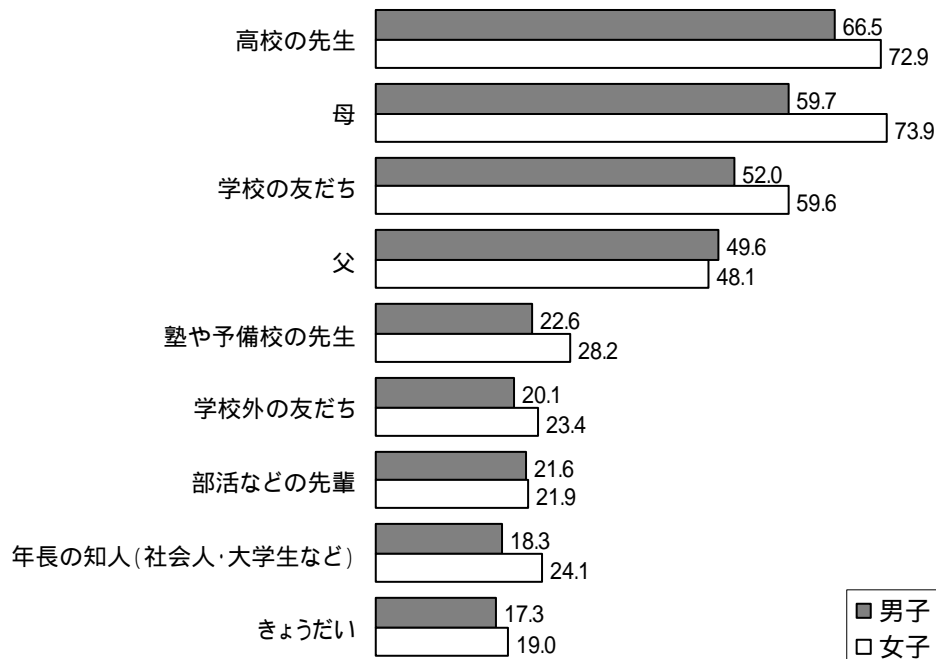


図1-5-2 意見を参考にした相談相手(性別)



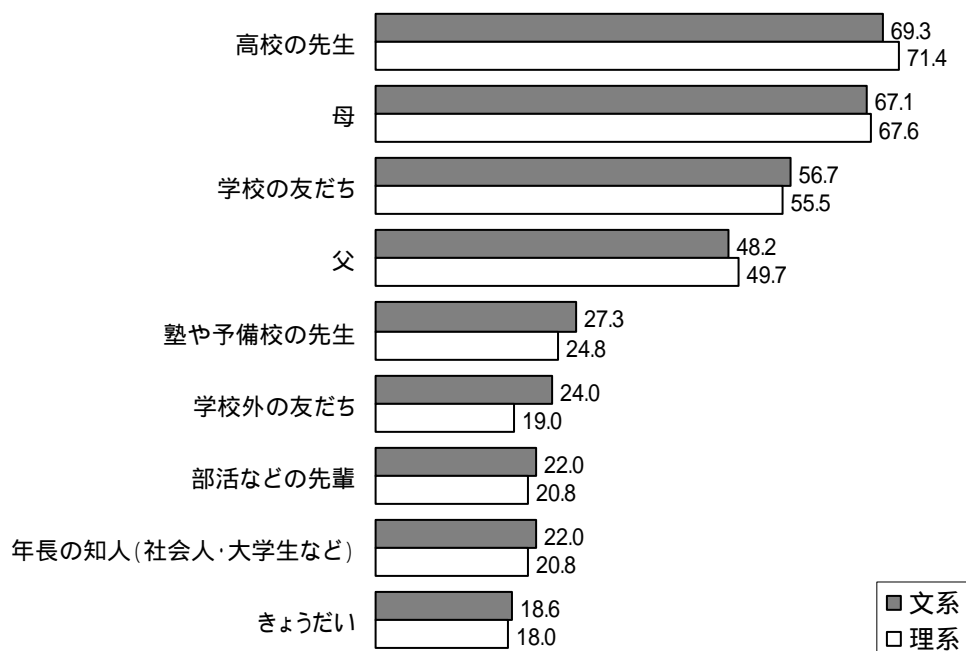
* 数値は「とも参考にした」と「やや参考にした」の合計(%)

(3) 文系 - 理系による違い

さらに、**図1 - 5 - 3**で文系学生と理系学生の違いを示したが、「学校外の友だち」でわずかに文系学生の比率が高いほかは大きな差がみられなかった。

さらに、状況をより詳しくみるために、文系男子、理系男子、文系女子、理系女子にわけて数値を示したのが、**表1 - 5 - 1**である。ここでも、文系・理系を問わず女子のほうがさまざまな人の意見を参考にしていることがわかる。ただし、理系男子で「父」の意見を参考にしている比率が若干高い。これは、理系の専門領域に進学しようとする男子に対しては、父親自身の学習体験や職業体験から助言する場面が多くなることを表しているのかもしれない。

図1 - 5 - 3 意見を参考にした相談相手（文理別）



* 数値は「とても参考にした」と「やや参考にした」の合計 (%)。

* 専攻の文理別について、「文系と理系の中間」「どちらでもない」と回答した者は図から省略した。

表1-5-1 意見を参考にした相談相手(性別・文理別) (%)

	男子		女子	
	文系	理系	文系	理系
高校の先生	66.7	67.1	71.4	75.0
母	60.1	60.1	72.9	73.9
学校の友だち	52.2	51.8	60.5	58.7
父	48.5	52.2	48.1	47.5
塾や予備校の先生	23.7	22.1	30.2	27.1
学校外の友だち	20.8	18.2	26.5	19.5
部活などの先輩	23.4	19.8	20.9	21.7
年長の知人(社会人・大学生など)	19.7	16.8	24.0	24.2
きょうだい	17.1	17.1	19.8	18.7

- * 数値は「とても参考にした」と「やや参考にした」の合計。
- * 専攻の文理別について、「文系と理系の中間」「どちらでもない」と回答した者は表から省略した。
- * < > は5ポイント以上の差があったもの。
- * ○ は、文系男子、理系男子、文系女子、理系女子のなかでの最大値を示す。

6 . 参考にした情報源

(1) 全体の傾向

続いて、大学に関する情報源について、各種の媒体や資料を参考にしたかどうかをたずねた。図1 - 6 - 1は、その結果である。

これをみると、「参考にした」(「とても参考にした」と「やや参考にした」の合計、以下同様)が多いのは順に、「大学の入学案内やパンフレット」89.1%、「進学に関する本や雑誌」75.0%、「高校が提供する進路指導の資料」72.3%、「オープンキャンパス(公開授業なども含む)」55.4%、「大学説明会・相談会」53.5%となっており、ここまでが過半数に達している。大学が制作する媒体、本や雑誌、高校が作成する資料など、紙媒体が最上位にくる。しかし、オープンキャンパスや説明会・相談会など、大学側が設定する場に足を運び、そこで得られる情報を参考にする者も多いようだ。高校生たちは、さまざまな媒体や機会から大学に関する情報をよく集め、参考に行っていることがわかる。

次に、情報源の活用を性別にみると、相談相手と同様に、男子に比べて女子のほうが多くの情報源を参考に行っていることがわかる(図1 - 6 - 2)。とくに、「オープンキャンパス(公開授業なども含む)」「大学説明会・相談会」での性差が大きく、女子は直接、大学まで出向いて情報収集をする者が多い。

さらに、参考にした情報源について、文系学生と理系学生の違いをみたのが、図1 - 6 - 3である。ここからわかるように、情報収集に関しては、文系と理系で大きな差はない。理系学生のほうが、「大学のホームページ」を「参考にした」比率が高くなっている程度である。

図1 - 6 - 1 参考にした情報源

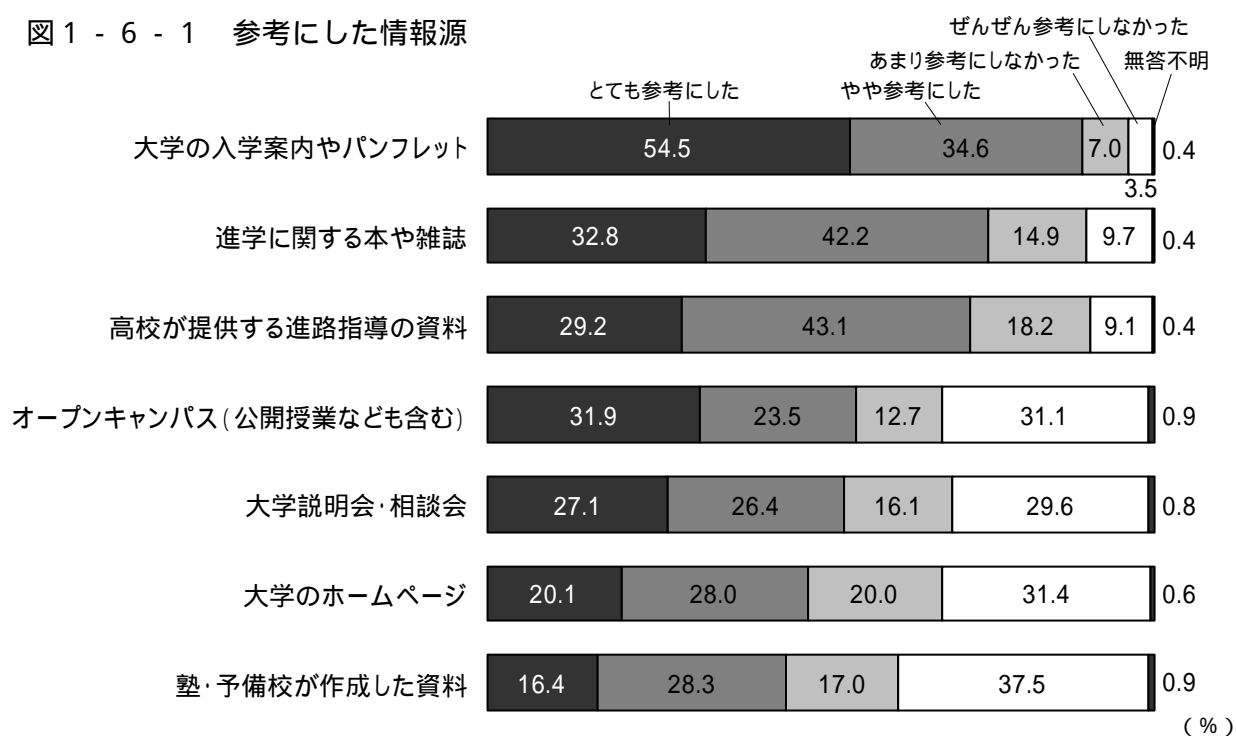
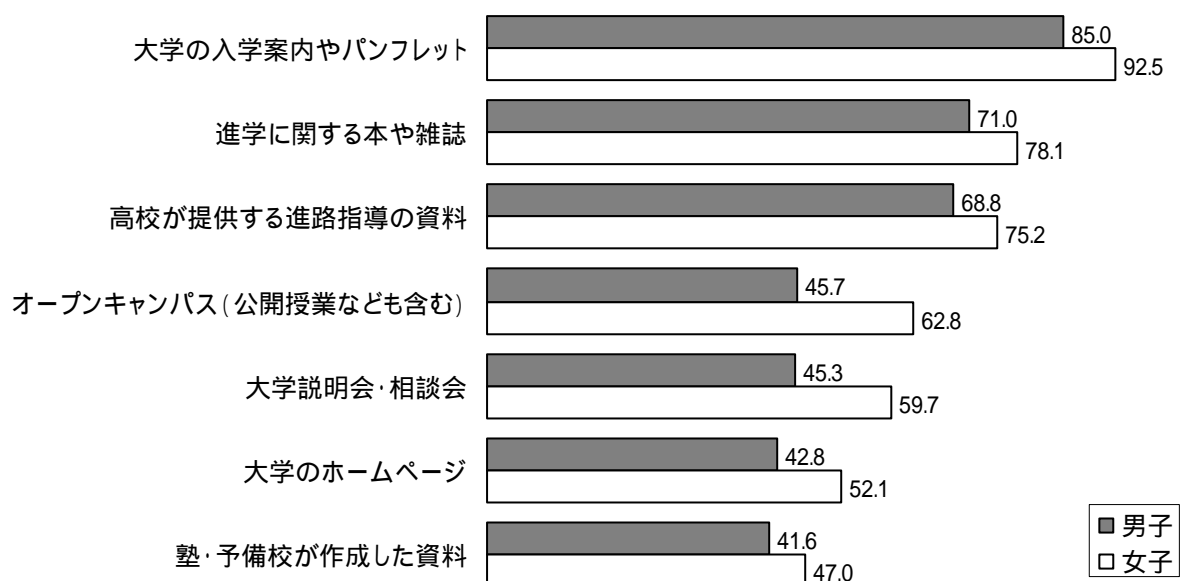
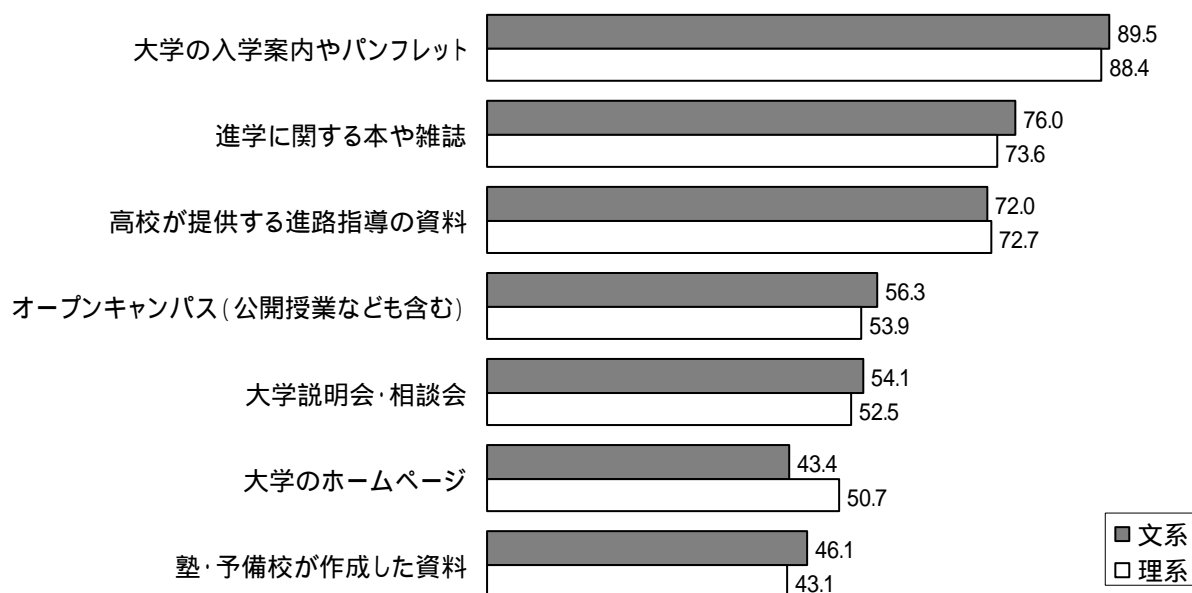


図1-6-2 参考にした情報源（性別）



* 数値は「とても参考にした」と「やや参考にした」の合計 (%)。

図1-6-3 参考にした情報源（文理別）



* 数値は「とても参考にした」と「やや参考にした」の合計 (%)。

* 専攻の文理別について、「文系と理系の中間」「どちらでもない」と回答した者は図から省略した。

この結果について文系男子、理系男子、文系女子、理系女子の違いを確認するために、表 1 - 6 - 1 を作成した。これをみると、文系女子がそれぞれの情報源を積極的に活用する様子が表れている。男子のなかの文系と理系の差、女子のなかの文系と理系の差はそれほど大きくないが、「大学のホームページ」はやはり男女とも理系学生が積極的に活用している様子がうかがえる。

表 1 - 6 - 1 参考にした情報源（性別・文理別） (%)

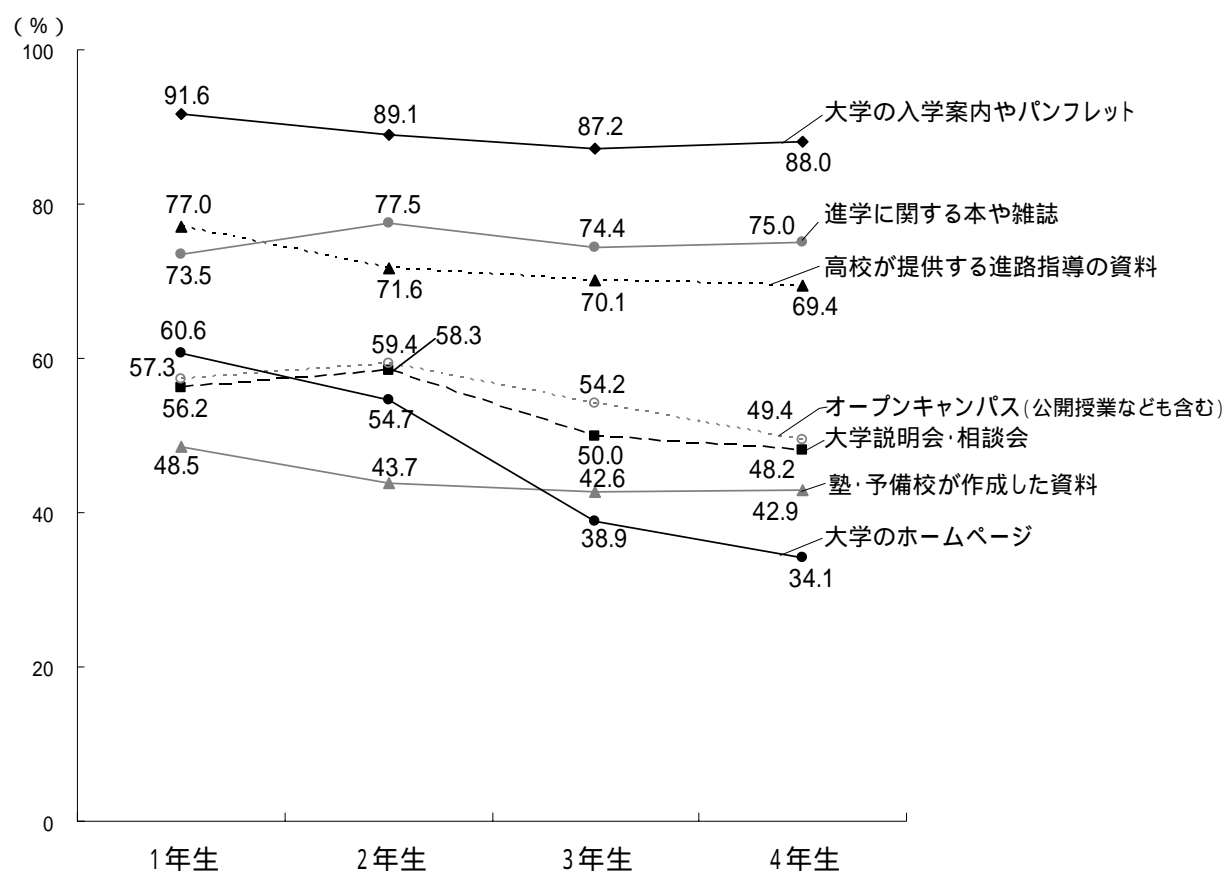
	男子		女子	
	文系	理系	文系	理系
大学の入学案内やパンフレット	85.8	84.6	92.7	91.6
進学に関する本や雑誌	73.2	69.0	78.2	77.3
高校が提供する進路指導の資料	67.6	69.7	75.3	75.3
オープンキャンパス(公開授業なども含む)	46.2	45.5	64.4	60.8
大学説明会・相談会	45.5	46.2	61.0	57.6
大学のホームページ	36.8	47.0	48.8	< 53.9
塾・予備校が作成した資料	42.4	40.9	49.1	45.1

- * 数値は「とても参考にした」と「やや参考にした」の合計。
- * 専攻の文理別について、「文系と理系の中間」「どちらでもない」と回答した者は表から省略した。
- * は 10 ポイント以上、< > は 5 ポイント以上の差があったもの。
- * ○ は、文系男子、理系男子、文系女子、理系女子のなかでの最大値。

(2) 学年による変化

なお、「大学のホームページ」は全体では「参考にした」比率が過半数に達していないが、学年差が大きい。図1-6-4に示したように、その比率は、大学1年生 60.6% > 2年生 54.7% > 3年生 38.9% > 4年生 34.1%となっている。ホームページから情報を引き出すという方法が、この1～2年の間で急速に広まったことを裏づけており、今後はより重要な情報源となる可能性が高いといえよう。

図1-6-4 参考にした情報源(学年別)



* 数値は「とても参考にした」と「やや参考にした」の合計。

7. 進路を選択するときの悩み

(1) 全体の傾向

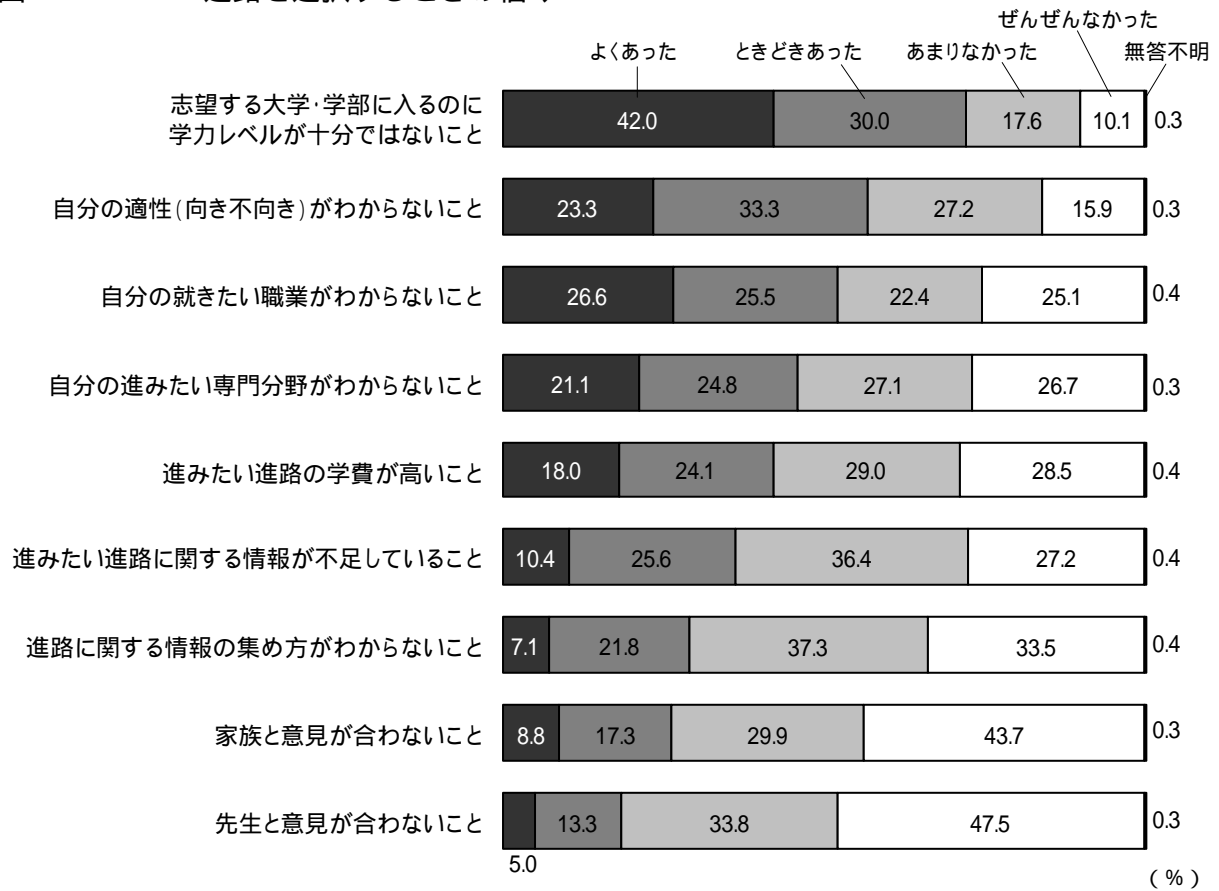
4～6節では、高校時代にどのような基準で進路を決め、どのような人物や情報源からの情報を活用しているかを概観してきた。性や文系・理系、専門領域などにより違いはあるものの、総合的にみれば、高校生の多くが「興味や関心をもっていること」や「希望している職業」を考えて進路を選択しており、前向きな姿勢がうかがえる。また、「高校の先生」や「母」「学校の友だち」といった身近な人物への相談を参考にし、各種媒体の情報も積極的に収集している状況が明らかになった。このように、進路選択のプロセスは、比較的円滑に進んでいるようである。しかし、高校時代に進路選択に悩むことは少なかったのだろうか。また、悩みがあるとすれば、どのような内容なのだろうか。本節では、その点について検討していきたい。

図1-7-1をみると、進路選択の悩みの第一位は「志望する大学・学部に入るのに学力レベルが十分ではないこと」(72.0%、「よくあった」と「時々あった」の合計、以下同様)である。自分の適性や進みたい専門領域がわからないといった志向や進路の方向性についての不一致よりも、自分の学力と志望大学が求める学力の不一致のほうが悩みとしては大きい。

しかしながら、「自分の適性(向き不向き)がわからないこと」(56.6%)、「自分の就きたい職業がわからないこと」(52.1%)という悩みも過半数に達し、「自分の進みたい専門分野がわからないこと」(45.9%)という悩みを抱える高校生も少なくはない。学力の問題と同様に、自分がどのような適性や能力をもち、どのような専門領域に進み、将来的にどのような職業に就けばよいのかといったことも、多くの高校生は悩んでいる。具体的な大学選択(専門とする学問領域と受験する大学の選択)に先立って、自分の向き不向きや好き嫌いについて理解し、自らの生き方や職業について考える機会を、高校時代に十分準備する必要がある。

その一方で、「進みたい進路に関する情報が不足していること」(36.0%)や「進路に関する情報の集め方がわからないこと」(28.9%)などの情報収集に関する悩みや、「家族と意見が合わないこと」(26.1%)、「先生と意見が合わないこと」(18.3%)など人間関係に付随する悩みは相対的に少ない。情報量の不足や情報源の不備、相談先との対立といった進路決定のプロセスや方法に関連する悩みよりはむしろ、自分の将来としてどのような方向を選択すればよいかという本質的な悩みを抱えているようである。

図1-7-1 進路を選択するときの悩み



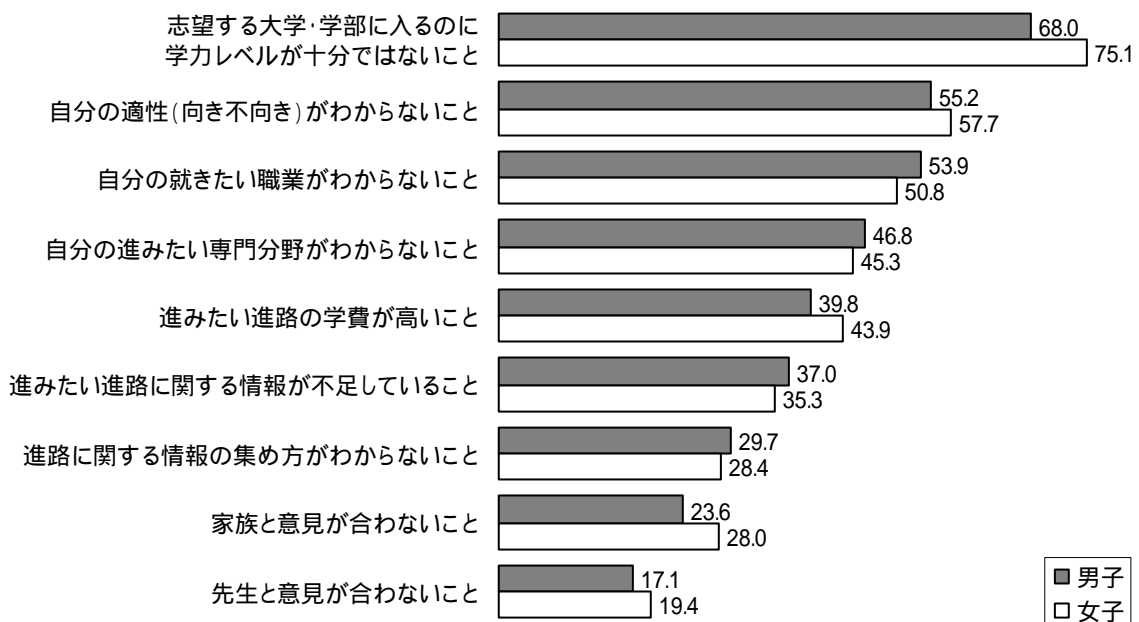
(2) 性や文系 - 理系による違い

ところで、このような悩みの状況は、男女で異なるのだろうか。「よくあった」と「時々あった」の合計を性別に示したのが、**図1-7-2**である。これをみると、項目の順位や全体の傾向は男女で変わらない。しかし、「志望する大学・学部に入るのに学力レベルが十分ではないこと」は男子68.0%に対して、女子75.1%となっており、差が生じている。学力レベルの不一致に関する悩みは、女子のほうが感じていることがわかる。このほか、「進みたい進路の学費が高いこと」「家族と意見が合わないこと」もわずかに女子の比率が高いが、全体的には大きな差はみられないといっていよう。

次に、文系と理系(**図1-7-3**)による違いをみると、「自分の就きたい職業がわからないこと」(文系学生56.0% > 理系学生49.8%、以下同様)、「自分の進みたい専門分野がわからないこと」(48.5% > 43.0%)といった将来の方向性に関する悩みについて、文系学生の比率が高くなっている。相対的にみて、文系学生は自分の適性・能力を大学で専攻する専門領域や将来の職業に結びつけて考えられないようである。これは学問の性格上、実学的な要素が少なく、専門領域と職業を結びつけて考えることが難しいためかもしれない。

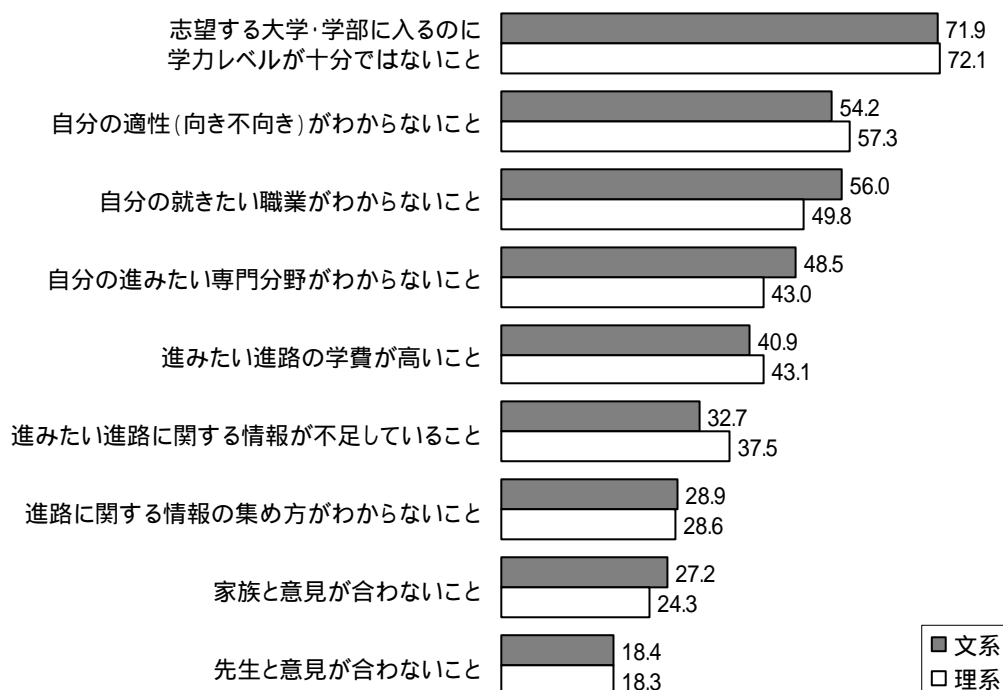
ちなみに、性差についても考慮してみると、こうした悩みを抱えているのは、女子の文系学生に多いことがわかる(**表1-7-1**)。理系女子は医歯薬看護学系統への進学者が多く、専門領域と職業の結びつきが明確な者が多いが、文系女子は人文科学系統への進学者が多く、専門領域と職業の結びつきをなかなかリアルに感じられないのかもしれない。このことから、文系女子と理系女子の差が大きくなっていると考えられる。

図1-7-2 進路を選択するときの悩み(性別)



* 数値は「よくあった」と「時々あった」の合計(%)

図1-7-3 進路を選択するときの悩み（文理別）



* 数値は「よくあった」と「時々あった」の合計 (%)。

* 専攻の文理別について、「文系と理系の中間」「どちらでもない」と回答した者は図から省略した。

表1-7-1 進路を選択するときの悩み（性別・文理別）

(%)

	男子		女子	
	文系	理系	文系	理系
志望する大学・学部に入るのに学力レベルが十分ではないこと	67.8	68.6	75.1	75.2
自分の適性(向き不向き)がわからないこと	53.7	55.5	54.7	58.8
自分の就きたい職業がわからないこと	54.3	54.1	57.4	46.5
自分の進みたい専門分野がわからないこと	48.4	45.0	48.7	> 41.5
進みたい進路の学費が高いこと	40.4	40.0	41.3	45.7
進みたい進路に関する情報が不足していること	34.3	38.4	31.5	< 36.7
進路に関する情報の集め方がわからないこと	29.2	29.4	28.7	27.9
家族と意見が合わないこと	25.3	21.7	28.7	26.4
先生と意見が合わないこと	17.9	16.3	18.7	20.0

* 数値は「よくあった」と「時々あった」の合計。

* 専攻の文理別について、「文系と理系の中間」「どちらでもない」と回答した者は表から省略した。

* < > は5ポイント以上の差があったもの、> は10ポイント以上の差があったもの。

* ○ は、文系男子、理系男子、文系女子、理系女子のなかでの最大値。

(3) 学部系統による違い

それでは、進路を選択するときの悩みは、進学した学部系統によって異なるのであろうか。その結果を、表1-7-2に示した。これをみると、「自分の就きたい職業がわからないこと」「自分の進みたい専門分野がわからないこと」などの悩みは、専門領域と職業の結びつきが強い教育学系統や医歯薬看護学系統では少ない。これらは、人文科学系統や社会科学系統に高いが、理工学系統や農水産学系統でも決して低くない。専門領域が「その職業に就くため」といった実学的要素が弱い学部系統ほど、抱えやすい悩みだということができる。このほか、医歯薬看護学系統の学生は、「進みたい進路の学費が高いこと」を悩みとして感じている。

以上を総合すると、次のようなことがいえるだろう。高校生が抱える進路選択上の悩みの第一位は、「志望する大学・学部に入るのに学力レベルが十分ではないこと」である。これに関しては、少しでも希望に近づくよう本人の努力をうながしたり、周囲は学力を高めるための指導や現実に沿った選択を可能とする支援を行うことで対処するしかない。次に多いのは、「自分の適性(向き不向き)がわからないこと」「自分の就きたい職業がわからないこと」「自分の進みたい専門分野がわからないこと」といった悩みである。これらは高校時代に十分な情報提供をして、自己理解や適性、将来について考える機会を与える必要があると考える。とくに、職業との結びつきが弱い専門領域への進学を希望する者はこの種の悩みを持ちやすく、十分な機会を提供することが望ましい。

表1-7-2 進路を選択するときの悩み(学部系統別) (%)

	全体	人文科学系統	社会科学系統	教育学系統	理工学系統	医歯薬看護学系統	農水産学系統
志望する大学・学部に入るのに学力レベルが十分ではないこと	71.9	74.1	71.2	<u>66.1</u>	71.8	75.2	72.7
自分の適性(向き不向き)がわからないこと	56.6	53.6	59.3	54.0	56.9	58.2	55.8
自分の就きたい職業がわからないこと	52.1	<u>57.4</u>	<u>60.1</u>	<u>37.1</u>	56.8	<u>34.1</u>	55.3
自分の進みたい専門分野がわからないこと	45.9	47.5	<u>55.5</u>	<u>36.8</u>	47.9	<u>34.6</u>	44.4
進みたい進路の学費が高いこと	42.1	42.9	39.0	<u>30.1</u>	39.6	<u>50.1</u>	38.5
進みたい進路に関する情報が不足していること	36.0	35.2	<u>31.0</u>	38.2	39.5	31.4	40.4
進路に関する情報の集め方がわからないこと	28.9	29.4	29.0	29.2	30.7	<u>23.7</u>	29.0
家族と意見が合わないこと	26.1	29.3	27.7	23.4	23.2	25.5	<u>20.3</u>
先生と意見が合わないこと	18.4	19.5	18.7	14.7	16.9	19.0	13.9

* 数値は「よくあった」と「時々あった」の合計。

* 専攻の学部系統別について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は表から省略した。

* ○ は全体の平均値よりも5ポイント以上高いものを示す。

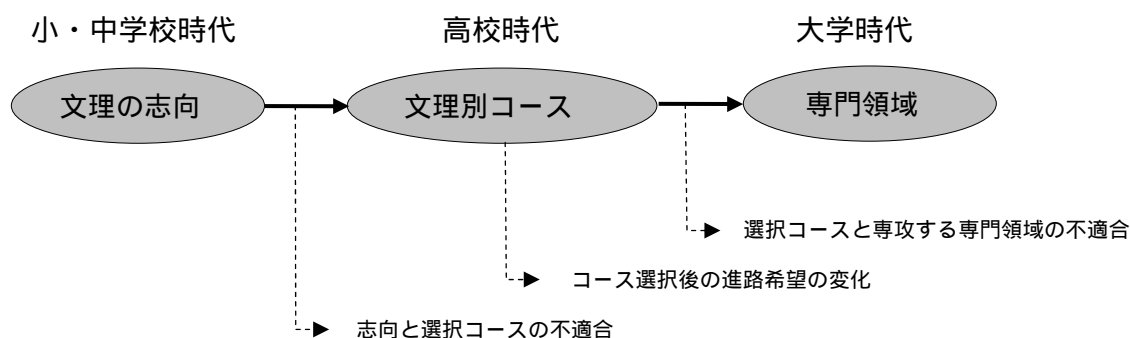
* 一重下線は全体の平均値よりも5ポイント以上、二重下線は10ポイント以上低いものを示す。

8．高校時代の進路変更

本節では、高校時代の進路変更に焦点をあてたい。実際に、高校時代に進路を変更する者がどれくらいの割合でいるのか、その者たちはどのようなプロセスを経て進路を変更するのか、進路変更の際に課題となることはないかといったことを検討する。さらに、この検討を通して、人材育成という観点から無駄がないかを考察する。

高校時代を中心にして、小・中学校時代から大学入学にいたるまでの過程で進路の変更や選択のアンマッチ（もともとの適性や能力とは異なる選択をしてしまうこと）が起こる可能性は、**図1 - 8 - 1**に示した通りである。第一に、高校入学時に、小・中学校時代の志向やそれまでの学習や体験により蓄積してきた知識や技能とは合わないコースを選択してしまうケースである。一般に、普通科、職業科、総合学科などといった学科の選択は、多くの場合、高校受験の時点で行う。また、普通科であっても、多くの高校では高校1年生の段階や1年生から2年生の移行期に、文系・理系等のコースを選択させる。こうした、学科やコース選択の際に、本人の志向と選択コースの間の不適合を内在させてしまう可能性がある。第二に、高校入学後（学科やコース選択後）の進路希望の変化が考えられる。コースを選択したあとに、自分の適性や能力に合っていない、もしくは、選択しなかったコースのほうが自分に合っていると感じるケースもあるだろう。文系と理系の間で進路変更が行われることも多く、俗に、文転（理系から文系への進路変更）、理転（文系から理系への進路変更）と呼ばれる。第三に、高校時代に選択した学科やコースと大学で専攻する専門領域との不適合である。将来の職業などを考慮して、専門領域の希望が変わることもあるだろう。しかし、この場合、直前に迫る大学受験に対応しなければならず、志望大学を変更したり、受験に必要なだが高校で履修していない教科を独力で学習したりといった困難を伴う。さらに、大学入学後であれば、編入、転部・転科のための試験や大学受験のやり直しなど、いっそうの困難が生じるため、解決が難しくなる。なお、大学入学後の進路変更については、3章で詳述しているので、そちらに譲ろう。

図1 - 8 - 1 進路選択における課題



(1) 志向とコースの一致状況

それでは最初に、小・中学校時代の志向と高校でのコース選択の一致の程度をみてみよう。

図1-8-2の「志向タイプ別」のグラフは、2節で述べた文系・理系の志向タイプごとに、高校で選択したコースを示したものである。小・中学校時代に文系的活動と理系的活動の両方を行ってきたマルチ志向タイプの場合だと、「理系中心の学科やコース」を選択する比率が高く、両方の志向をもっていると理系への進学が促進される様子を示している。反対に、両方の志向をもっていない文理志向なしタイプでは、「文系中心の学科やコース」への進学が多くなっている。

文系的活動が中心で理系的活動が少なかった文系志向タイプは、57.8%が「文系中心の学科やコース」を選択している。さらに、理系的活動を中心に行ってきた理系志向タイプでは、63.6%が「理系中心の学科やコース」を選択している。このように、概ね、自らの志向にそったコース選択をしているようである。ただし、それぞれ反対のコースを選択する者（文系志向タイプの「理系中心の学科やコース」の選択者、および、理系志向タイプの「文系中心の学科やコース」の選択者）の割合も2～3割程度存在しており、小・中学校時代の志向と高校でのコース選択の不適合が一定の割合で存在することがわかる。

同様に、2節で行った主成分分析の結果から、理系志向の強弱だけを取り出して検討した結果が「理系志向別」のグラフである。ここからも、理系志向が強い者（上位四分の一に位置する者）のうちの23.7%が「文系中心の学科やコース」に進んでいることがわかる。

では、小・中学校時代の志向と高校でのコース選択が一致していない者は、どのような特徴をもっているのだろうか。表1-8-1では、不適合がある者となない者を想定して、進路選択上の悩みをみたものである。すなわち、不適合がある者とは、「文系中心の学科やコース」に進学している理系志向タイプ、および、「理系中心の学科やコース」に進学している文系志向タイプを指す。全体をみると、不適合がある者となない者の間の差は小さいが、1点だけ異なるのは不適合がある者に「自分の適性（向き不向き）がわからないこと」の比率が高いことである。この結果を踏まえれば、自分にどのような適性や能力があるかを十分に把握できていないと、志向に合わないコース選択をしてしまう確率が高まることになる。

では、この段階での不適合を防ぐには、どうすればよいただろうか。大きく2つの方法が考えられる。第一に考えられるのは、コースの選択を丁寧に行うという方法である。自己理解（自分の適性、能力、経験などの検討と理解）のための時間を十分にとり、学問の各領域についての情報や、学問と資格や職業との結びつきについての情報を豊富に与えて、進路についてじっくり考えた後にコースの選択を行うという方法である。これにより、何となく選択したり、親しい友だちに合わせたり、苦手教科や履修がたいへんな教科を忌避するなどの場当たり的な選択が避けられ、不適合も軽減されるものと思われる。

第二に考えられるのは、高校段階では明確な文理分けを行わない、もしくは、文理分けの時期を遅らせる（高校3年生の段階でコース選択を行うなど）という方法である。本調査で

図1-8-2 高校時代のコース（志向タイプ別・理系志向別）

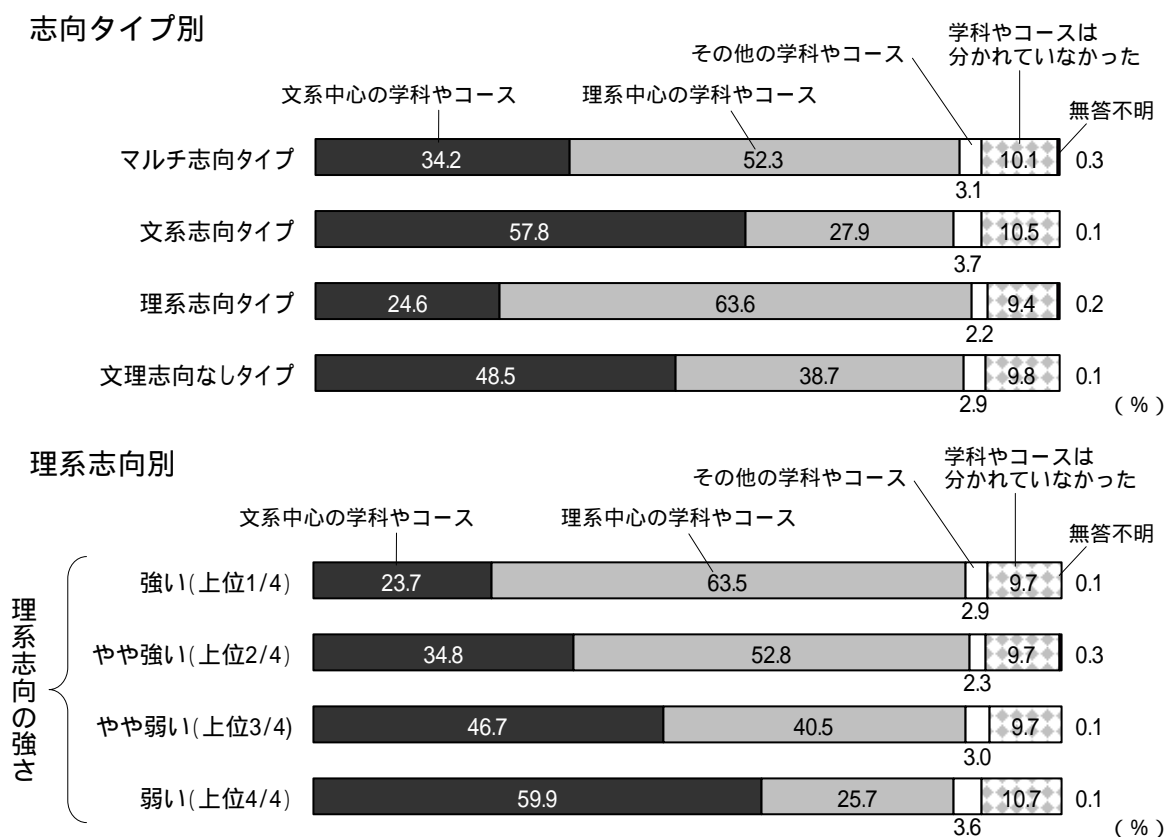


表1-8-1 進路を選択するときの悩み（高校時代のコース・志向タイプ別）（%）

	全体	文系中心の学科やコース		理系中心の学科やコース	
		文系志向タイプ	理系志向タイプ	理系志向タイプ	文系志向タイプ
志望する大学・学部に入るのに 学力レベルが十分ではない	71.9	71.4	68.1	74.4	73.1
自分の適性(向き不向き)がわからない	56.6	52.8	< 58.0	54.6	< 64.4
自分の就きたい職業がわからない	52.1	53.7	56.0	53.0	49.3
自分の進みたい専門分野がわからない	45.9	44.4	< 49.9	44.5	48.0
進みたい進路の学費が高い	42.1	41.2	44.0	43.1	43.0
進みたい進路に関する情報が不足している	36.0	33.9	37.5	39.3	36.7
進路に関する情報の集め方がわからない	28.9	27.9	32.1	31.2	27.3
家族と意見が合わない	26.1	28.4	24.9	23.9	26.9
先生と意見が合わない	18.4	20.0	17.8	17.8	20.3

* 数値は「よくあった」と「時々あった」の合計。
 * 高校時代のコースについて「その他の学科やコース」「学科やコースは分かれていなかった」「無答不明」の者は表から省略した。また、志向タイプについて、「マルチ志向タイプ」「文理志向なしタイプ」の者は、表から省略した。
 * < > は5ポイント以上の差があったもの。

も1割程度の者が「学科やコースは分かれていなかった」と回答しているが、コースを明確に分けずに文系・理系を問わず必要な教科を共通で履修させる高校もある。この方法の利点は、教科を幅広く履修することになるので、専攻する専門領域や受験できる大学の幅が広がること、進路変更をしたいときに限られた教科を学習しているよりも移動が容易であることがあげられる。また、大学入学後も、自分の専門の周辺領域を含めた高校課程の教科の知識・技能を習得していることは、専門の深化にも役立つものと推察される。大学受験に必要な教科だけを履修したため、大学入学後、専門領域の履修に必要となる基礎知識を身につけていないといった事態を防ぐことができよう。

いずれにせよ、大学受験に合格するための効率だけを考えて安易にコースを設定し、十分な時間をかけずにコース選択をさせることは、高校生本人にとってもマイナスが大きいだけでなく、適性に応じた進路に進まないという点でも人材育成上のロスを生んでいると考えられる。

(2) 高校入学後の進路変更

次に、高校入学後(学科やコース選択後)の進路希望の変化について考えたい。本調査では、高校時代の進路変更について「もともと文系志望だったが理系に変わった」「もともと理系志望だったが文系に変わった」「文系・理系の進路選択に変化はなかった」の3つのなかから選んでもらった。その結果が、表1-8-2である。これをみると、進路変更がなかった者は84.5%で、14.3%の者が文系から理系への進路変更(以下、「理転」と表記する)もしくは理系から文系への進路変更(以下、「文転」と表記する)を経験していることがわかる。独学の困難さや大学受験との関連から、理転は難しいとよくいわれるが、文転8.5%に対して理転は5.8%と若干少ない。また、性別にみると、理転した者は女子に多く、文転した者は男子に多いという結果になっている。

これを、学部系統ごとにみたのが、表1-8-3である。理転した者は、医歯薬看護学系統と農水産学系統に多い。これは、第3節(高校時代の教科の好き嫌い)でみたように、文系学生も比較的得意としている「生物」を生かした進路変更であろう。文系学生が苦手とする「物理」を必要とした理工学系統では、理転した者が相対的に少ない。文転した者は、社会科学系統に多い。これは、同じ文系学部のなかでも、理系学生が得意としている「数学」を生かしやすいためではないかと推察される。

表1-8-2 高校時代の進路変更（文理別・性別） (%)

	全体	文系		理系	
		男子	女子	男子	女子
もともと文系志望だったが理系に変わった	5.8	1.4	1.0	6.8	< 12.5
もともと理系志望だったが文系に変わった	8.5	17.2	> 10.0	3.2	3.3
文系・理系の進路選択に変化はなかった	84.5	81.3	< 88.8	89.8	> 83.9
無答不明	1.1	0.2	0.1	0.2	0.3

* < >は5ポイント以上の差があったもの。

* 専攻の文理別について、「文系と理系の中間」「どちらでもない」と回答した者は表から省略した。

表1-8-3 高校時代の進路変更（学部系統別） (%)

	全体	人文科学系統	社会科学系統	教育学系統	理工学系統	医歯薬看護学系統	農水産学系統
もともと文系志望だったが理系に変わった	5.8	1.0	1.6	4.5	8.4	11.4	12.4
もともと理系志望だったが文系に変わった	8.5	10.1	19.4	9.8	2.1	4.8	3.0
文系・理系の進路選択に変化はなかった	84.5	87.5	78.0	84.4	88.9	82.8	82.6
無答不明	1.1	1.3	1.0	1.3	0.6	1.1	2.0

* 専攻の学部系統別について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は表から省略した。

* ○は全体の平均値よりも5ポイント以上、◎は10ポイント以上高いものを示す。

* 一重下線は全体の平均値よりも5ポイント以上低いものを示す。

さらに、**図1-8-3**では文転者の特徴を、**図1-8-4**では理転者の特徴を示した。まず、文転者（全体の8.5%）の特徴であるが、数をみると男女の内訳はほぼ半々になる。男子では社会科学系統への進学者が圧倒的に多く、52.8%を占めている。これは、先に述べたように、比較的得意な「数学」を生かした進路変更と考えられる。一方、女子は、人文科学系統への進学者がもっとも多く、社会科学系統がそれに続く。全体としては、各学部系統に分散する傾向があるようだ。

次に理転者（全体の5.8%）の特徴である。男女の内訳は、男子1：女子2の割合である。男子は理転者そのものの数は少ないが、進学した者の多くが理工学系統（53.6%）を選択している。一方、女子は、医歯薬看護学系統が多い。これは、資格取得や職業選択を考慮して、この系統を選択する文系女子が多いためであろう。

図1-8-3 「文転者」の特徴 (%)

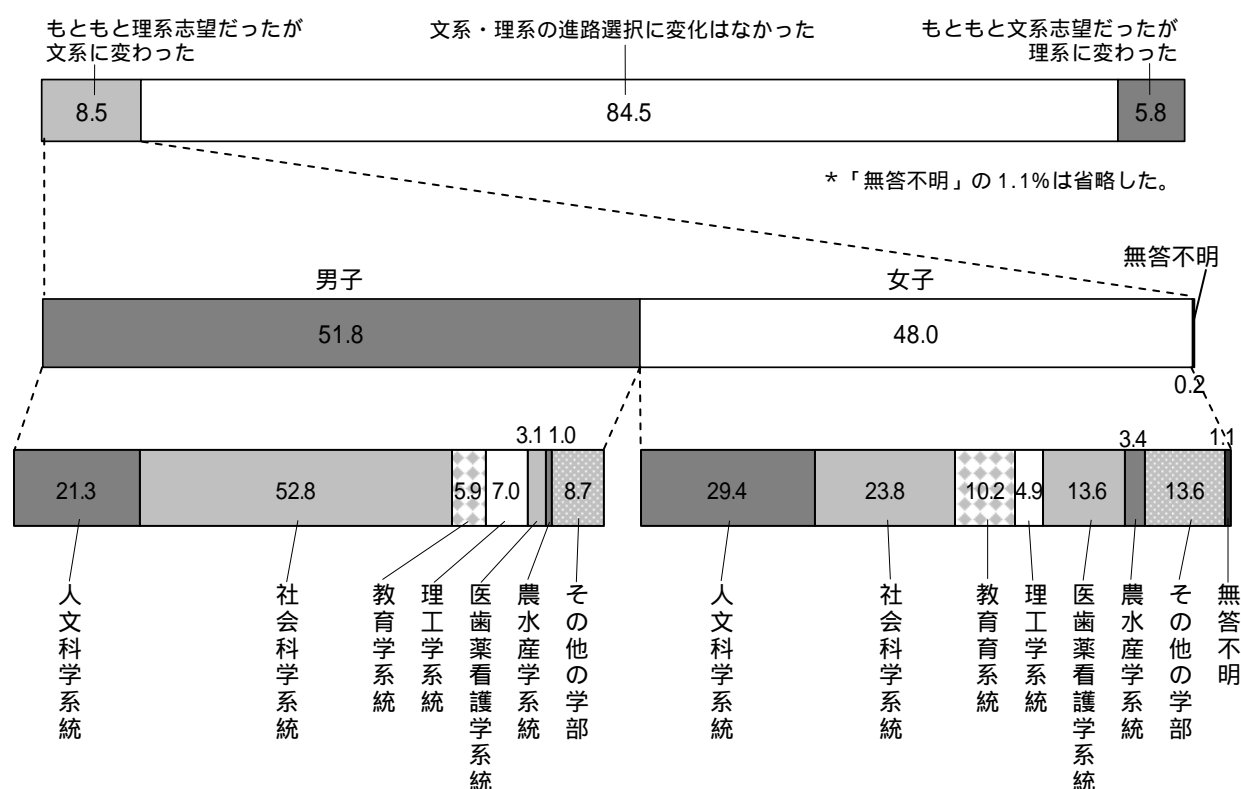


図1-8-4 「理転者」の特徴

(%)

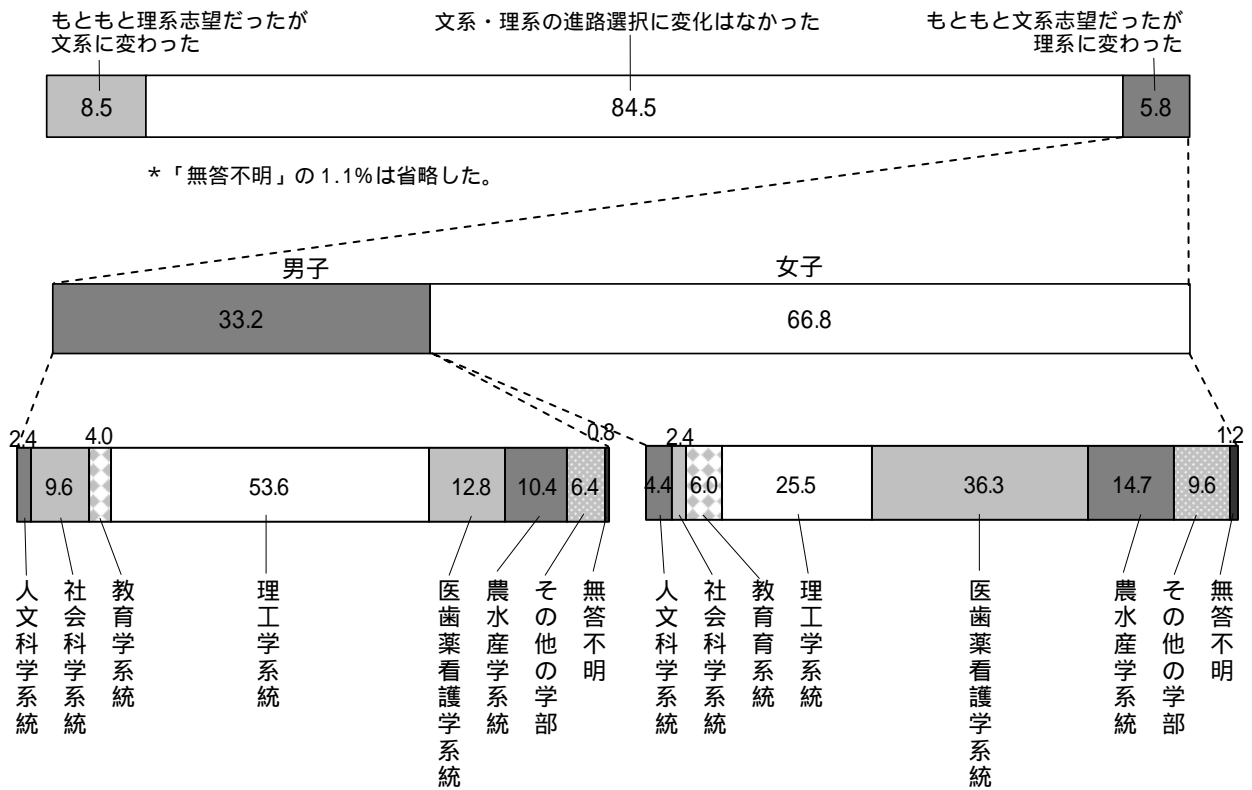
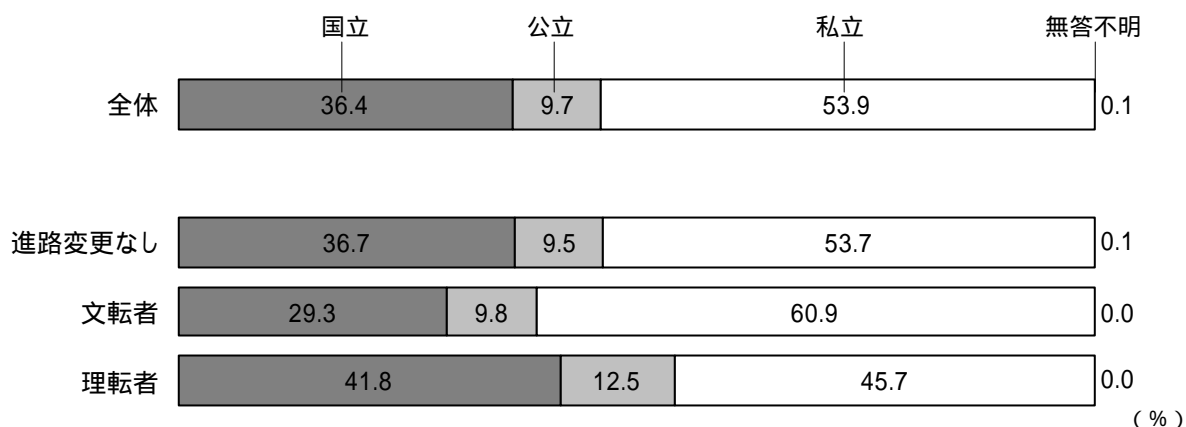


図1 - 8 - 5では、進学した大学の設置元を進路変更別にみた。これによると、文転者は私立大学進学者、理転者は国公立大学進学者が多くなっている。文転する者は苦手な理科の科目を用いずに進学できる私立大学を選択していることがわかる。

なお、ここでも進路変更者が抱える進路選択上の悩みを確認しよう。表1 - 8 - 4に表れているように、進路変更をする者は、「自分の適性（向き不向き）がわからない」「自分の進みたい専門分野がわからない」「自分の就きたい職業がわからない」など、適性を理解できず、将来の見通しがもてないことに悩んでいることがわかる。女子で理転する者は、進路変更をせずに理系を選択した者との差が、他の進路変更者に比べて小さくなっているが、彼女たちは医歯薬看護学系統を目指す者が多く、目的意識が明確なために、このような種の悩みがやや小さくなっているのかもしれない。

いずれにせよ、高校在学中に進路変更を行った者は、進路選択上の悩みを多く抱えがちである。自分の適性や将来の進路について深く考えず、苦手教科を回避するために行うような安易な進路変更を防ぐためにも、自己理解をうながす機会や大学の専門領域、資格取得や職業に関する情報などを十分に提供する必要がある。

図1 - 8 - 5 進学した大学の設置元（高校時代の進路変更別）



* 「進路変更なし」は「文系・理系の進路希望に変化はなかった」、「文転者」は「もともと理系志望だったが文系に変わった」、「理転者」は「もともと文系志望だったが理系に変わった」の数値。

表1-8-4 進路を選択するときの悩み（文理別・高校時代の進路変更別）

男子

(%)

	文系		理系	
	進路変更なし	理系から進路変更	進路変更なし	文系から進路変更
志望する大学・学部に入るのに学力レベルが十分ではない	67.9	67.4	68.2	< 73.7
自分の適性(向き不向き)がわからない	50.4	69.5	54.1	70.5
自分の進みたい専門分野がわからない	44.9	64.2	43.7	63.2
自分の就きたい職業がわからない	52.4	62.6	53.9	< 60.0
進みたい進路の学費が高い	39.1	< 45.3	39.1	40.0
進みたい進路に関する情報が不足している	34.1	36.3	38.7	> 33.7
進路に関する情報の集め方がわからない	29.2	30.0	29.5	28.4
家族と意見が合わない	23.9	< 31.1	20.8	< 27.4
先生と意見が合わない	17.5	19.5	15.9	< 24.2

女子

(%)

	文系		理系	
	進路変更なし	理系から進路変更	進路変更なし	文系から進路変更
志望する大学・学部に入るのに学力レベルが十分ではない	74.8	79.4	74.8	75.6
自分の適性(向き不向き)がわからない	53.3	66.9	58.1	< 64.3
自分の進みたい専門分野がわからない	40.7	61.0	47.3	48.8
自分の就きたい職業がわからない	56.2	69.9	45.9	< 52.6
進みたい進路の学費が高い	40.8	< 47.8	45.5	45.1
進みたい進路に関する情報が不足している	30.7	35.3	37.0	33.3
進路に関する情報の集め方がわからない	27.6	< 36.0	28.5	24.4
家族と意見が合わない	27.6	< 36.8	26.5	27.2
先生と意見が合わない	18.5	19.9	19.7	20.2

* 数値は「よくあった」と「時々あった」の合計。

* 「進路変更なし」は「文系・理系の進路希望に変化はなかった」、「理系から進路変更」は「もともと理系だったが文系に変わった」、「文系から進路変更」は「もともと文系だったが理系に変わった」の数値。

* 専攻の文理別について、「文系と理系の中間」「どちらでもない」と回答した者は表から省略した。

* < > は5ポイント以上の差があったもの、 は10ポイント以上の差があったもの。

(3) 高校時代のコースと大学の専門領域の一致状況

本節の最後に、高校時代に選択した学科やコースと進学した大学での専門領域の不適合について検討したい。図1-8-6は、高校時代の学科やコースごとに、大学での専門領域の文系・理系の別をたずねた結果を表している。

高校時代に「文系中心の学科やコース」に在学していた者は、多くが大学でも文系の専門領域に進んでいる。もっとも多いのが「文系」49.9%で、「どちらかというと文系」23.3%が続く。あわせると四人に三人は文系の専門領域に進んでいることになる。次に多いのは「文系と理系の中間」13.4%であるが、「どちらかというと理系」7.0%、「理系」4.2%と回答する者もいて、「文系中心の学科やコース」に在籍していながら1割強は理系の専門領域に進んでいることがわかる。

同様に、「理系中心の学科やコース」に在学していた者は、「理系」64.8%、「どちらかというと理系」17.3%と8割以上が理系に進学しているが、「どちらかというと文系」は3.9%、「文系」は3.8%となっている。文系から理系への進学者よりも少ないが、「理系中心の学科やコース」の在籍者でも、7.7%は文系の専門領域に進んでいる。ここでもやはり、一定の割合で高校時代の学科やコースと大学での専門領域の間で不適合が存在することが確認できた。

不適合の発生状況を詳しくみるために、表1-8-5で性による違いを表した。これを見ると、「文系中心の学科やコース」から「理系」「どちらかというと理系」に進学した者は、女子に多くなっている。また、「理系中心の学科やコース」から「文系」「どちらかというと文系」に進学した者は、わずかではあるが男子に多い。こうした傾向は、先にみた高校時代の進路変更のパターンと同様である。

図1-8-6 大学での専攻（高校時代の学科・コース別）

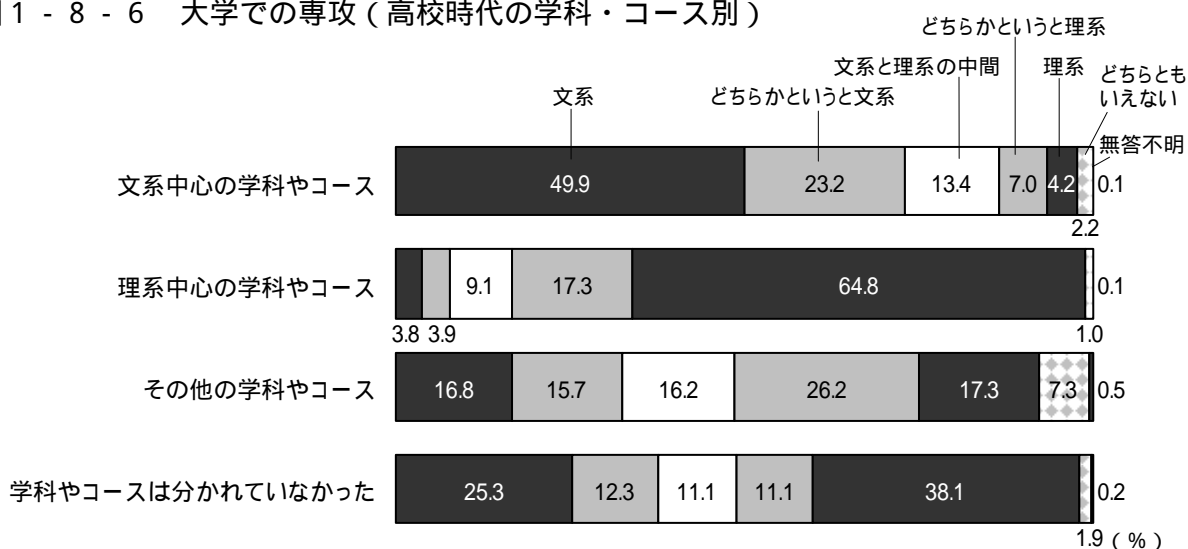



表1-8-5 大学での専攻（高校時代の学科・コース別、性別）（％）

		高校時代の学科・コース			
		文系中心の学科やコース		理系中心の学科やコース	
		男子	女子	男子	女子
大学で専門としている学問領域	文系	51.3	49.0	4.4	3.2
	どちらかという文系	28.3	19.5	4.8	3.0
	文系と理系の中間	13.3	13.5	7.0	11.1
	どちらかという理系	2.9	9.8	13.0	21.4
	理系	2.5	5.3	70.3	59.6
	どちらでもない	1.6	2.7	0.5	1.5
	無答不明	0.1	0.1	0.1	0.1

*  は、高校時代に「文系中心の学科やコース」に在籍しながら大学で理系分野を専門領域としているか、「理系中心の学科やコース」に在籍しながら大学で文系分野を専門領域としている比率。

* 高校時代の学科・コースについて、「その他の学科やコース」「学科やコースは分かれていなかった」と回答したものは表から省略した。

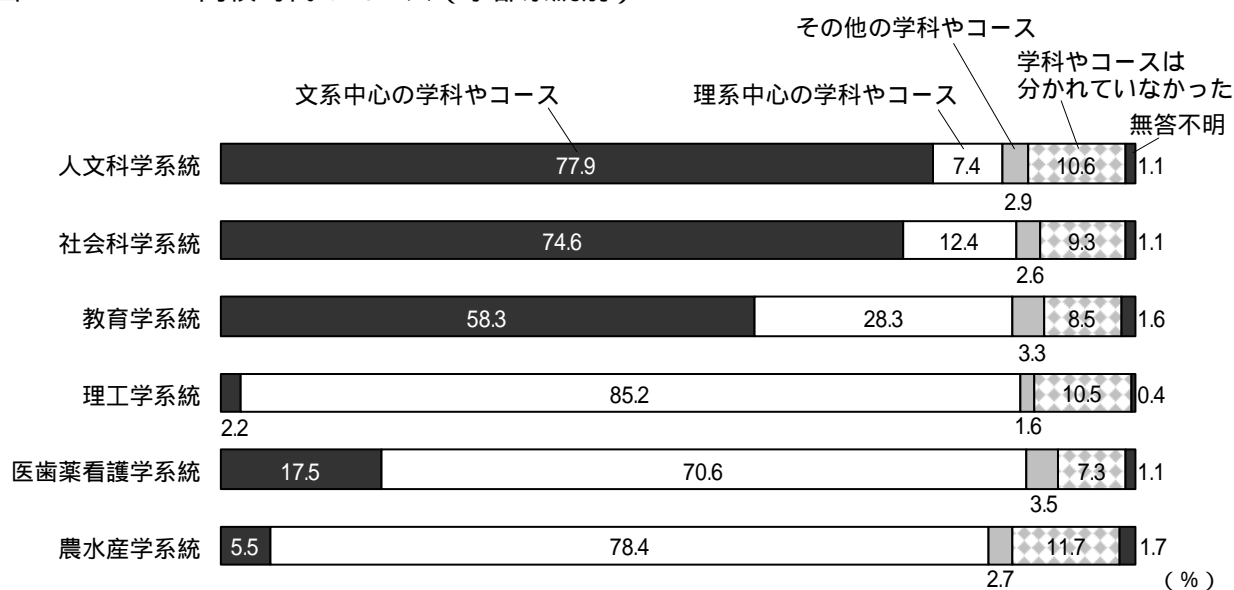
さらに、学部系統ごとに在籍していた学科やコースをみたのが、**図1 - 8 - 7**である。ここからは、次のようなことがわかる。

第一に、文系の学部系統についてであるが、人文科学系統に比べて社会科学系統のほうが「理系中心の学科やコース」に在籍していた者が多い。ここにも、もともと理系だった者は、「数学」的思考を生かせる社会科学系統を選択する傾向が表れている。なお、教育学系統は、理系学科・コースの出身者が3割弱いるが、教員養成課程には理系科目の教員のための課程も含まれているためだと考えられる。

第二に、理工学系統に進学した者の場合、「文系中心の学科やコース」に在籍していた比率が2.2%と低い。この学部系統への進学者には、高校で選択した学科やコースと大学教育との間の不適合が少ないと解釈できる。しかし同時に、いったん高校で文系学科・コースに進学すると、理工学系統への進学が難しくなるという可能性も考えられる。高校時代に文系を選択してしまうと、物理をはじめとする理科科目の履修の関係などで、理工学系統の学部の受験が難しくなることは容易に推察できる。

第三に、同じ理系学部でも、医歯薬看護学系統へは「文系中心の学科やコース」からも17.5%が進学している。これは、高校時代に文系学科・コースに進学した女子が、医療系の資格取得や職業を目標にして進路変更し、進学してくるためであろう。さらに、受験に際して、「物理」「化学」ではなく「生物」「化学」の組み合わせで進学が可能なのも、進路変更を容易にしていると考えられる。

図1 - 8 - 7 高校時代のコース（学部系統別）



* 専攻の学部系統別について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は図から省略した。

9. 大学入学試験

本章の最後に、大学入学試験（以下、大学入試と略記する）の状況を確認しよう。

大学入試は、中等教育と高等教育の接続点にある。その目的が高等教育機関において専門教育を受ける能力の有無を判断するものであるとすれば、その領域の学習に最低限必要となる教科の内容を試験に課す必要があるだろう。その意味で、現在の大学入試はその機能をきちんと果たしているのだろうか。

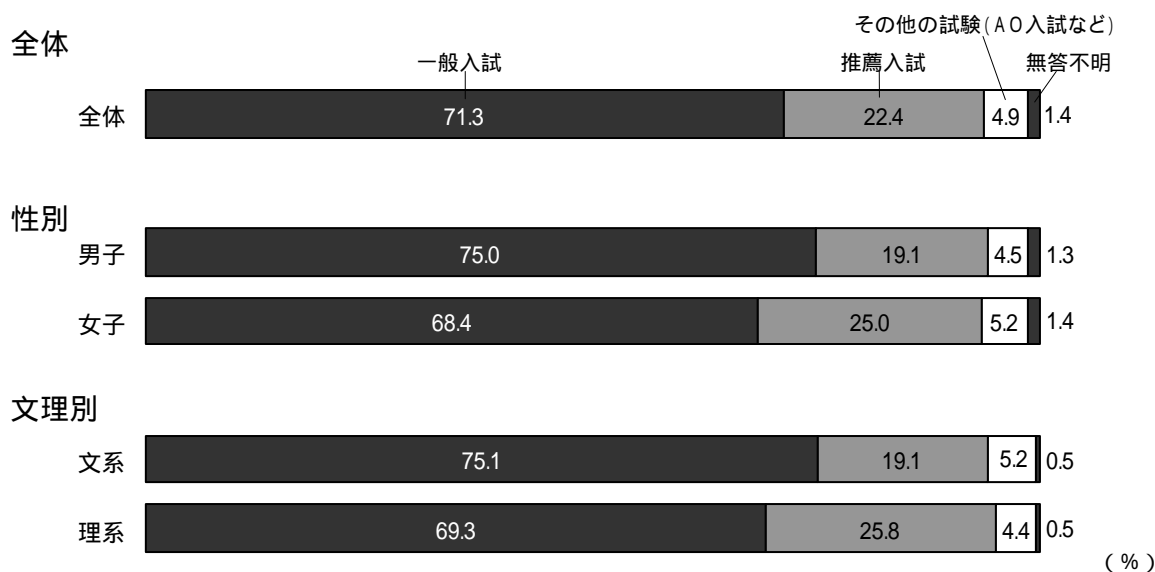
ここでは、それぞれの専門領域に進学した大学生たちが、どのような形態でいずれの教科の試験を受けたかを概観する。また、そうした状況は、専門的な学習をするうえで十分といえるのかどうかを検討していきたい。

（1）選抜の方法

最初に、現在通っている大学に入学するときに、どの形式の入学試験を受けたかをたずねた結果からみてみよう。図1-9-1は、全体、性別、文理別に示した結果である。

全体の数値は、「一般入試」が71.3%、「推薦入試」が22.4%、「その他の試験（AO入試など）」が4.9%となっている。文部科学省が発表している『平成16年度国公立大学入学者選抜実施状況』（2004年）によると、「一般選抜」による入学者の比率は59.4%、「特別選抜」のなかの「推薦入学等」の比率が34.9%、その他の選抜（「アドミッション・オフィス入試」「社会人特別選抜」「帰国子女特別選抜」など）の合計の比率が5.7%となっており、今回の対象者は、1割程度「一般入試」が多く、「推薦入試」が少ないことを踏まえておく必要がある。性別では男子に「一般入試」が多く、文理別では文系に「一般入試」が多くなっている。

図1-9-1 大学入試の選抜方法（全体、性別、文理別）



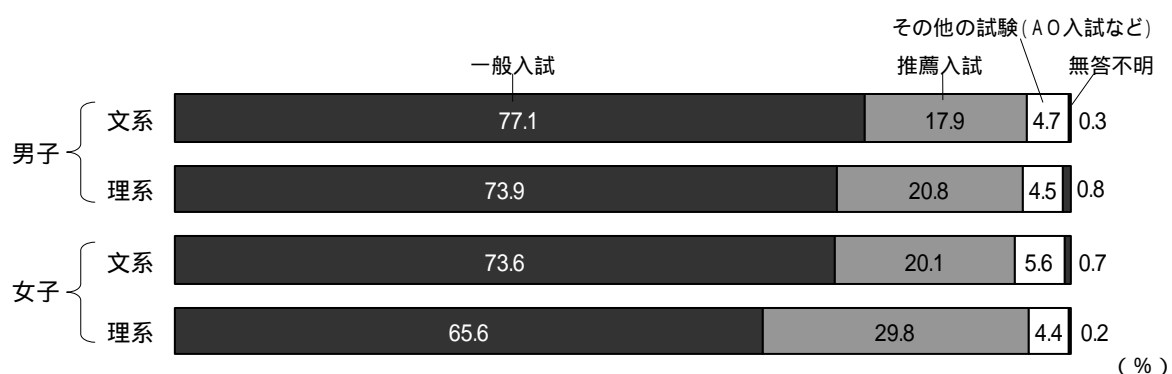
* 専攻の文理別について、「文系と理系の間」「どちらでもない」と回答した者は図から省略した。

さらに、**図1-9-2**では、文系男子、理系男子、文系女子、理系女子の違いを示したが、ここからは理系女子の「推薦入試」の比率が、他より1割程度高いことがわかる。これは、理系女子が多く進学する学部系統の入試形態を反映している可能性が高い。そこで、学部系統別に選抜方法をみたのが、**図1-9-3**である。ここからはやはり、理系女子が多く進学する医歯薬看護学系統で「推薦入試」の比率が高いことが確認できる。

また、他の学部系統に比べると教育学系統が特徴的であり、「一般入試」の比率が高い。教育学系統は、私立大学の定員が少なく、地方国公立大学への進学者が多い。教育学系統で「一般入試」が多いのは、そうした地方の国公立大学が「推薦入試」や「その他の試験」の形態の選抜をあまり行わないことが原因と考えられる。ちなみに、**図1-9-4**では、設置元別に選抜方法を示したが、「一般入試」は国立大学に多く、「推薦入試」や「その他の試験」は私立大学に多くなっている。

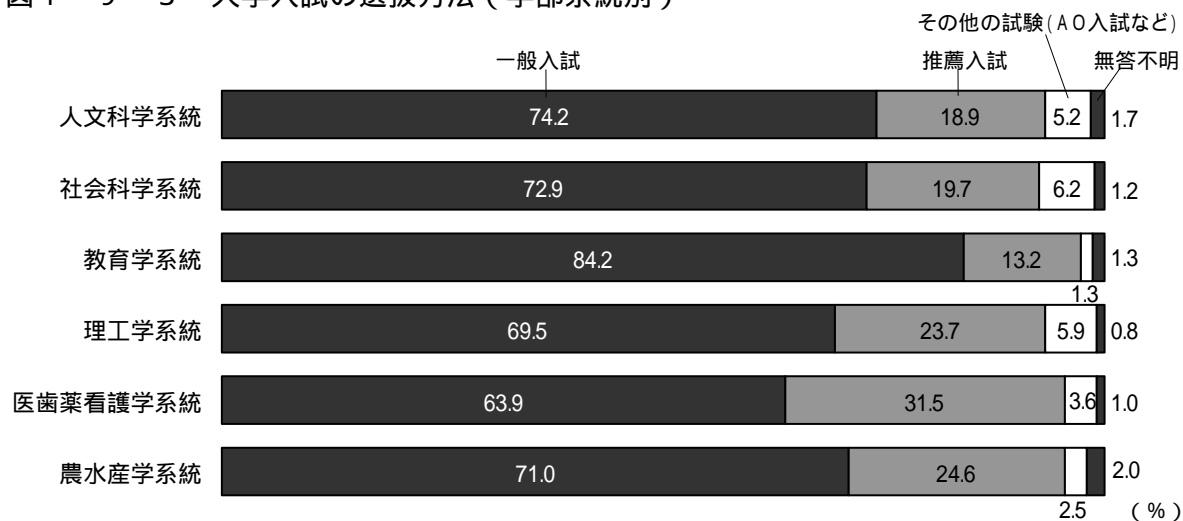
続いて、21世紀COEプログラム（文部科学省が行う21世紀的研究教育拠点の形成のための重点的支援、以下では単に「COE」と略記）の採択回数別に選抜方法を示したのが、**図1-9-5**である。ここからは、COE採択回数が多い大学ほど「一般入試」の比率が高く、その回数が少ない大学ほど「推薦入試」の比率が高くなる傾向が読み取れる。一般にCOE採択回数が多い大学ほど入試難易度が高いが、こうした大学では「一般入試」による選抜が入学者の多くを占める。それに対して、入学難易度が低い大学では、「推薦入試」により入学者を早期に確保する必要があると考えられる。そのために、COE採択回数による差が生じるのであろう。

図1-9-2 大学入試の選抜方法（性別・文理別）



* 専攻の文理別について、「文系と理系の中間」「どちらでもない」と回答した者は図から省略した。

図1-9-3 大学入試の選抜方法（学部系統別）



* 専攻の学部系統別について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は図から省略した。

図1-9-4 大学入試の選抜方法（設置元別）

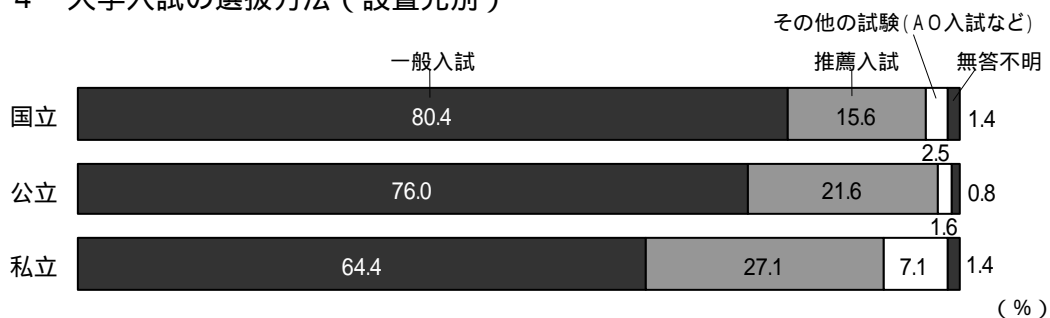
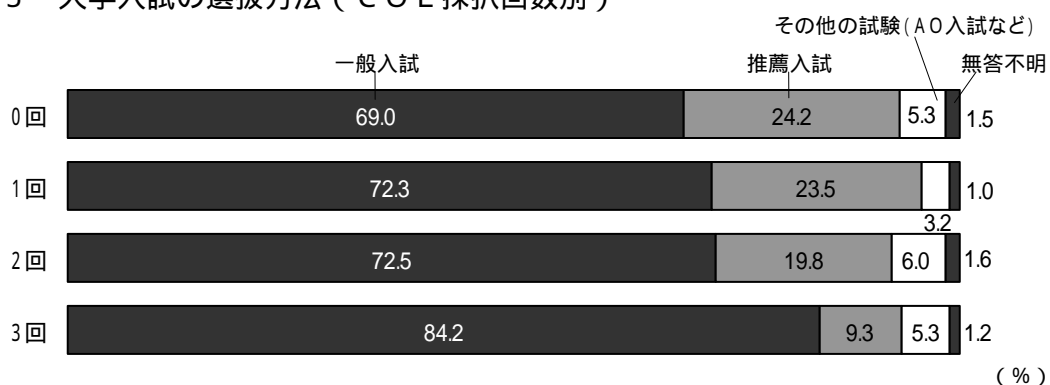


図1-9-5 大学入試の選抜方法（COE採択回数別）



* COE採択回数は、回答者が所属する大学の過去3年（平成14～16年）のCOE採択回数を示す。

(2) 受験した試験のタイプ

それでは、今回の調査対象者は、どのような種類の入学試験を経験したのだろうか。調査では、最終的に入学した大学を問わず、大学入試センター試験（以下、センター試験と略記）の受験に用いた教科、および、国公立大学二次試験、もしくは私立大学試験（以下、二次試験、私大試験と略記）の受験教科をたずねている。いずれかの教科に をつけた場合、その試験を受験したものとみなし、ここから「センター試験＋二次試験・私大試験」の受験者、「センター試験のみ」の受験者、「二次試験・私大試験のみ」の受験者、いずれの試験も「利用していない」者の4タイプに分類した。なお、「センター試験＋二次試験・私大試験」の受験者は、3種の試験をすべて受験した者、センター試験と二次試験を受験した者、センター試験と私大試験を受験した者が含まれる。また、「二次試験・私大試験のみ」の受験者の大部分は、私立大学の受験者と想定されるが、一部の公立大学で二次試験のみを課しているケースがあるため、このように表記する。

図1-9-6から全体の状況を見ると、今回の対象者のうち65.6%は「センター試験＋二次試験・私大試験」の受験者であった。さらに、「センター試験のみ」8.5%、「二次試験・私大試験のみ」14.6%、いずれの試験も「利用していない」11.4%という結果であった。

これを、現在の大学に入学するときの選抜方法の違いでみると、図1-9-7のようになる。一般入試で入学した者は、圧倒的に「センター試験＋二次試験・私大試験」の受験者が多く、いずれにも をしなかった「利用していない」は0.4%に過ぎない（これは、「無答不明」を示すと考えられる）。一方、推薦入試で入学した者は、「利用していない」が39.5%ともっとも多く、彼らは「小論文」を含めていずれの教科も受験せずに大学に進学したと推測される。続いて、「二次試験・私大試験のみ」が32.3%と多い。このなかには、「小論文」だけで入学した者も多く、推薦入試で入学した者は教科の試験を課されていない者が存在する。

図1-9-8では、学部系統による違いを示した。これをみると、学部系統による差異は、それほど大きくないことがわかる。たとえば、教育学系統で若干、「センター試験のみ」の受験者が多いなどの傾向が表れているが、いずれの学部系統も6～7割程度が「センター試験＋二次試験・私大試験」の受験者で占められている。

図1-9-6 受験した試験のタイプ



図1-9-7 受験した試験のタイプ（選抜方法別）

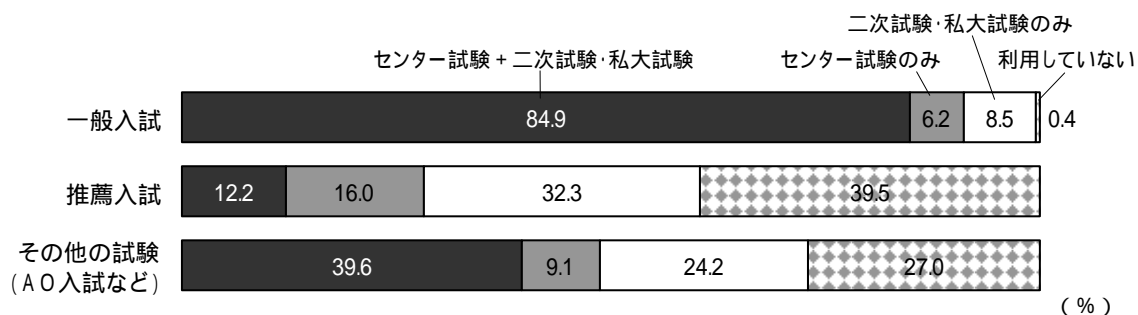
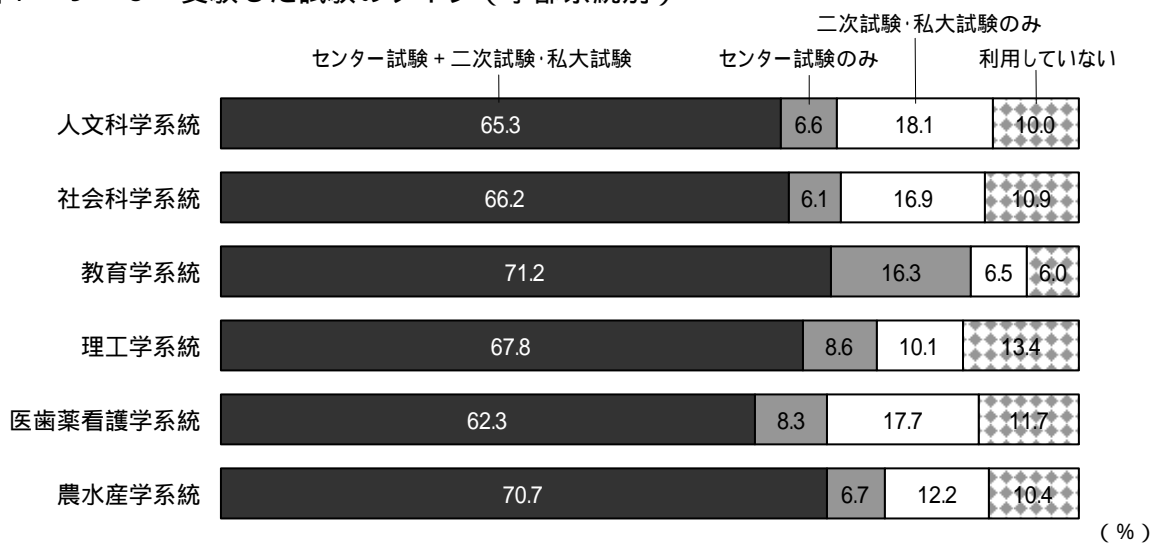


図1-9-8 受験した試験のタイプ（学部系統別）



* 専攻の学部系統別について、上記以外の学部・学科、無答不明の者は図から省略した。

(3) 受験に用いた科目

以下では、学部系統ごとに大学入試で用いた科目数と受験科目をみていこう。

人文科学系統

最初に、人文科学系統である。図1-9-9は、人文科学系統に進学した学生が、大学入試で用いた科目数を示している。センター試験での科目数は、「3科目」がもっとも多くて21.0%、続いて「5科目」18.9%、「6科目」16.6%となっている。次にみる社会科学系統と同様に、「3科目」の受験者が相対的に多い。センター試験を利用する私立大学が増えていることなどが反映しているものと推察される。一方、国公立の二次試験と私立大学試験でも、「3科目」の受験者が多く、41.8%と集中しているのが特徴である。「1科目」や「2科目」も1割以上で、「4科目」以上を試験に課す大学は、他の学部系統よりも少ない。

それでは、具体的にどのような教科・科目の試験を受けているのだろうか。それぞれの教科について、「センター試験+二次試験・私大試験」での利用率、「センター試験のみ」での利用率、「二次試験・私大試験のみ」での利用率、いずれの試験も「利用していない」比率を示したのが、図1-9-10である。これをみると、国語と英語(外国語)は、「利用していない」が1割台であり、8割以上の学生が何らかの形で受験に用いていることがわかる。続いて多いのが数学であり、地歴・公民の諸科目は意外に利用率が低い。数学と地歴・公民のなかから、いずれか1科目を受験に用いるケースが多いためであろう。理科のなかでは、生物が「センター試験のみ」での利用率が高く、3割を超えている。

人文科学系統は、次に取り上げる社会科学系統と同様に、センター試験では5科目程度まで、二次試験・私大試験では3科目を選択する者が多く、教科では、国語と英語(外国語)に加えて、数学と地歴・公民のなかから1科目を選択するというパターンが多いようである。

図1-9-9 大学入試で用いた科目数(人文科学系統)

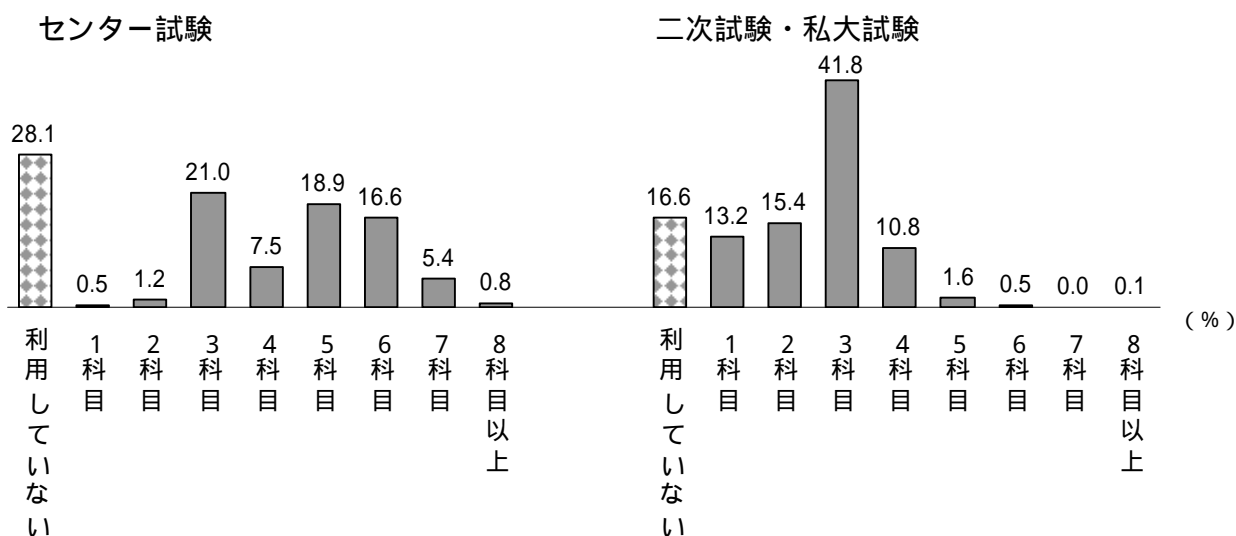
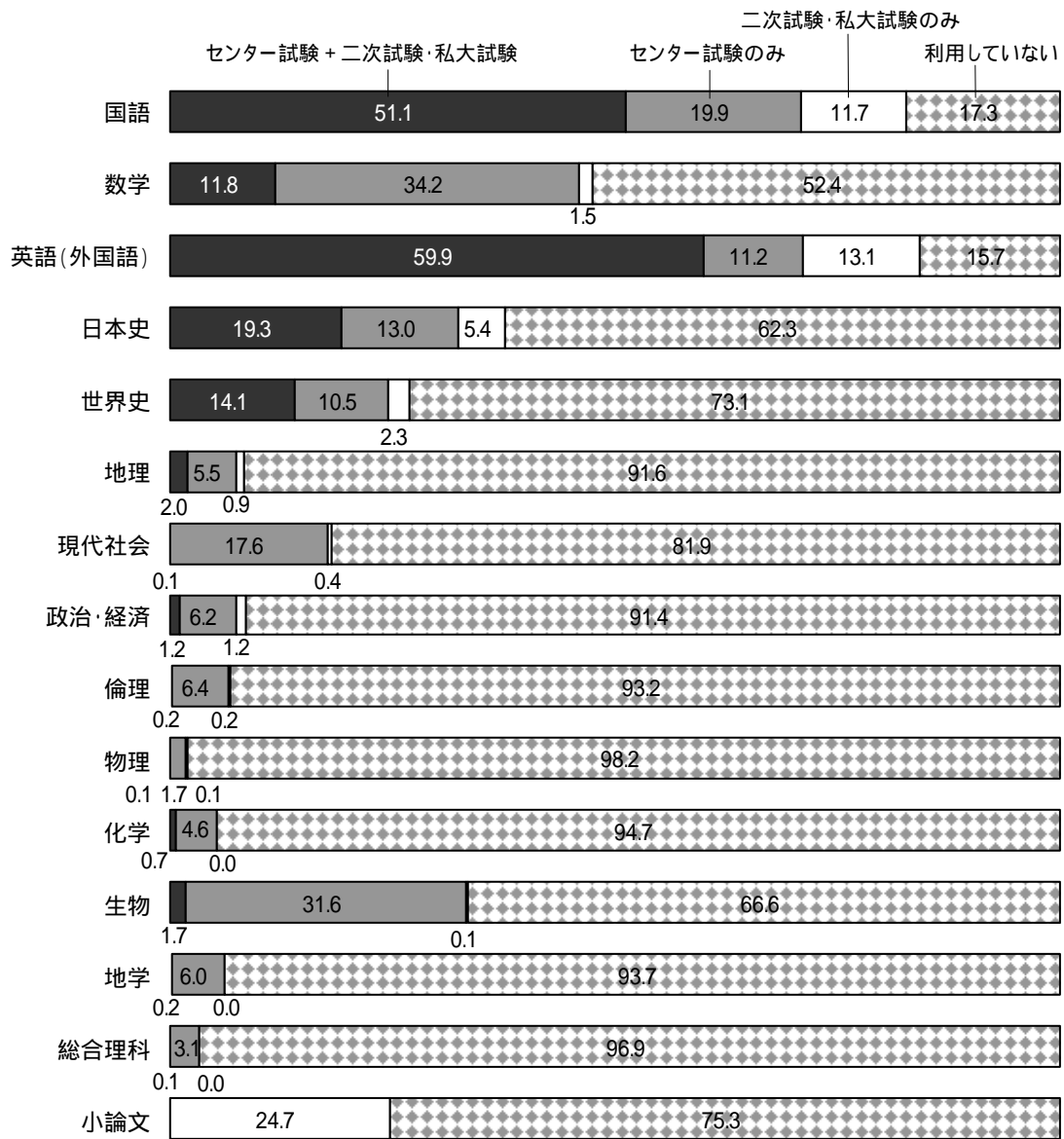


図1-9-10 受験に用いた科目（人文科学系統）



社会科学系統

続いて、社会科学系統に進学した学生が大学入試で用いた科目数と受験科目である。

まず、大学入試で用いた科目数（図1-9-11）であるが、状況は前述した人文科学系統に似ている。センター試験で用いた科目数は、「3科目」「5科目」「6科目」が多く、それぞれ2割前後いる。国公立大学の二次試験や私立大学試験は、「3科目」での受験が半数近くもいる。「1科目」と「2科目」の合計も2割強であり、人文科学系統よりは少ない。わずかながら、人文科学系統よりも受験科目数が多いことがわかる。

次に、受験に用いた教科・科目についてみてみよう。図1-9-12に示したように、全体の傾向としては人文科学系統に似ている。国語と英語（外国語）の2科目に加えて、数学と社会のなかから1科目を選択するというパターンである。また、理科のなかでは、センター試験で生物を受験する比率が比較的高いという点も、同様である。

異なる点としては、数学で「センター試験+二次試験・私大試験」の利用者が多いことである。社会科学系統のなかには、経済学・経営学など数学が必要となる専門領域が含まれるため、人文科学系統よりも数学を用いた学生が多いものと推察される。同じように、地歴・公民では政治・経済を受験している比率が、他の学部系統よりも高い。とはいえ、政治・経済を何らかの形で受験に用いた学生は19.2%と2割に満たない。この学部系統は、政治学、経済学、経営学などが中心となっているが、この科目を受験で用いずに入学するものが8割存在する状況で、大学での専門領域の履修に支障がないのか、検討すべき課題である。

図1-9-11 大学入試で用いた科目数（社会科学系統）

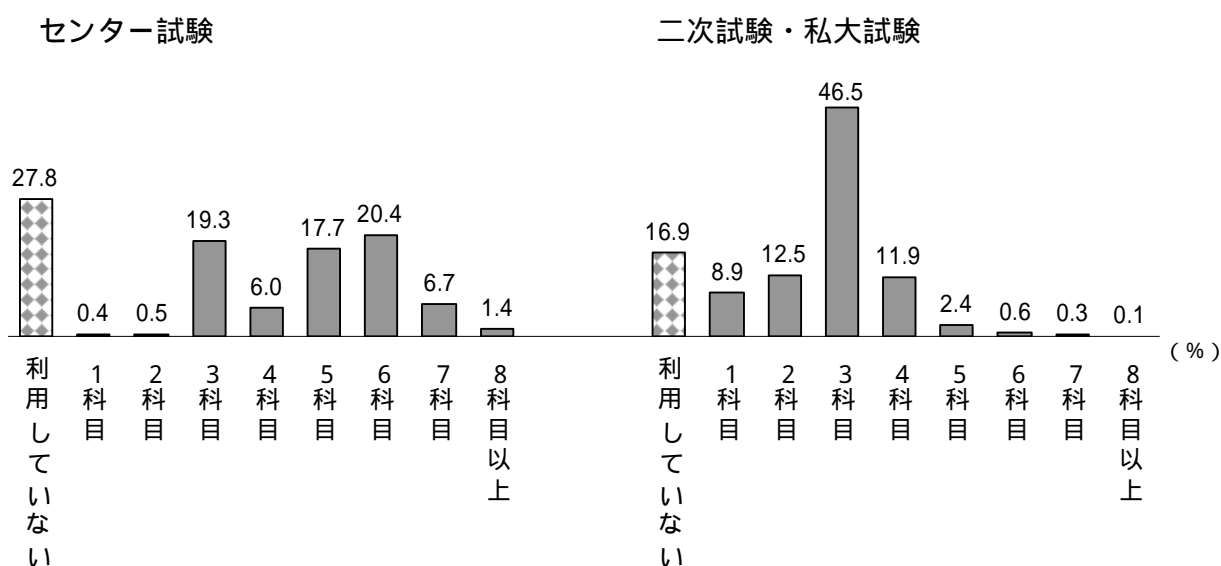
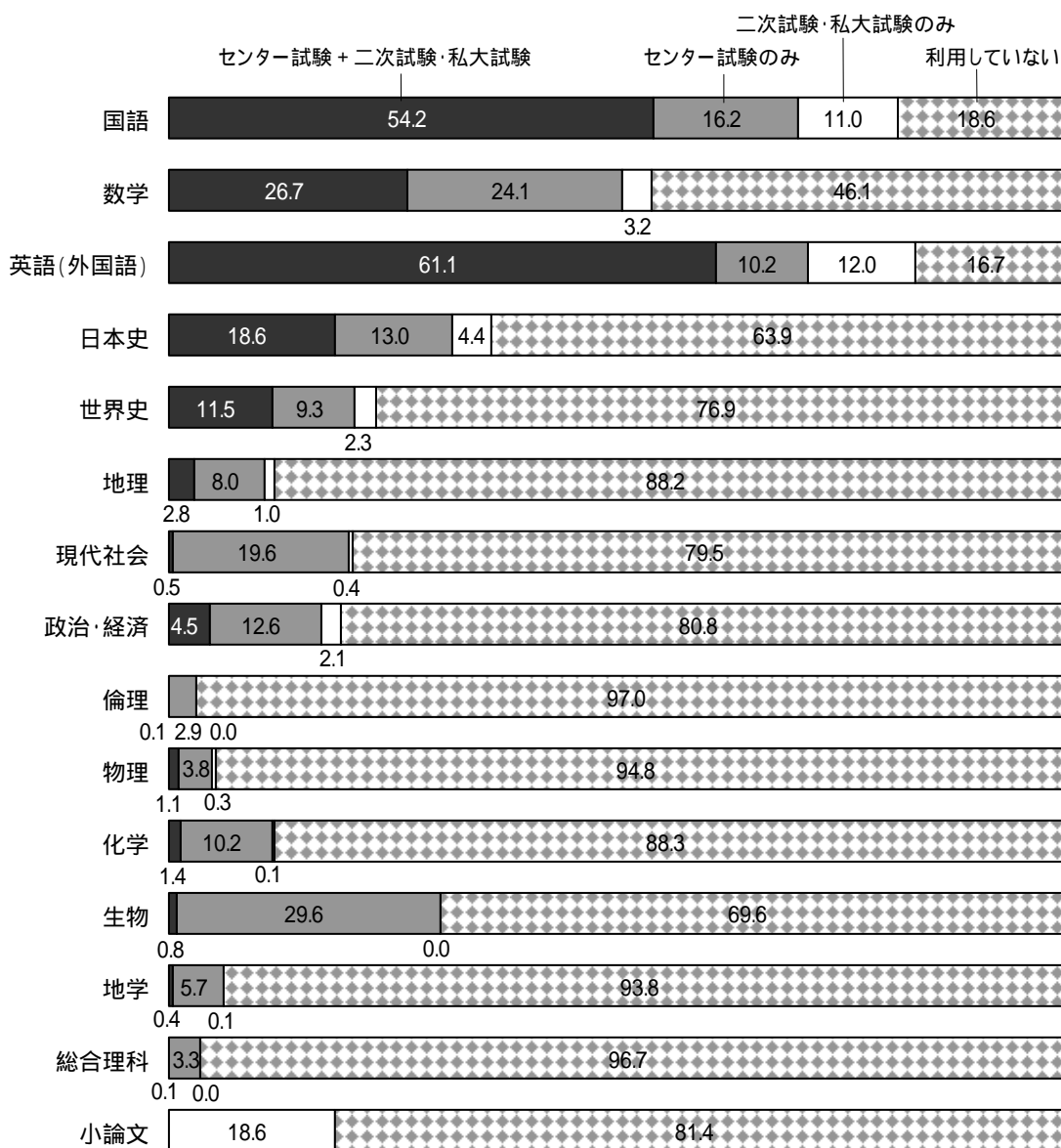


図1-9-12 受験に用いた科目（社会科学系統）



教育学系統

次に、教育学系統に進学した学生が大学入試で用いた科目の数と受験科目について概観しよう。

教育学系統の学生は、センター試験では多くの科目を課されるが、国公立大学の二次試験・私立大学試験で課される科目数は少ないという傾向が現れている(図1-9-13)。センター試験レベルの内容とはいえ、幅広い教科知識を身につけているかが判断されるようである。

センター試験については、「利用していない」の比率が他の学部系統より少ない。これは、国公立大学への進学者が多いためであろう。科目数は、「1科目」から「4科目」といった少ない数の比率が低く、それに対して、「5科目」が34.2%、「6科目」26.1%、「7科目」が15.4%となっている。一方、国公立大学の二次試験・私立大学試験をみると、「1科目」が3割でもっとも多くなっている。「3科目」に集中していた人文科学系統、社会科学系統よりも、科目数が少ないことがみてとれる。

それでは、具体的に受験で用いた教科・科目の状況はどのようになっているのだろうか。

図1-9-14からわかるように、センター試験の科目数が多く、二次試験・私大試験の科目数が少ないため、全体に「センター試験のみ」の比率が高くなっている。国語、数学、英語(外国語)は、センター試験の受験者が8割を超えている。また、地歴・公民や理科でも、他の学部系統に比べるとセンター試験の利用率が高い。生物は、5割を超える者が受験で利用している。しかし、その一方で、「センター試験+二次試験・私大試験」や「二次試験・私大試験のみ」など、より深い内容についての試験を受けている者が、いずれの教科でも少ないという特徴をもつ。国語、数学、英語(外国語)のように、他の学部系統では二次試験や私大試験で用いている者が5割を超えることが多い教科でも、教育学系統は3~4割程度である。ここからも、教育学系統は、深い知識・技能より、幅広い知識・技能を多様に備えていることが求められている様子がうかがえる。

図1-9-13 大学入試で用いた科目数(教育学系統)

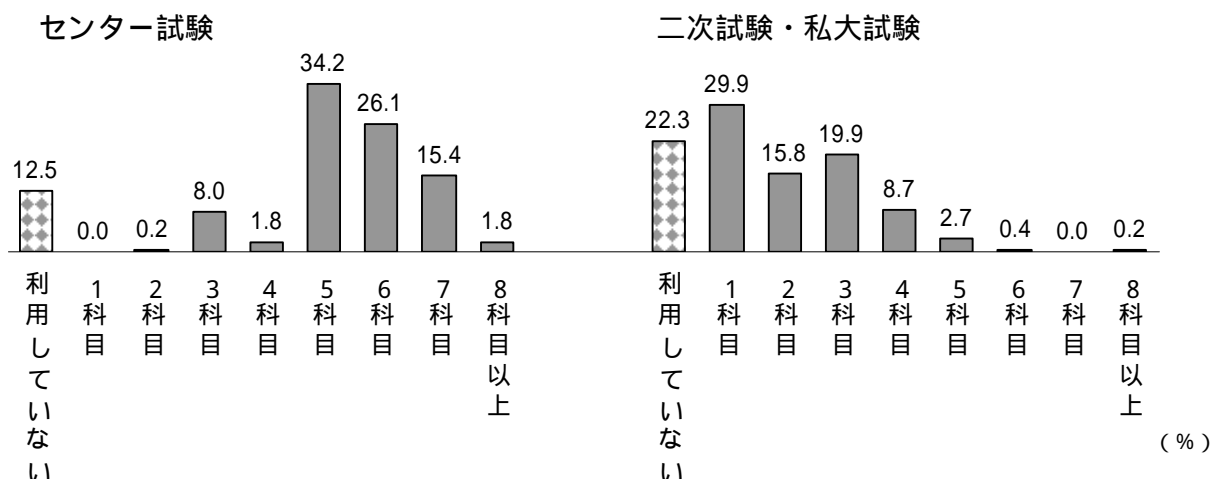
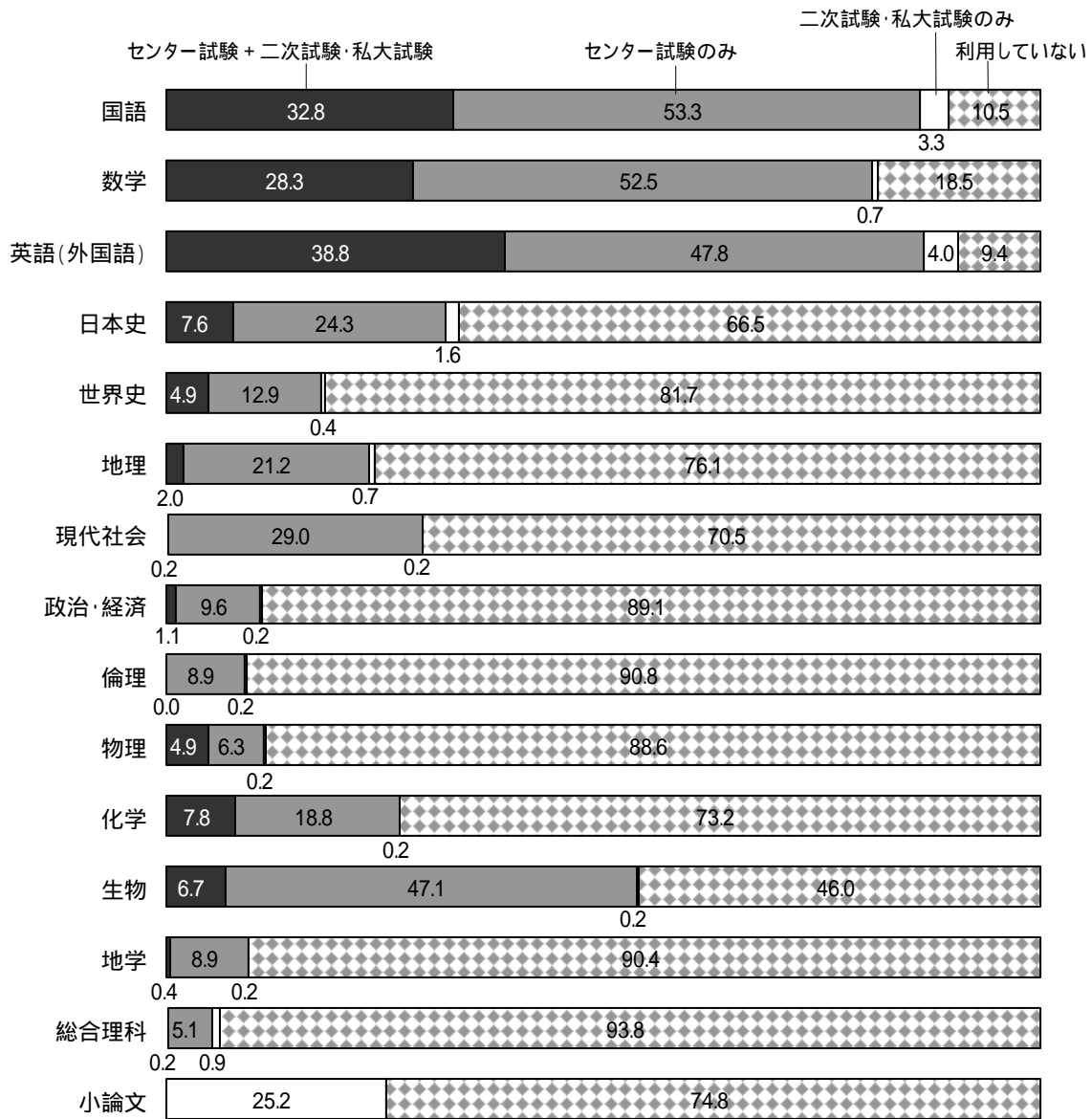


図1-9-14 受験に用いた科目（教育学系統）



(%)

理工学系統

それでは、ここからは理系学部の特徴をみていこう。最初に、理工学系統に進学した学生の結果である。

図1-9-15は、理工学系統の学生が、大学入試で用いた科目の数を示している。これを見ると、理工学系統の学生は、文系の諸系統に比べると、より多くの科目が受験に課されていることがわかる。最初に、センター試験であるが、もっとも多いのは「6科目」29.3%であり、つづいて「7科目」22.9%となっている。これらの比率は、先に述べた人文科学系統、社会科学系統とは大きく異なっており、センター試験で多くを課される傾向があった教育学系統よりも高い。後述するが、農水産学系統と近い値であり、全般的に理系の学部系統は、センター試験で多くの科目を課されていることがわかる。

さらに、国公立大学の二次試験・私立大学試験であるが、こちらは「3科目」がもっとも多く、この点に関しては人文科学系統、社会科学系統と同様である。ただし、その割合は3割に満たない一方で、「4科目」以上を用いたという割合は四人に一人と多い。ここでも、文系の学部系統に比べると、たくさんの科目が課されるケースが多いようである。

それでは、用いている教科・科目はどうであろうか。図1-9-16をみると、国語と地歴・公民の諸科目は「センター試験のみ」が多く、数学、英語（外国語）、物理、化学で「センター試験+二次試験・私大試験」の割合が高くなっていることがわかる。理科のなかでも、生物、地学、総合理科を用いている比率は低い。また、地歴・公民のなかでは地理や現代社会を「センター試験のみ」で受験する者が3割程度いる。他の学部系統との相対的な比較でいえば、大学での専門教育に必要となる教科をまんべんなく受験で試されている印象を受ける。文系の学部系統では地歴・公民や理科のなかの特定の科目が突出することはなかったが、物理や化学の受験率が高くなっている。ただ、そうはいつでも、理工学系統に進学した4割が物理や化学を受験していないことも、大学の専門教育を考えるとときには配慮すべきであろう。

図1-9-15 大学入試で用いた科目数（理工学系統）

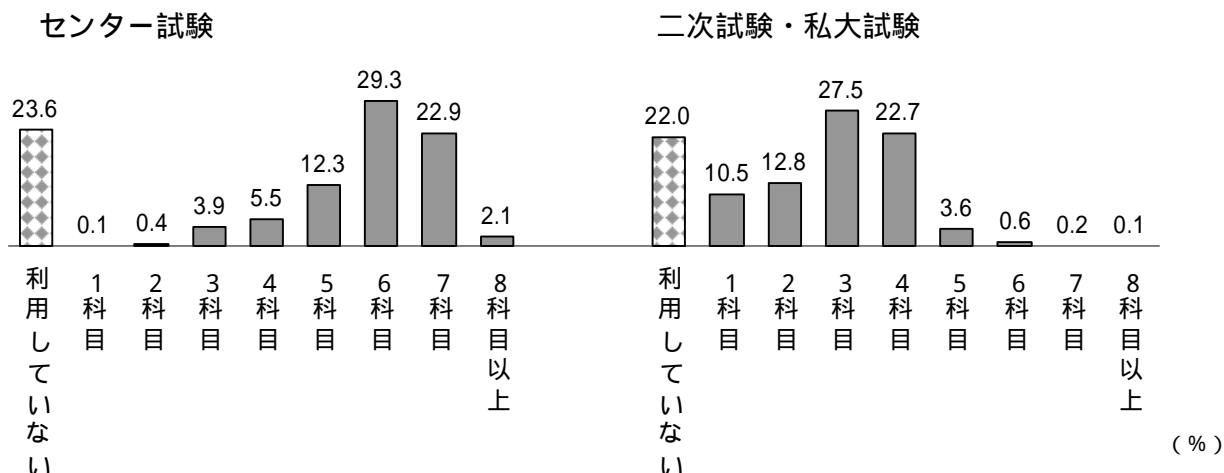
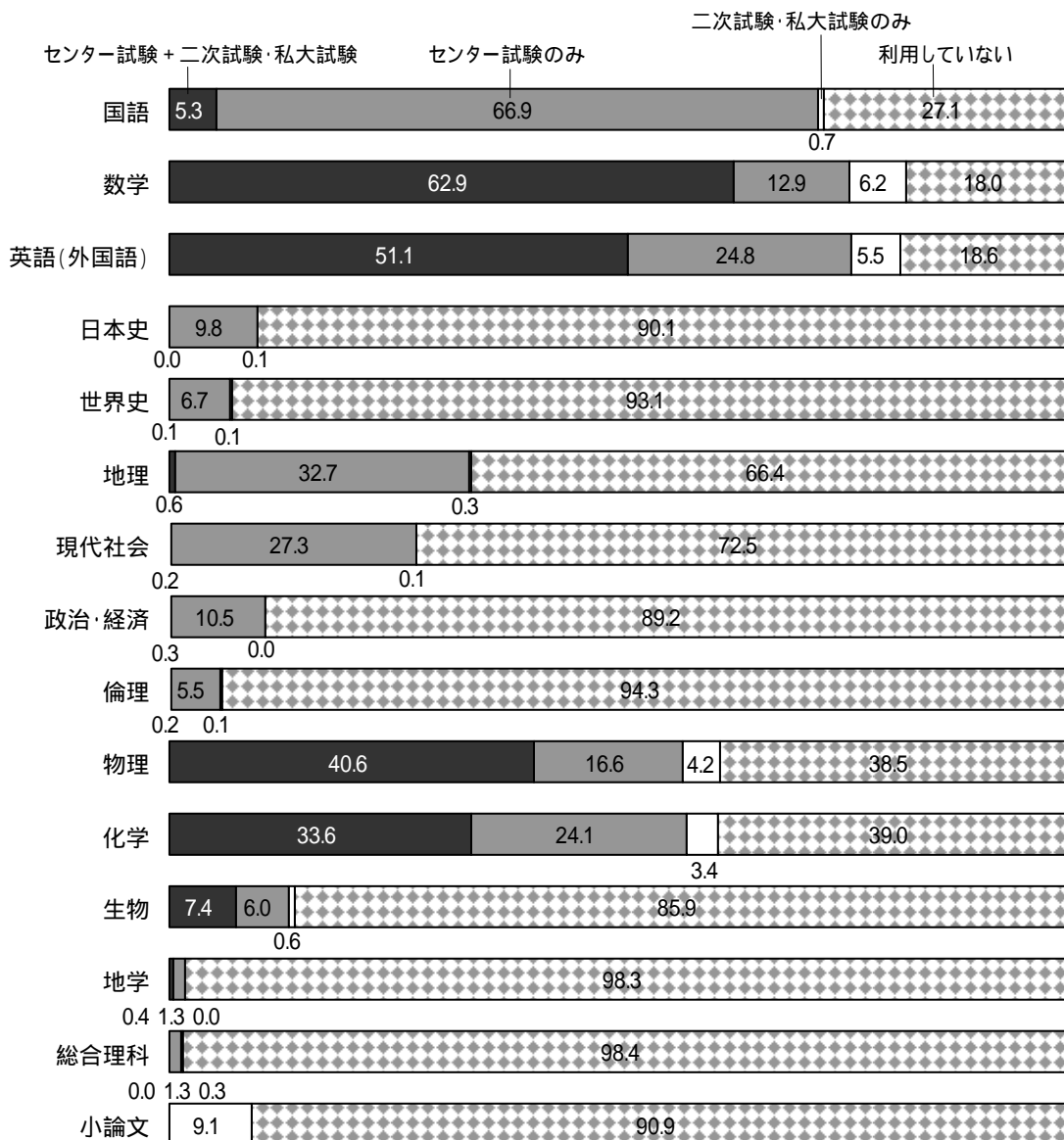


図1-9-16 受験に用いた科目（理工学系統）



(%)

医歯薬看護学系統

次に、医歯薬看護学系統の特徴である。彼らは、大学入試に際して、どのような教科・科目を用いて受験したのだろうか。

まずは、用いた科目数（図1-9-17）を確認しよう。センター試験の状況からは、「利用していない」が約3割と、他の学部系統よりも多いことがわかる。先にみたように、この学部系統は「推薦入試」による入学者が多いため、センター試験を受験しないケースが多いようである。次に多いのは「6科目」23.9%、「5科目」19.9%となっており、理工学系統ほどではないが、人文科学系統や社会科学系統よりは科目が多くなっている。さらに、国公立大学の二次試験・私大試験であるが、こちらは「1科目」から「4科目」まで回答が分散している。小論文の受験率が高いことから、「推薦入試」で小論文のみを課すケース、小論文に1～2科目程度をプラスするケースなども多いものと推察される。

それでは、具体的に受験に用いている教科・科目の状況（図1-9-18）は、どうなっているのだろうか。他の学部系統との比較では、やはり小論文が37.8%と多くなっている。数学と英語（外国語）は「センター試験＋二次試験・私大試験」を受ける比率が高く、国語は「センター試験のみ」の比率が高い。この点は、理工学系統や農水産学系統と変わらないが、推薦入試が多いため全般に利用率は低めである。理工学系統と異なるのは、生物を用いている割合が高く、理科は生物と化学の組み合わせで受験している様子が見られる。とはいえ、この傾向も、農水産学系統ほど顕著ではない。

入試で用いた科目数、実際に用いた教科・科目のいずれの傾向も、「推薦入試」による入学者が多いことの影響を受けており、他の理系学部の系統に比べてもたくさんの科目を受験で課されることなく大学に入学する者が多いようである。

図1-9-17 大学入試で用いた科目数（医歯薬看護学系統）

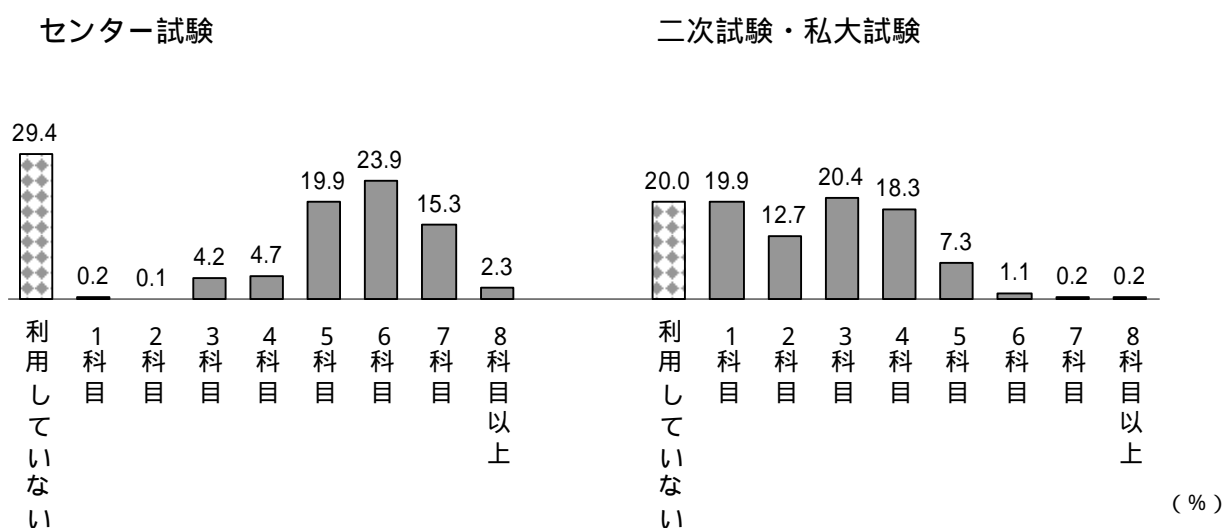
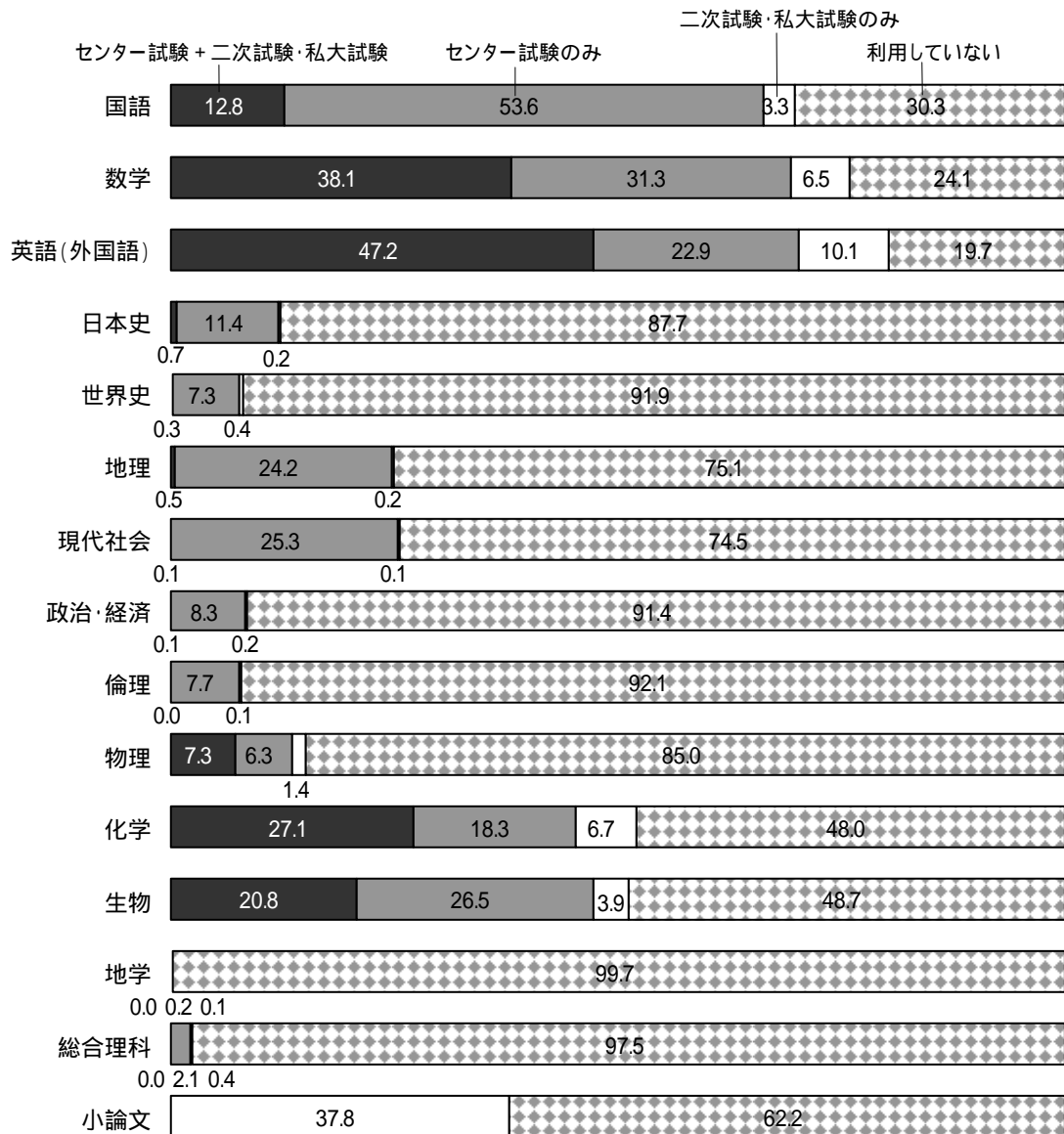


図1-9-18 受験に用いた科目（医歯薬看護学系統）



(%)

農水産学系統

最後に、農水産学系統の特徴をみていこう。

図1-9-19では、農水産学系統に進学した学生が大学入試で用いた科目の数を示している。全体的には、理工学系統の傾向に似ているが、国公立大学の二次試験や私立大学試験で課される科目数は、わずかに少ないようである。

センター試験の科目数は、「6科目」がもっとも多く30.5%であり、「7科目」21.6%、「5科目」16.9%と続く。「6科目」が最頻値である点は、他の理系の学部系統と同様であり、「3科目」や「5科目」の比率が高かった文系の学部系統よりも課される科目数が多いことを示している。二次試験・私大試験は、「3科目」という回答がもっとも多い。しかし、理工学系統に比べると分散が大きく、「1科目」(17.1%)や「2科目」(15.1%)という回答が多いのが特徴である。

では、用いている教科・科目の状況はどうであろうか。図1-9-20に示したように、国語と地歴・公民の諸科目は「センター試験のみ」が多く、数学、英語(外国語)、化学、生物で「センター試験+二次試験・私大試験」の割合が高くなっていることがわかる。このような傾向は理工学系統と似ているが、物理の比率が理工学系統で高かったのに対して、農水産学系統では低い。また、地歴・公民のなかでは地理や現代社会を「センター試験のみ」で受験する者が3割程度存在していて、この傾向は理系の学部系統に共通している。比較的、理系に人気がある教科のようである。

農水産学系統も理工学系統と同様に、大学での専門教育に必要となる科目を受験である程度、課されている印象を受ける。ただ、そうはいても、進学者の3~4割が化学や生物を受験していないことも事実である。入試によって専門教育を受けるうえでの資質や能力を判断されなかった者を、大学側がどのように配慮して教育するかは大きな課題といえよう。

図1-9-19 大学入試で用いた科目数(農水産学系統)

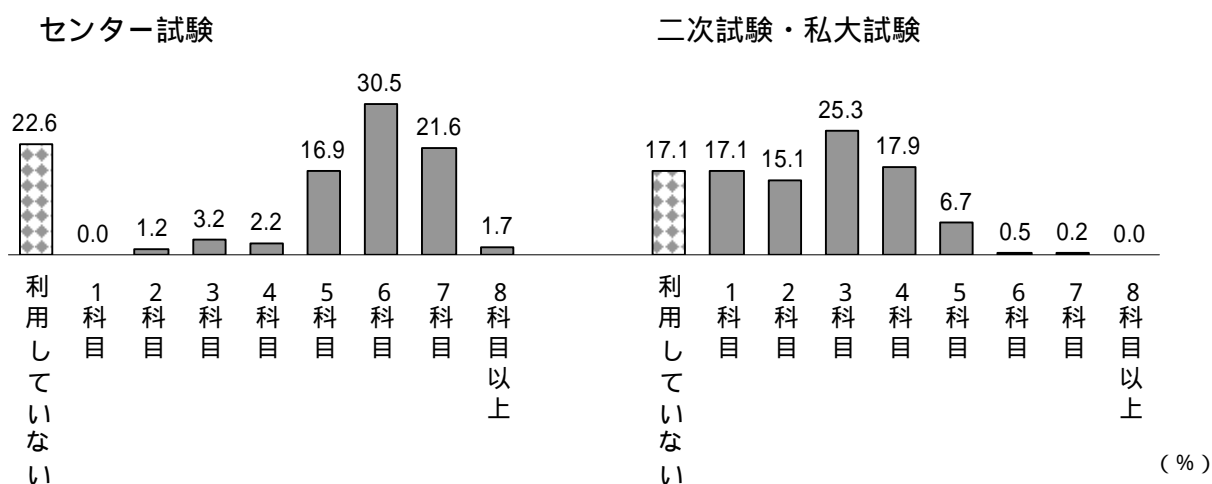


図1-9-20 受験に用いた科目（農水産学系統）

